
仮題「シャングリラ」第三章

月読天舞

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

仮題「シャングリラ」第三章

【Nコード】

N8359C

【作者名】

月読天舞

【あらすじ】

世界の破滅を次々と告げる 能力者。唯一運命を変えたとされる 能力者リユーヤ・アルデベータ。クライ王国女王アレクシーナ・クライ。復活した少女リーン・サンドライト。日本のエージェントでリユーヤの護衛となった水無月小夜子。日本の紫炎教教祖紫炎こと矢口涼子。クライ王国エージェント西条真治。新登場ナンバーオブリスト666の男。暴かれていく悪魔の正体。神の手順が勝るのか？描かれる登場人物達の思いが勝るのか？人類の命運を賭けた最後の戦いが描かれる必読の第三章。今、開幕

第1話「始動」

「世界平和統一連合の発起と参加を呼びかける」
アレクシーナが海外に向けて発信した。

その骨子は簡単で明白な物だった。

- ・ 強国からの外圧による主権への侵害に対抗する事
- ・ 軍事力を統合し各国の軍事的負担を軽減する事
- ・ 軍事力によるあらゆる問題を解決する手法の放棄
- ・ 軍事力はあくまで主権の侵害に対する自衛の為にしか使わない
- ・ 経済的、軍事的相互協力
- ・ 各国の主権と違いを認め合い平和的かつ恒久的発展に相互の国同士が協力し合う事。その協力は利己的であってはならない
- ・ 連合内部での決定は各国から選出された議員による話し合いの上、議会の投票によって決まる。（議員は様々な状況を合理的かつ明快にした分析により各国から数人選出される。詳細は別紙参照）

2

「こんな所でいいのだろうな……」
アレクシーナは、執政室で座って紅茶を飲むリーン・サンドライトにそう言った。

「そうですね……この先、世界はアレクシーナ様の理想に傾きます。扱いを間違えると大変なのはアメリカと日本でしょうか？」
「そういう事になるな……私はアメリカという国も日本という国も嫌いではないが……力が強すぎるというのは困りものだ……」

リーンはフツと微笑を浮かべる。

「お分かりでしょうが、現状でこの方針で行くのならば、アメリカや日本の協力はかせません。」

「分っている……だが、あまり早い時期に参加されると我々の理念は実質無価値のものとなる……かといってアメリカや日本の敵勢力になるのは、本来の趣旨と違う……あくまで恒久的な平和と人類の発展が我々の目的だからな……」

「アレクシーナ様は多少傲慢にならなければならないでしょう。」
「アメリカや日本のような強国を利用しろ……そういう事だな……」

「そうです。おいそれと利用されてくれる相手でもなく、またプライドも高い国ですから、簡単な話ではありませんが……」
「何故、政治という物はこうも難しいのだろうな……」
「権力という物が、やはり人間の弱さを巧みにつくように出来ているからとしか言い様がありません。」

「疑心暗鬼による腹の探り合いが外交というのは出来れば終わりにしたいものだ……」

「それは……このシステムが完成しても変わらないと思います……ただ、これがうまく行けば、人類は新たな段階に入るでしょう……」

「どちらにせよ、私は、お前を信じるしかない。」
「リーンはニコリと笑う。」

「アレクシーナ様、あなたは聡明な方です。私が例え何を言おうと御自分で判断するだけの能力をお持ちです。能力などに頼らざるを得ない私とアレクシーナ様はやはり、違うのです。」

アレクシーナも紅茶を啜る。

「リユーヤやサイジョーを本当にあのシナリオに組み込んでいいのか……私は悩む……」

「私にも判断出来ませんが……細かい戦略や戦術はあの方にまかせて差し支えないと思います。」

「こうなつてくると、私は只の神輿だな……」

「人材を使いこなす……それも立派な王の仕事です。あまりお

気になさらぬように……」

「私は人を利用するのが好きではない……」

「目標が定まればそういう訳にはいきませんが、現状の世界では利用する気が無い者は利用されるだけです。政治の世界では尚更の事です。アレクシーナ様が利用する。アレクシーナ様が利用される。今は相互利用の時……そう考えるしかありません。いずれは違った世界になるかもしれませんが……」

「そうだな、もう歯車を回し始めたのだ……感傷的になりすぎるべきではない……そう考えるしかあるまい……ただ……私はそれが罪である事を忘れようとは思わぬ……」

リーンは再びニコリと笑う。

「だから、アレクシーナ様は使命を帯びたのです。最大の敵はリューヤ・アルデベータ……それをお忘れなきように……」
リーン・サンドライトは紅茶の入ったカップを再び口元にあてた。

第2話「交渉と干渉」

(どういうつもりかね……世界の安全を目指すならば国際連合があると思うのだがね……)

「国連には国連の役割があります、私のやろうとしている事は別の事と思つて貰つて結構です。」

アレクシーナは電話口でそう答えた。

(何をどうするつもりなのか、それを聞かせて貰いたい。)

「EUの世界版とでも取つていただいて構いません……あらゆる人種、あらゆる国それらがお互いの主権を認め合った確かな連合……言うなればそういう事となります。」

(世界征服でもするつもりかね……それを我が国が黙つて見逃すとは思つてはいないだろう。)

発足にあたり、この国に連絡しなかつた時点でこういう勘繰りが出る事は予測していた。無視した訳ではない。この国を最初から入れてしまふには国力がやはり強すぎるのだ。

「確かに……暫くは私とその連合の議長的立場とならざるを得ません。この連合に対するあらゆるプランは、私の中にあります。それを提示する時期も考へてはあります。しかし、あくまで我々の目的は世界の平和と発展であり、規模の大きな問題を考える上での骨子にならんとする事です。誤解なく理解されたしと思つております。」

(我々の助力をあてにしているという事かね？クイーン・アレクシーナ。)

「ハッキリと申し上げますが……この連合を進めていく上で貴国は、強大すぎます。どうしても意識せずにはいられません……我々が真に世界に平和と発展を望む者であると理解されるにはどうしても時間がかかると思ひます。」

(なるほど……我が国に参加の打診がすぐなかつたと言うの

はそういう事か……自分達の弱さと強さをよく考えている……。我が国の性質もよく知っている……。それで最初の参加国がF国とアルテイル公国……。貴国と友好の度合いがもつとも強かった国と君の国に恩がある国だけだということもよく分かる……。どの国にも事前の交渉はもっていなかった、そういう事でよいのかね？)

「まるで事前交渉がなかった訳ではありません。ですが、それはアルテイル公国のアルテイル・ヘン・ミュール閣下とF国外交官だけに限られています。言い方は悪いですが、F国とアルテイル公国は「さくら」という事になりましたか。」

(我々がその連合に参加したいと望めば、快く受け入れてもらえるかね？)

「貴国の国民性から考えてもそれを決断する状況になるには時間がかかりましょう。」

(早すぎる参加は快くは思われていない、そう捉えてよいのかね？)

「我が国が提案した連合が本当の意味でその骨子を貫くためには……」

(我が国を敵と見なした連合ではない……。それはハッキリさせて貰えるのだろうか？)

「この連合の立案は貴国の州制度、その本質的自由主義、そして貴国が敗戦国日本に与えた憲法、それらの志が元となっております。」

(分つた、我が国も出来るだけ貴女の志を援助しよう。いずれ我が国が参加する時は快く受け入れて欲しいものだ。)

「その時が来るのを楽しみにしております。」

(それにしても思い切った事をやったものだ……。貴女の健闘を心から祈る。)

「アメリカにも幸多い事を祈っております。」

そして電話が切れた。アレクシーナはホッと溜め息をついた。

「こんなトコロでよいのか？」

「そうですね。答えとしては完璧です。向こうの質問もおおよそ筋

書き通りと言っていていいでしょう。」

「各国への能力者の配置が、ようやく芽吹いたという事か……」

「この時の為の能力者の配置……それをご存知であるのはあなた様だけです。」

「しかし、最初は驚いたぞ……まさか、お前達「悪魔」の目的が人類の救済だったとはな……」

「その名称はもはやお使いにならないで頂きたい。」

「「干渉者」……そう呼ぶべきなのだろうな……全てはお前達の手にある……それは気に入らんがな……」

「我々、「干渉者」のなすべき事は人類の自主による平和的統治。

それを手助けするに過ぎません……もちろん、あなた方より遥かに高い「予測」をいたしますが……我々が手を貸す

と言えど、元がなければどうにもならないのです。」

「リユーヤは、何者なのだ？」

アレクシーナはフと思いついたように言った。

「我々「干渉者」の敵となる者。「眺める者」の最後の手段です。」

「どう違うのか分らん……」

「それは我々の世界の事、知っても意味がありません……ですが、少しだけ……彼らはいくまで「観察」によって「解

決」を模索しようとしています。我々は、種が違うとは言え、同じ生命

であるという考えの下で文字通り「干渉」を行います。どちらが正しいのか、それは一概には言えない。彼らと我々はやはりこの問題

に関して相容れないのです……」

「「神々」の世界にもやはり問題がある、そういう事なのだろうな。」

アレクシーナはそう言っ言葉を切った。私は「干渉者」の手に乗ったのだ。世界を導く為に……。このままでは世界は滅びる。それは恐らく事実だった。アレクシーナは自分がやる以外

ない事、そしてその為に起こる膨大な問題を処理せねばならない事を考え、椅子の上に座り一息ついた。そして仮眠を取る為に「彼」を下がらせた。

第3話「ナンバーオブピースト」

三人の男女が講堂の中にいた。一人は少女、紫炎教の教祖紫炎こと、矢口 涼子。少女の前に立つ青年は白面の美青年で、見たことのない顔だった。そして、講堂の出入り口付近の壁にもたれ掛っている青年がいた。この物語の主人公リユーヤ・アルデベータである。

「やはり、私はアレクシーナ女王に反旗を翻す者なのでしょうか……」

「そうであり、そうでないと言えます。」

「それは私が……」

白面の美青年はそこで言葉を止めた。言うのも禍々しい、青年はそう考えていた。

「あなたが、何に苦しみ何を考えているかは分ります。しかし、あなたの苦しみはやはりあなたにしか分らないのです。」

紫炎は冷静に言った。

「私に他の道はないのでしょうか？私がそうであるならば、私が死ねばあるいはそれを避けれるのでは……と」

「それは思い上がりです……そもそも、あなたが何故そのような宿命を背負う事となったかを考えるべきでしょう……それはあなた一人の問題でしょうか？あなたがそうである事は、何故でしょうか？あなたが破壊者……いえ、構築の為の破壊を行うのはそれが必要だからです。そもそも、人間その物に間違いがあり罪があるのです。」

「……しかし……私は……」

「まず……落ち着いて下さい……その事はこの世界の話ではありません。この世界でのあなたの役割は別であり、違うのです。それを信じてください。」

「どういう事ですか？」

男の右腕に巻かれたバンドナが落ちる………。その腕には「666」と見える痣があった。

「どういう事か……それはあなたにも私にも分りません……。ただ、この運命は前の運命とは違うのです。詳しくは言えませんが、あなたがこの世界で担う役割は変わってしまった……。ただ、それによって主があなたを地獄へ送る事はありません。それだけは言えます。」

「何故、そんな事が分るのです！もし、私が預言に書かれた者ならば……。私は人類を罪悪の海へ引き込む存在……。とても許されるとは思えない……。」

「では、聞きますがその666の意味は何でしょうか？」

「666は人の数字でありケモノの数字であると……。そう書かれています。」

「6というのはそもそも人間を表している……。何故なら主は6日目に人間を作られたからです。曜日が7日で区切られているのも主が7日で世界を作られたから、それは知っていますね。」

「聖書にはそう書かれています……。」

「人間をケモノと捉えるのは何故でしょうか？」

「人間は愚かで罪深い存在だから？」

「可であり否であると言えるでしょう。人間はあなたが思っている程愚かではありません。人間をケモノと捉え、神と一番違う点はどこでしょうか？」

「なんででしょうか……？」

「不滅性……つまり不死であるかどうかという問題です。ようするに寿命の問題です。その問題がクリアされれば、人間はまた別の道を歩みます。それを可能にするのは知性であり、本能ではない。それをよく覚えておかれた方がよいと思います。」

「本能に負けず、知性を持てと……。」

「本能をも知性で凌駕する時、あなたには別の可能性が用意されています。覇欲、性欲、食欲、それらは常にあなたの周りで蠢いてい

ます。しかし、それら全てを抑制する事は出来ても失くす事は不可能です。」

「では、どうすれば……………」

「本能は全て悪でしょうか？」

「いえ、生きる為に必要な物とも私は考えますが。」

「失ってはならない。しかし溺れてもならない。それがあなたに要求される事です。そして……………あなたに訪れるその運命の日……………どちらを選ぶかで、この世界の命運は大きく変わる。その時に、あなたは「愛」という形のない物を選ばなければなりません……………その時あなたが、そうしない事を選ぶ事は決まっています……………それをあなたは変えなければなりません。それが出来ますか？」

「何の事だか……………」

「先の話なのです……………ほうっておけばあなたは「愛」を選ばない。」

「「愛」とは……………なんなのですか……………」

「抱きしめ受け止める事……………それが愛の原型なのです。「愛」がある事、それを信じて下さい。私に言える事はこれだけです。それ以上の事を言う事は私は許されていない……………」

「分りました……………」

男はそう言つて、紫炎の前を去り、出入口へと向かった。白面の美青年はリユーヤに礼をして講堂を後にした。

「いいのか？あれで……………」

リユーヤは紫炎に向かって、そう言い放った。

「どうでしょうか？彼の運命は大きく変わってしまいました。その辿る結末は……………どちらにしる悲惨な物なのです……………彼に同情を禁じえない……………ですが、あなたが関与するならば、もしかすると……………」

「俺はリーンを救えなかった……………運命だかなんだか知らないが、そんな物にこの世界を好きにはさせない……………」

「どのような結末であろうと……あなたはあなたの信じる道を行ってください。あなたに言える事も私には僅かしかない……私は私をこのように作った創造の主を恨みます……私には関与は出来ても変える事を許されていない……私は……只の助言者なのでしょうか……」

「あなたのおかげで救われる者もいる。諦めるのはまだ早い……俺は……俺は……」

リユーヤはそこで言葉を区切った。紫炎がリユーヤの横顔を見詰める。

リユーヤは紫炎と目を合わせようとしない。

「俺は……最後まで戦う!」

第4話「殺し合い」

リユーヤと小夜子が紫炎教の屋敷から外に出ると不穏な気配が、二人を包んだ。

「……いるな……」

「ええ、殺気がここまで伝わるわ。」

小夜子とリユーヤはいつでも動ける状態を維持しながら、山道を歩いた。

紺と言つより黒に近い青のスーツを纏った男が三人現れた。小夜子が身構える。

「リユーヤ・アルデベータだな？」

「正面からとは恐れ入るよ。なんで背後から襲わない？」

「同じ事だろう……この世界におかしな力を発現させるのが、お前らの役目か？」

「何を言ってる？」

「知らないのか……すっかり紫炎に聞いた物と思ったがな……」

「お前らの事なら聞いたよ。「神」に挑む「悪魔」だってな……」

「……アレクシーナ女王も俺達もお前らの思い通りにはならない！」

「「悪魔」か……無慈悲に打ち据えておいて、いざと

なつたら「救世主」……「悪魔」と「神」どちらが残酷か……」

「……時代はいずれ勝った者の時代だ。」

「神と悪魔が賭けをする、ヨブがどちらを選ぶのか……永遠の命題だな……私達はお前達を選ばない！！そして我々を弄ぶ者も許さない！！それが私とリユーヤが決めた答えだ。」

小夜子はそう言つて目を細め男を見据える。

「「眺める者」の人形のボディーガードふぜいがふざけた事を言う。」

「だが、今はお前達を排除する。この世界にお前達は必要ない。」

「お前もな！！リユーヤ！！！」

男がリユーヤに飛び掛る。凄まじいスピードの男のパンチをリユーヤはとり、合気の技で投げ飛ばした。止めを刺す事を一瞬躊躇する。

「殺せ……」

男が呟いたと同時に倒れた男の首に足刀を入れた。男は絶命する。小夜子は二人の男の猛攻をいなしながらもジリジリと後退する。

一瞬の隙をついて小夜子の刀が一人の男の首を跳ねる。その刃に迷いはない。

「ククク、ハハハ信じられんよ……我々の動きはこの世界における物理限界を極めている……なのに何故こうも我々を圧倒するのだ。たかが人間と人形のくせに……」

「人間には直感と言うものがある……速さだけでは勝てない……」

「眺める者」は我々の知らぬ技術を持っている……そういう事か……」

「神を気取る者の事など、俺は知らない……俺が興味があるのは俺の生まれたこの世界だけだ。滅ぶにせよ、生きるにせよ、それを選ぶのは俺達だ。少なくともお前達の勝手にはさせない。」

「我々もルールは守っている。アレクシーナ・クライがこの世界を導く。彼女にはその力も度胸もある……我々のやる事はお前達が選ぶ事の手助けに過ぎない……ほうっっておけば滅ぶのだぞ……」

「知っている。」

「先にルールを破ったのは「眺める者」お前らの言う所の「神」だぞ。」

「だからといって、お前らが……外から見ていただけのお前らが……この世界で傷つきもせず悲しみもないお前らが……俺達に干渉する事は許さない。例えそれがどんな理由であろうと……」

リユーヤは吐くように言った。

「ならば、「眺める者」のなすがままにされて滅ぶがいい！！！！だが、我々も手をこまねいている訳ではない…………必ずこの世界を救う…………」

最後に残った男は、そう言った。

「滅ばさぬ為に破滅させる……………最終戦争などがこの世界を救う最後の手段であつてたまるか！！！」

リユーヤが再び吐き捨てるように言った。

「情理で世界が動かせるか！」

「論理だけで人が救えるか！」

「ならば殺し合うしかあるまい。」

最後の男がそう言ったところで、小夜子の刀が男を貫いた。

「リユーヤは最後の可能性だ……………絶対に殺させない。」

小夜子はそう言つて、男から刀を引き抜いた。

「世界の破滅は相互の決定事項だ……………どうやろうが覆せるものか……………例え、「特別」な存在であろうとも……………」

男は血を吐きながら言った。そして、男は絶命する。

「すまない……………」

リユーヤは呟くように小夜子に言った。

「お前を守る為に私はいる……………気にするな。」

小夜子は血まみれの顔でリユーヤに笑顔を見せた。

第5話「アレクシーナの思惑」

「重犯罪者扱いとは、考えてますね」

リユーヤは手錠を嵌められた手のまま、アレクシーナに言った。

「先のリーンが起こした事件・・・あれの重要参考人がお前なのだ。間違えてはいまい？」

アレクシーナは鋭い目つきのまま、静かに言った。

「それに、そんな手錠ごときで、今のお前は縛れまい・・・」
「御存知でしたか・・・」

リユーヤにかけられた手錠が抜け落ちるようにスツと外れる。

「何が聞きたいのだ？」

「そちらも聞きたい事があるのでしよう・・・」

「そうか・・・ならば聞く、お前達は何を誓約してそれ程の力を手に入れた？」

「この世界を再び我々この地に生きる者の手に戻す事・・・そして、俺の存在全てを賭けました。俺は、役目を終えたらこの世界から消えます。」

「なるほど・・・お前らしい・・・だが・・・」

「今度はこちらの番です・・・アレクシーナ様は何故「悪魔」と契約なさったのですか？」

「契約ではない・・・助力を頼んだだけだ。」

「助力？」

「そうだ、助力だ・・・このままでは、どう計算しても地球は・・・いや、人類は滅ぶそうだ・・・」

「！！！！」

開け放たれた窓から風が吹き込みカーテンがたなびいた。

「「悪魔」・・・「干渉者」も同じような問題を抱えている。

まあ、主旨は違うのだが・・・連中はその問題の答えを見る為に我々を利用したい。我々は世界が滅ばぬ為に力を借りる・・・

・お互いの利益の為だ。」

「連中が本当に我々に助力すると思っっているのですか？」

「途中まではそうだろうな……だが……途中からは私が邪魔なはずだ……だからと言って手をこまねいている訳にもいかんだろうさ。」

「馬鹿な！連中を利用するつもりですか？そんなの……無理だ……連中は人の思考を読む。短期戦ならともかく、知略戦で勝てるはずがない……」

「そうでもないさ……思考を読むなら読ませてやればいい。連中に防ぎようのない手を行っていけばいいだけだ。」

「連中がそんな事を許すとお思いか？」

「だから、言つたろう途中までは……と……連中にしても求心力のある神輿が必要なのだ。だが、利用し終われば連中は私を殺そうとするだろうな。私の狙いは戦争による人口の抑制ではないのだから……」

「!？」

「私が戦争の種をまくとも思っていたのか？確かに王宮育ちで実際に生きる国民達の気持ちまで分つてやれるとは言えん。だが、せめて守りたいと思うのだよ。死んでも構わないと思う者は権力の場に立つべきではない……私はそう思う……」

アレクシーナは窓から少し乗り出し、日の光を顔に浴びた。

「しかし、連中は……」

「数が多いし、強すぎる能力も持っている。リユーヤ、私を守ってはくれないか？」

アレクシーナはリユーヤの方を向いて言った。

「「眺める者」と「悪魔」両方の力を使う……そう言うのですか？」

「そうはうまくいくまい……お前に「干渉者」、お前らが言う所の「悪魔」を狩って貰いたいのだ……それは最終的に私を守る事に繋がる。」

「連中と私をぶつけると？」

「そういう事になるな。もちろん彼らもこの事は知っている。だが、連中は連中を排除しようとするお前を放っておく事も出来んのさ。」

「眺める者」、「干渉者」その思惑をぬって、私は世界を救う……」

「なるほど……あなたの思惑はどうあれ、どの道私は連中を狩ります。連中はこの世界で死んだって、本当に死ぬ訳じゃない……そんな連中に好きなようにされるのはごめんだ……」

「私も同感だ……だが、世界が滅ばぬ道を進むには彼らの手も必要なのだ。」

「今、やっている事ですね……」

「そうなるかな……」

アレクシーナはそう言って薄っすらと笑みを浮かべる。

「どちらにせよ、俺に出来る事は一つだけ……そういう事か……」

リユーヤは敢えて笑って見せた。

「リユーヤ……ここを去る前に言っておく事がある。」

「？」

「リーンは生き返ったぞ……」

無理に笑顔を作っていたリユーヤの表情がスツと曇った。

第6話「アレクシーナ・クライ」

「リーンが生き返った??？」

リユーヤは、思わず鸚鵡返しした。

「そういう事だ……やはり知らなかったか……」

「どういう事なんです?」

アレクシーナは溜息をつき、リユーヤから視線を逸らせた。

「ザルマ・アレクサンドライトをお前が倒した後、お前は、もはやこの世にいないはずのリーンを、この世界に呼び戻した。しかも、死体のあるその場所ではなく、まるで別の場所にな……」

「俺が??？」

「リーンの言動、報告によるお前の言動からしても、彼女をこの世に蘇らせたのはお前という事になる……」

「そんな……馬鹿な……」

「それが、「干渉者」の手によるものなのか、「眺める者」の手によるものなのか、未だにハッキリしない……ただ、「干渉者」は「眺める者」の手酷いルール違反だと言っていたな……「眺める者」の代理人紫炎から何か聞いてはいなかったのか?」

「聞いていません……連中は死者すら蘇らせるというのですか?」

「お前の意思で戻ったのだぞ……それに対して何も言っていないとなると、「眺める者」も、今一步信用出来ないと考えておくべきか……」

「リーンに、リーンに会えますか?」

「会わせる事なら可能だ……だが、リーンはお前に会う事を拒絶している。」

リユーヤの表情が曇る。

「お前と今会うべきではないと言うのだ、そしてお前に対する私の

役目は終わったと言う……」

「馬鹿な！俺は……俺はリーンにいつぱい謝らなきゃいけない、俺は俺の出来る事全てをやり尽くせなかった、その事を、俺は……」

「それは、お前の背負い込み過ぎだ。あの過程の中でリーンが死ぬ事は誰にも避けられなかった。避けれるはずもない……お前も、私も誰もが精一杯やったのだ……リーンはその事には感謝している。」

「俺に会わないなら何故……何故リーンは俺の「意思」で蘇ったのですか？」

「リーンについては我々にも分らない事が多すぎるのだ。私としてはお前とリーンを引き合わせてやりたい。心情的にも戦略的にも……」

「だが……お前とリーンを会わせる事に不安があるのだ……予感……だが……全てが我々の望まぬ方向に動き出す……私はいつもこの予感に従って生き延びてきた……それがひっかかるのだ……」

「……リーンは無事なのですね……」
「それは保障しよう……私の目の黒い内は決して「干渉者」にも手出しはさせない……」

「ならば、今、会うべきではないのでしょうか……俺も、少しいろいろな事を知りすぎました……今更、リーンと平穏な生活を送る事を望める程、俺は都合よくできていません……」

アレクシーナがフツと笑い振り返る。

「誰かが言っていたな……背負う事で幸せを掴む資格がないと言つのは、誰も幸せになつてはならないという理屈だとな……誰もが、何かを背負うのだ、そしてその上で幸せを目指すべきなのだ……そうでなければ、人類はあまりに悲しかろう……」

「……」
「そうかもしれないませんが、今の俺にはやらねばならない事があります。」

「……そうか……お前が本当に望まれた者であるなら、きっといつかリーンに会う事もあるだろう……」

アレクシーナは一瞬、遠い目をした。

「俺は……」

「言うな、BESTを尽くす、他に我々に出来る事はないのだ。お前が何者で、私が何者で、「干渉者」が何者で、「眺める者」が何者であるかなど、しよせん、お遊びの戯言に過ぎぬ。自分が何者であるうと、己の出来る事をやるしかないのだ……」

リユーヤが少しだけ微笑んだ。

「曲者……」

衛兵の声が聞こえ、打撃音が響く。

「リユーヤ！話は終わったか？」

小夜子の声だった。

「ああ」

リユーヤが答える。

「では、行きますね。」

リユーヤがアレクシーナに静かに言った。アレクシーナが微笑む。扉が破られ、リユーヤが外に出た。一人取り残されたアレクシーナは「リユーヤ、元気だな……」と呟いた。

第7話「ケモノ」

簡単な事ではなかったはずだ……

そういう思いが白面の青年、ジョー・アルシュにあった。

クライ王国に辿り着いた、リユーヤを重犯罪の参考人として捕まえ、話をする。そして、サヨコ・ミナヅキと共に逃がす。それを、当然の事としてやっているアレクシーナ・クライという女王が怖くなつた。

この事から分る事はリユーヤとアレクシーナが非常に親密な関係にあるという事だ。そうでなければ、リユーヤとサヨコは、捕まらず逃げ切ったはずなのだ。銃弾を楽々とかわせる人間が意味もなく捕まるはずはない。それは、リユーヤとアレクシーナのお互いに会う必要があつた事を示している。

表立つてはまだ、リユーヤ・アルデベータの事は公表されていない。だが、リユーヤ・アルデベータが「神」とか「悪魔」とかそういう存在……少なくともその使いである事は世界の裏舞台では周知の事実だ。現段階においてアレクシーナがリユーヤと接触する事はアレクシーナにとって不利な事のはずだった。

能力者……かつて「悪魔憑き」「天使憑き」と呼ばれた存在の全てがアレクシーナの世界征服に手を貸すように述べている。いや、彼らは世界征服とは言わない、世界の統合という……
……だが、自分には同じ事のように思えた。

もし、アレクシーナの戦略が成功すれば、アレクシーナは実質的に世界のトップに立つ。アレクシーナの言ってる事は正しい。だが、自分はそれ程人間という物を信じられない。アレクシーナの中に覇欲がないと誰が言い切れるのだろうか。その証明が欲しかった。しか

し、実質的にその証明は不可能に近い。頭の中でも覗かねば不可能だろう。

私が疑う人間という事は……私が「ナンバーオブビースト」666の称号を持つ「ケモノ」だからであるからだろうか？他人の善意など裏があるそう考えて今の地位を築き上げた。「正義」や「悪」など、所詮、人が創り出した都合に過ぎぬ。そう思ってきた。だが、アレクシーナにそんな悪意は感じられない。だが、やっている事は世界征服に見える。うまい手を考えたものだ……この同盟に反意を翻せば、では、お前の国は他国の主権を軍事力によつて侵すのか？という事になる。そうなれば、世界の平和主義者どもの敵という事になる。

アレクシーナを見てみると自分のやってきた事、見てきた事がまるで間違いだつたのではないかと思える。それぞれの国にそれぞれの都合がある、その中で権力を持つ者程、醜悪な面が臭い立つ。そいつらを屈服させ、世界のバランスオブパワーをとり、世界を平和にする。それが、私の目的だつたはずだ……だが、私は「ナンバーオブビースト」なのだ。世界の平和と反する存在なのだ……アレクシーナを見てみるとそんな気分になる……

あの紫炎と呼ばれる少女……本名は矢口 涼子と言つたか……あの女もしよつていた。少し脅えた素振りを見せれば、想像以上の情報を喋る……何故、あんな幼い少女がそんな事を考えている。それが、教祖と呼ばれる存在なのだろうか？ああいう連中から見れば、俺の考えている事など、猿にも等しいのだろうか？そんな事はないはずだ、同じ人間、そう違うはずはない。ただ、その事に関して知識があるかないかそれだけの違いしかないはずだ。単純な頭の良さでは俺が勝っているはずだ。俺は、トップエリートが集まる大学でも主席であつたし、自らの知能で今の地位を勝ち取つた。俺は頭が良いエリートのはずだ……

「ナンバーオブビースト」その称号だけが、私を縛る。まあ、神

や悪魔がいようが俺には関係のない話だ。矢口の前とリユーヤの前で脅えた素振りを見せた。それが重要な事なのだ。まさか、あんな少女がそこまで見通しているはずもあるまい。俺の用意した質問に素直過ぎるほど素直に応えた。気付いてはいないはずだ。最初から俺はあんなインチキ教祖のインチキな戯言など信じていない。それすら、あの少女は見抜けなかったのだ。その事がこの世にそんな能力など存在しない事を示している。

馬鹿は利用するに限る……………

死者が蘇る？そんな事はないはずだ。アレクシーナが自分の世界征服の為にF国と共謀して作り上げた馬鹿げたリユーヤ伝説のはずなのだ。その証拠にアレクシーナが発起したあの世界征服計画にF国は最初から参入している。

そこまで考えてジョー・アルシユは頭を抱えた。

本当に私はそんな事を考えているのか？

紫炎の前で見せた姿は本当に演技だったのか？

私はなんなのだ？本当に神はいないのか？私がそんな風に考えるのは私が「ケモノ」だからなのか？あの少女はなんと言った？

本能と知性がどうのこうの……………

本能より知性が大事……………？

たかが、人間に本能と知性の区別などつくはずもない、あの程度の年の少女なれば、尚更な事だ。人の娯楽を見るがいい、暴力と性とギャンブル……………それが人間の本性なのだ……………本能

と知性など分けて考えるなど所詮人間にはありえないのだ。そんな事が分らないのならば所詮、あの少女も社会を知らぬ愚か者の一人だ。性という本能を除けば愛など語れない。他の愛だって本能・・・人が生き延びる為だけのものだ・・・俺はそんな下らぬ物など信じない。あるのは、俺のこの知性だけだ・・・俺が「ケモノ」だというなら、そんな事すら分らない愚かな者達こそ「ケモノ」であろう・・・

だが、私の持つ権力欲とはなんだ？これこそ、ケダモノの本能なのか？私は・・・私は・・・

第8話「崩壊の予兆」

「アレクシーナ・クライは世界征服を企んでいる！我々自国の自治と真に平和を望む者の敵だ！」

既に連合を作っていた国家群の統治者がそう世界に向けて発信した。あらゆる事実を踏まえた為、世界は大きく揺れ始めた。そう言った統治者は、その後告げた言葉も放映させた。

「我々はその裏を今探っている。それで分った事実を公表しよう。」
TVに映ったその男は、冷静に間を計り力強くそう言った。

「クライ王家は元々世界の覇権を握る為に、超能力者の研究を行っていた。そして、その研究が終わるや否や世界中に能力者と呼ばれる予知者を送り込み、正確無比な予知を行わせ各国家の信頼を得させた。」

男は机をドンツと叩き、怒りを抑えきれないという姿を演出した。
「そして、アレクシーナが「世界統一連合」を提唱するや否や、彼ら能力者を利用して世界が自分に傾くように、預言させた。」

男・・・ラスア・エラーラは襟元を正し、訴えるような目をカメラに向けていた。全て計算された姿だった。

「超能力者と言われても、いきなりでは信じられないかもしれない。その証拠を我々はここに提示する。」

ラスアは机の上の写真をカメラの前に向けた。それは、リーン・サンドライトがイレーザ病棟を破壊している姿だった。そして、ラスアは他の証拠写真を握り振り上げる。

「他にも幾つもある。彼女はクライ王国によって作られた。軍事超能力兵器、リーン・サンドライトだ！」

ラスアは再び机を叩いた。

「しかし、彼女も人間だった……命令とは言え人を殺した。その罪を贖う為とクライ王家のその野望を抑える為に、彼女は単身クライ王家に立ち向かったのだ！！それが、クライ王家要人暗殺テロの真相なのだ！」

ラスアは後ろに控えた、男を一人前に立たせた。

「そう、幾ら超能力と言われてもあなた達には信じられないかもしれない。そこで、我々はアレクシーナの野心を知り、世界の為にアレクシーナ・クライを裏切った。能力者をここに立たせる。」

男はゆつくりと、そして導かれるままにラスアの立っていた場所に立ち、マイクを片手にした。

「皆様、ラスア閣下の言われる事は真実です。ですが、信じられないかもしれませんが。そこで、私が手に入れた。能力で人助けをしたと思います。それは……」

男は一拍おいて言った。

「地震の予知です。R国のS市において震度6.5に近い地震が三日後に起こります。ですから、心あるR国のS市民は避難してください。」

男はそう言って引き下がった。

ラスアが再びマイクを取る。

「我々は、この男、ヒルダード・アックスマンが数々の預言から本物である事を知っている。だが、皆さんが信じるのはこれからだ！しかし、二度も真実を語る機会があるか分からないので、私はここで話しておく！」

ラスアは、胸を張りマイクを演台に戻す。

「先程、話した軍事超能力兵器リーン・サンドライトのその後だが……」

ラスアは静かに続ける。

「アレクシーナ側の政界における発表では死んだ事になっていた。しかし、事実はアレクシーナの秘蔵っ子、もう一人の軍事超能力兵器リューヤ・アルデベータに捉えられ、洗脳されていたのだ。」

ラスアは再び机を叩いた。

「そして、F国におけるある事件を利用し、リユーヤ・アルデベータを「救世主」に仕立て上げる為に、死者の復活……リン・サンドライトの復活を演出した……その事により、アレクシーナはより以上の注目を浴び、彼女の「世界征服計画」は進んだのだ……我々は断固、アレクシーナの野望を阻止し、民族の独立と国家の自主性を守る為に、「偽国家統一連合」と戦う……!!!」

そして、ラスアは静かな佇まいに戻った。

「私の言っている事が事実かどうか、三日後には分る……」
ラスアはそう言って演台を去った。

第9話「会見準備（思惑）」

王宮に造られた特別室……本来はVIPなどの特別な人物が来た場合に泊める部屋だった。その部屋は全部で10程ある。その数ある部屋の一番奥の一室に、リーンとアレクシーナとリッターがいた。普段はリーン一人がこの部屋に住んでいる。

「してやられたな……」

アレクシーナがアールグレイという銘の紅茶を口元から離し、静かに言った。

「あの言動は悪意に満ちています……あんな物は無視して下さい。」

リッターは少し興奮しているようだ。

「そうもいくまい。事実を元にした悪意による曲解……これ程手に負えぬ物はない……」

アレクシーナは一瞬自嘲気味に笑みを浮かべ、その後、顔を引き締めて言葉を続けた。

「もうじき、記者会見の時間だ。それまでに一応、二人の忌憚のない意見を聞いておこうと思っただ。」

アレクシーナは厳しい非難を受けたとは思えぬ程冷静だった。

「私は、あくまで無視すべきだと思います。リーンの事やリユーヤの事は国家機密という事で話を通すべきです。世界征服などという馬鹿げた話があり得ない事は、アレクシーナ様の出された「世界平和統一連合」のその法規……まだ承認はされてませんが……それを見れば明らかです。」

「なる程、事実と行動を持って証明する……それも一案だな……。リーン、お前の意見は……」

その言葉を聞いて、リーンが目を瞑り喋り始めた。

「アレクシーナ様が何を望まれるかで選択肢は幾つかあると思います。現在の望みを最大限叶える事がお望みならば、発起人兼、暫定

議長権を御放しに成らない方がよいとは思われます……ですが、これは現状では非常に難しいと思われま……
「そうだな、連中が言ってる事に一部事実がある。そして、我々にも秘密がある……そのまま居座れば戦争の引き金になりかねない……」

「現在のアレクシーナ様の最大の望みは何でしょうか？……それを考えて行動されればよいと思います……その為には出来るだけ隠し事は避けるべきです……」

「戦争を避ける……それが目先の第一の目的だ。それと、世界平和統一連合を立ち上げた目的……それを最大限叶えるように動くべきだろうな……」

「その二つを同時に行うことが可能ですか？」

「やってみなければ分からない……だが、最善と思われる「やり方」はあるな……そっちの方はなんとかなろう……問題は……リン、お前とリユーヤの処遇が焦点になる可能性がある事だ……私は……お前達を守ってやりたい……」

「リユーヤは、強い人です……また、私も世界と天秤にかけられるような存在ではありません……」

「強いな……」

アレクシーナはフツと笑った。そして何事かを決心したような表情になった。

「そういうお前達だからこそ、私は出来るだけ守ってやりたいのだ……」

「アレクシーナ様……」

リッターが心配そうな目でアレクシーナを見詰める。

「心配するな……私は私のやれる事を最大限やるだけだ……その結果がどうであろうと……私はそれを恨まない……リッター……お前にはやってもらいたい事がある……退院まじかの西城と連絡を取り、リユーヤを探してくれ。」

「ハッ！」

「その為にお前の権限をもう一段階上げておく……頼むぞ！」

「ハッ！」

「それでは、私は会見に向かう……二人ともこの先も私に力を貸してくれ……頼む……」

「ハッ！もちろんであります。」

「はい。」

アレクシーナが外に出た。リッターが静かに優しげな目をリーンに向ける。

「リーン、あなたも大変だけど頑張っただけね。何か不自由があれば外の衛兵に言って……」

「はい。ありがとうございます。」

「それでは、行くわね。」

「はい。」

リッターはリーンの返事に少し頷いて外へ出た。

一人になったリーンが静かに祈る。

「神様、リユーヤとアレクシーナ様をお守りください……」

第10話「胎動」

「大変な事になったな……」

TVを見ながら、リユーヤは小夜子に言った。

「そうだな……アレクシーナ・クライはかなり厳しい立場に立たされるだろうな……」

「能力者達……悪魔憑きの連中による反乱なのか？」

「アレクシーナに会うか、紫炎に会うか……どちらにせよ、情報を確認した方がいいな……アレクシーナは私達に会うどころではないだろうから、紫炎にあたった方がいいだろう……成り行きに注意しながら私達は、連中を狩る……そういう動きでいいと思うがな……」

「なら、話は早い……この国にいる「悪魔」を狩ったら、日本に向かおう。」

「目標は捕捉してる。後は、人気のないところに誘い出して「狩る」だけだ。」

「なら、急ごう。この問題、急い方がいい気がする。」

リユーヤがそう言うと、小夜子は静かに頷いた。

「ラスアは、うまく働いてくれたな……」

ジョー・アルシュはほくそ笑み、机の上に片手を置いて窓の方を向いた。机の前には一人の男が方膝をつき、ジョー・アルシュの方を見ている。黒い喪服のようなスーツに身を包んだその男は、まるで皇帝に対するような畏敬の念を、ジョー・アルシュに向けていた。「目の前にぶら下がった人參を追うのが、ケモノの性^{さが}。彼に、自国の王の位と、新世界の王の位を約束し、オイルの権利をくれてやる

と言つと、飛びついて参りました。」

「あの程度の男に「王」が務まる訳もないのにな……身の程を知らん男だ……。」

「左様で……。」

「ラスアのように神輿に奉り上げ、利用して殺そう……お前達は俺もそのようにしようとしているのだから？」

「滅相もない。アレクシーナが我々を裏切った今、我々の望む「王」はあなた様しかいません……。」

「最初からその予定だったはずだ。」

ジョー・アルシユは右腕の痣を見せた。その時の状態によって浮き上がるその「666」の痣は、今、クッキリと浮かんでいた。

「それは、「眺める者」の与えた印……我々とは無関係でございます。」

「信じられんな……。」

ジョー・アルシユは厳しい目を向けた。

「確かに、あなたの特別な「力」と「運命」を利用して頂くと思つてはおります。しかし、「眺める者」からも一定の力を借り、我々「干渉者」からも強い力を得れば、あなたはアレクシーナはもちろん、あのリユーヤ・アルデベータすら凌ぐでしょう……その力で……権力の頂点にお立ちになりたいとは思われませんか？」

「ふふふ……はーはっはは……俺はこの世界も「眺める者」も……神も憎い……神がいるなら、この世界は理不尽過ぎる。何故、ただの人間であつたはずの……努力を積み重ねこの地位を手に入れただけのこの俺に666の「刻印」を押す……これでは恨むな、憎むなと言う方が無理だ……俺は……そいつらに一泡吹かせてやる。この世の最高の力を得られるならば俺は見てみたい、体験したい。そして、この愚かな滅び行く人類を……俺の「力」で立て直す……お前らの思惑がどうであれ、お前らが力を貸すと言うなら……」

借り受けよう……そしてお前らの望む最終戦争を引き起こそう……もちろん、私が「救世主」となってだが……真にこの世界を救うのはリユーヤ・アルデベータでもアレクシーナ・クライでもない……この俺ジョー・アルシュだ……見ているがいい、神よ……お前の計画は全てご破算にしてやる」

ジョー・アルシュはそう言って、再び高らかに笑った。

第11話「去就」

アレクシーナが会見の場に立った。絵空事のような事をラスア・エラーラは事実の様に発表した。政府関係者が軍事超能力などを公式に認めるのは初めての事でもあつて、メディアは一挙に色めきたつていた。

「まず、最初に言っておかなければならない事がある。」

アレクシーナは静かな面持ちで言った。

「ラスア・エラーラの言っている事の一部は本当だ。」

色めき立った記者達がドヨドヨと声を上げる。

「あなたが、世界征服する為に、世界平和統一連合を立ち上げたというのは本当ですか!？」

一人の記者が大声で言った。

「話は最期まで聞くものだ。」

アレクシーナはそう言つてフと笑つた。

「我々……いや、我が国は確かにかつて超能力者の研究を行つていた……そして、その成功例がラスアの上げた、リーンとリユーヤ二人の人物だ……ただな……その人体実験を私は快く思つていなかった。私が王位を継承してからは、それらの研究は破棄し、研究所はその実験の失敗者の回復に全力を注いでいるというのが現状だ。私が超能力者を利用し王位を得、世界征服を企んでいるなどという事はでつち上げに過ぎない。」

「超能力……とやらを研究されていた事は認められるのですね?」

アレクシーナが頷く。

「そして、私がやろうとしている事は世界征服に見えるやもしれない。だが、現状、地球上の問題を考えるには国家を超えたレベルでの真の意味での話し合いや規制が必要になってくるのも事実だ。私はそのシステムを構築したただけだ……そのめど

おしもついた今、私が世界平和統一連合の議長をやる意味もあまりない。」

「ちょ．．．．．ちょっと待ってください．．．．．私が得た資料ではまだそこまで平和連合は機能出来ていないと思えるんですが．．．．．」

「確かにな．．．．．だが．．．．．」
アレクシーナは一拍入れた。

「実は議会に提出する法案は既に作成してあるのだ。それは、平和連合のシステムティックな面に特化されていて、それが通ればアメリカ並みのまとまりを見せるはずだ。」

「既にシステムは出来ていると？」

「議会で承認されればそうだ。もちろん根を詰めて議論し改正はして貰わなければならないが．．．．．」

記者団に笑みが戻った。アレクシーナのうまさであろうか？

「先にも言った通り、こうなった以上、私は議長の座を降りるつもりだ。」

私に世界征服の野心などない事をそれをもって明白にしよう。世界の統合と世界の征服は同じように見えるかもしれない。だが、私の思いはこの世界の真の平和と発展だ。それをはつきりとさせておきたい。そして、辞任を表明して、なおやっておく最後の仕事がある。それをこの場で御説明したい。」

記者達の注目が集まる。

「まず、大仰に振ったが、私の思いから説明せねばなるまい．．．．．」

アレクシーナが一息つく。

「私は政治の仕事に携わって長いのだが、この世界にある今一番の問題はなんだと思う？．．．．．貧困？イエス、温暖化？イエス、戦争？イエス．．．．．様々な問題が私の中で駆け巡ってきた．．．．．」

アレクシーナは会見席に置かれたコップを口にあて、ゆっくりと

した所作でコップを戻した。

「そして、おおよそ全ての問題は環境とエネルギーと食料の問題に纏められると理解した。それらの問題を平和的に解決する。それが平和連合を発起した元々の意味だった……」

アレクシーナが立ち上がり、声を大にした。

「これを聞いている世界平和統一連合の皆さん、どうか私の意志を継いでくれ。途中でドロップアウトせざるを得ない私の最期の望みだ……私のなし得なかった理想と平和を……皆さんの手で……実現して欲しい……」

アレクシーナがそう訴えかけると拍手が起こった。記者達も馬鹿ではない。だが、今アレクシーナが語った言葉が真実である事は分かった。嘘か真実か、それを見分けるのは簡単ではない。だが、アレクシーナの真摯な姿勢は確かに記者の胸を打ったのだ。疑い監視する事もまた、記者の仕事だ。書かねばならない記事は公平性を求められる。それでも、アレクシーナの思いは人としての記者の胸を打った。

アレクシーナは立ち上がり、軽く手を挙げて去った。拍手は鳴り止まない。自らの去就を賭けたアレクシーナの思いは今だけは、確かに伝わっていた。

第12話「愛」

アレクシーナは最後になる議長席に立っていた。幾つかの案件が通され、最後の議題へと移る。

「最後に……皆さんもご承知の通り、私は議長の座を降りると公約した。」

アレクシーナはそう口火を切った。

「私の議長としての仕事は今日で終わりという事になる。この先も世界平和統一連合の道は困難を極めると思う。事実、私もこの世界平和統一連合を発起した時、これは私の一人よがりではないのかと何度も思ったものだ。」

場内に軽い笑みが満ちる。

「だが、実際にはこれ程多くの人の賛同を得、この連合に参加したという意思表示、連合には即座に加われないものの協力を惜しまないという国家も後を絶たない。世界の皆が真なる平和と地球規模での愛を真に望んでいたのだと……私は……信じる事が出来た。この先の様々な困難に力ではなく、愛と倫理で立ち向かっていって欲しい、私はそう思っている。」

アレクシーナ辞めるな！場内の誰かがそう叫んだ。次々と各国の言葉で辞めるなという言葉が飛び交い。最後には「アレクシーナ」という声の大合唱となった。アレクシーナはそれを手で制した。その後、騒ぎが収まるのを待ってアレクシーナは静かに言う。

「皆さんの気持ちは嬉しい。だが、この連合が世界征服の道具などと言われたのでは、やはり居た堪れない。私は身を持って、世界にこの連合が真に平和を望む者の連合である事を示さねばならない。そう、誰かが身を持って示さねばならない事だったのだ。それが私だったというだけに過ぎない。これから、この連合が世界で役に立っていく事を心から望んでいる。長い挨拶など退屈なだけだろうから、短いがこれを私の辞任の挨拶と代える。」

拍手が起こった。アレクシーナは拍手の中、静かに演台を去った。廊下に出て暫く行くと、後ろから一人の議員が追いかけてきた。最初に「アレクシーナ辞めるな！」と言った男・・・ジョー・アルシユである。

「アレクシーナ陛下、見事な去り際でした。これで、世界平和統一連合はまた一歩力をつけていくでしょう。」

アレクシーナはSPを下がらせ、ジョーを傍に引き寄せた。

「ジョー、柄にもない事を言うな。」

アレクシーナはその後、SPにも聞こえないように耳元に口をあてた。「野心も過ぎれば、身を滅ぼすぞ」アレクシーナは小声でしかハッキリとそう言った。ジョーは首を横に振る。

「滅相もない。私ごときが、大それた野心など持ちようもありませんよ。」

「ふむ・・・ならば、いいが・・・。」

「アレクシーナ様、少し気になったのですが・・・。」

「なんだ？」

「愛という言葉はいささか抽象的過ぎませんでしたでしょうか・・・

・・・。」

「そうかな？私はそうは思わないが・・・。」

ジョーが少し口をつむり、思案してから言った。

「アレクシーナ様の考えられる愛とは何なのですか？私には愛という言葉はまやかしにしか聞こえない。いや、少なからずの人がそう思っているはずですよ。」

「「大いなる自己満足」・・・私はそう捉えている。」

「自己満足ですか!？」

「大いなる・・・だ。」

アレクシーナはそう言って、SPを再び周りに戻し議場の外へと向かった。ジョー・アルシユは呆けた様にアレクシーナの後ろ姿を見詰め続けた。そして暫くして顔を引き締め、他人に見せる顔を作った。

．．．．．自己満足．．．．．うまい事を言う。与える愛も捧げる愛も所詮自己満足に過ぎない．．．．．そう言うてしまえばそうなのかもしれない。ストーカーが描く愛も相思相愛の愛も、自己満足に過ぎない、そう言うてしまえばそうだ．．．．．
．．．．．あなたはその自己満足の為に、俺に世界制覇の階段を用意した．．．．．
．．．．．あなたのなし得なかった夢は俺が必ず実現してみせる．．．．．
．．．．．そして、あなたが捧げた世界への自己満足も平和連合への自己満足も、全ては私の為にあった。あなたが言った「愛」の為にリユーヤも小夜子も死ぬ．．．．．それも、何もかも人の欲望よりも誇りを取ったあなたの誤算だ．．．．．
．．．．．つばけな自己満足の為にあなたは滅んでいく．．．．．もし．．．．．
．．．．．あなたが本当に世界制覇を望んでいけば、能力者も裏切る事もなかった．．．．．その「大いなる自己満足」の為に．．．．．
．．．．．あなたは道を誤った．．．．．あなたの政治生命は長くない．．．．．

その三日後、アレクシーナ攻撃の急先鋒だったラスア・エラーラが暗殺された．．．．．

第12話「愛」（後書き）

ご愛読くださった。皆様に休載のお知らせを致します。

この度、私事において、非常にショッキングな事がありまして、少しの間、考える時間を頂きたいと思えます。

およそ、心は決まっていますのですが、本当にこの考えでいいのかなどと、考えてしまっている状況です。

心の整理をするのに少し時間が必要です。ご愛読頂いた皆様には悪いのですが、どうしても考える時間が必要なのです。

だいたい平日にUPしていたのですが、その事すら忘れてしまうような状況でした。

この話は第4章で完結します。今後、必ずUPし、完結させる事は約束します。

少し、時間を下さい。

月読天舞より、読者へ

第13話「可変」

「一体どういう事なんだ？」

リユーヤは紫炎に詰問した。

「アレクシーナ様が、ラスア・エラーラを暗殺したという噂がたっていますね……」

「誰が見たってそう見える。これ程あからさまだと、返ってアレクシーナ様を罠に嵌める為だとさへ思えるよ。」

「そうでしょうね。それが、彼の狙いですから……」

「彼？」

紫炎はゆっくりと口を開いた。

「ジョー・アルシュ、ナンバーオブビースト……」

リユーヤはハツとした顔で、かつて、ここを訪れた白面の青年を思い出した。

「あの時の青年が今回の犯人だと？」

「そうなのですが、もちろん証拠などありません。能力者を使い、ラスアを唆し、アレクシーナ女王を失脚させる。そして、アレクシーナ復帰の目を完全に潰す為のラスア暗殺。やり過ぎとも言える程完璧です。」

「どうあがいても、アレクシーナ様は灰色だと？」

「大衆の目にはそう映るでしょう……」

「証拠がないのが、疑惑の象徴となるという事か。」

「もちろん、アレクシーナ様への罠だけではなくありません。アレクシーナ派にはアレクシーナを陥れる為に仕組まれた罠だと唆し、反アレクシーナ派には、世界平和統一連合の仕業だと吹き込むつもりでしょう。能力者、インターネット、マスメディア、ありとあらゆる手段を使って争いを煽るでしょう。」

「まさか、戦争って事は……」

「十分にありえます。」

リユーヤの側に立っていた小夜子の顔が一瞬曇った。

「ありえる……という事は防げるという事なのか？」

小夜子は詰め寄るように聞いた。

「いえ、恐らく、戦争自体は防げないと思います。ですが、被害を最小にする事はひょっとすると可能かもしれません……」

「前に言った時は、戦争を防げる可能性があると言った気がするけどな……」

「時期が過ぎ、全ての人々が少しずつ道を誤った……そのツケは払わざるを得ないのでしょう。」

「俺達は防げない事をする為に、命を賭けたのか？」

リユーヤは顔を紅潮させた。

「リユーヤ……」

小夜子がリユーヤの肩に手をやる。

「私やあなた、そしてアレクシーナ様の手順より、悪魔の手順が一歩上回ったのです。そして、この先人々の狂騒も加わっていくでしょう……あるいは……私達は勝ち目のない戦いをずっとしていたのかも知れません……」

「決まっている運命は変えられない……そういうのか？」

「はい……私には分からなくなってしまう……私は役目の上で小さな運命を数多く変えて来たつもりでいました……しかし、その、変えるという事自体も大きな運命の流れそのものだったのやも知れませんが……私はあなたに関わる運命を何一つとして変えてあげる事が出来なかった……幾度もチャンスがあつたにも関わらずです……もう……自信がありません……」

小夜子が一步前に入る。

「あんたが、迷ったんじゃ私達は動けない。例え、どれ程の運命が待ち受けていようと、私達はなすべき事を成さねばならない……例え、明日世界が滅びる運命だとしても……明

日という未来が確実に来るまでは、あがき続けるのがこの世に生まれた者の努めじゃないのか？．．．．．あんたにこんな事を言うのは釈迦に説法だろうけど、あんたが、未来を知る事が出来るという事にはきつと意味がある．．．．．ただ単に絶望の未来を知るだけの事が、あんたの能力だとは思えないし、思いたくない。そして、小さな事であろうとも少しでも運命を変えたのなら、それは可能性を示してる．．．．．私達は絶望する為にこの世にいる訳じゃない．．．．．少なくともそう思いたい．．．．．」

「小夜子．．．．．確かに俺達だけじゃ役不足かもな、アレクシーナ様を含めたって、たったの4人だ。それで、世界を変えようってのは調子がよすぎたのかもしれない．．．．．だけど、確かに諦めるのはまだ早い．．．．．まだ、戦争が起こった訳じゃない．．．．．まだ、何か出来る事があるはずだ．．．．．」

「．．．．．そうですね．．．．．あなた達の意思の強さには驚嘆させられます．．．．．ひよつとすると、何か隠された手段があるかもしれません．．．．．まだ見ぬ運命を見る事を試して見ましょう．．．．．私の運命になかった事．．．．．リーン・サンドライト、ジョー・アルシユを含めた7者会議を開きます．．．．．アレクシーナ様へのその旨の手紙、預かって貰えますね？」

「開催はアレクシーナ様にやってもらうのか？」
そう言ったリューヤの言葉に、紫炎はこくりと頷いた。

第14話「人形」

「どういう事だ？」

ジョー・アルシュは手に持った招待状を眺めながら呟いた。

作戦は全てうまくいってるはずだった。アレクシーナの代わりに議長になる者も自分にとって都合のいい人間に決まったし、平和連合の内部の実質的権限も全て掌握した。出来立ての連合で、細かい事がこれから決まっていくという組織を握るのはそう難しくはなかった。能力者の存在も有効に作動していたし、大立者を動かす様々な要素もその全てを握っていた。秘書や、立ち回ったり相談したりするような各所に、能力者が有効的に配置されているし、彼らが入れる情報もこちらが意図的に流してやる情報に限られていた。そして、大衆を扇動する為のあらゆる組織が実質的な支配下にある。表立っていないというだけで、ジョーは実質的な帝王だった。後は、反平和連合を焚き付け戦争を引き起こし、人口の調整を行い、その戦争の責任者にしかるべき時期に降りてもらい、その後の連合のトップに収まる。表立つかどうかは別にして、それで、自分の望む帝位は手に入るはずだった。このほとんどはアレクシーナが世界平和統一連合を立ち上げた時から、あった事だ。これを具体的にしたのは、能力者………干渉者達のおかげではある。

干渉者達は、ありとあらゆる情報を握っているし、脅す手段にも事欠かない、そして仮に逆らう意思がある者がいても、そういう役に当て嵌めてチープ化してしまえば問題にもならない。自分の思う通りにいくはずだった。だが、招待状に添えられた手紙には、下らない事が書き添えてあった。

お前は人形

普通の招待状の他に、ただそれだけを書いた紙が添えてあった。

アレクシーナの文字ではない。パソコンの文字を何かで印刷したものだ。これは自分に対する挑戦だった。世界の権力を思う様に握る自分をそうと知っていたながら人形と呼ぶ……くだらぬジョークに思えた。リーン・サンドライト……「眺める者」の配下がいるならば、今の世界制覇寸前にあるジョーの立場を揶揄できる現状ではない事は分かっているはずだ。「眺める者」と「干涉者」の勝負は「干涉者」の勝利で終わった。この状況は決して覆せない。不安はある……もし、能力者達全てがいきなり裏切れば、帝王ジョー・アルシユの命は終わる。それは、「眺める者」も「干涉者」もグルであり、これらの事は、全てを決める者による茶番であるという事だ。

そうであれば、自分が人形と呼ばれる理由も分かる気がした……
……自分はやはり、最初から666として定められた者なのだ……
……偽りの地上の王となり、最後には神によって滅ぼされる。それだけの存在なのだ……いや、違うはずだ……
……ただ、それだけならば……世界は私と何かの間で割れるはずだ……聖書に書かれている事が私の事だとするならば……私は「神」に暴言を吐き、神に見捨てられる者を選別する為に存在している事になる……ならば、今の現状はどうだ？……俺は何処とも敵対していない……
……全ての出来事における黒幕であるというだけだ……もし、俺に敵対者がいるとするならば……アレクシーナ・クライ……リユーヤ・アルデベータ……リーン・サンドライト……紫炎……か……他はどうにでもなる……何故、彼女達は私に敵対するのだ？……

もう勝負はついている……誰が権力を取るにしても、このままいけば、世界は滅ぶのだ……人類自身の手によって……それを防ぐ為には、誰かが権力を握り戦争を引き起こさねばならない……それは、「眺める者」にも「干渉者」にも一致した見解のはずだ。彼女達は何故足掻く？アレクシーナはここまでの流れを決める為の駒だったはずだ……だとすれば、真の敵は誰だ？……戦争以外の方法でこの世界の暗黒を取り払えるともいうのか？……自らの足で立てる人間も確かにいる……だが……大半は……誰かがせねばならないのだ……仮に私の役割が人を惑わし、裁かれる者を決める事だとしても……それなくしては恐らく、人類は目を覚ますまい……ならば……

……リユーヤは……リユーヤは何者なのだ……

……「眺める者」は何故、本来の不干渉を破ってリン・サンドライトを蘇らせた？……リユーヤに何をさせたい？……

……何故、「干渉者」はリユーヤを本気で始末しないのだ……

……「干渉者」は何を恐れているのだ？……人形……

……私もリユーヤも人形……そういう事なのか……

……もしそうだとするならば……

私は大きな間違いを犯しているのかもしれない……

ただ……今、私と与えられている情報は限られている……

……なんの事はない……私に与えられている情報もやはり能力者からのものなのだ……世界の構築を知る者達の会議……外すわけにはいくまい……

第15話「6人」

円卓の場に最初に通されたのは、リユーヤと小夜子、そして紫炎だった。三人が部屋に入ると、案内役の二人の護衛が部屋から去っていった。

「ここでこれから、この世界の未来が決まるのか……」

小夜子が呟いた。

「いえ、逆かもしれません。決まっている未来を翻す……それが、この会議だと、私は信じたい……」

紫炎が静かに言った。

「まあ座ろう。それぞれの席が用意されてる。」

リユーヤは平静を装って自分の名前の書かれた席に座った。四角錘の名前を書かれた置物……それが全部で七つあった。その内の一つにリーン・サンドライトの名前があつた事は、少なからずリユーヤを動揺させていた。リーンは本当に生き返っていたのだ。そして、意外な場面で意外な再会を果たす事になった。

「リーン・サンドライトの事が気になりますか？」

紫炎が自分の席の前にある四角錘を手も触れずに回しながら言った。その声に小夜子がピクリと反応する。

「気にならないと言えば嘘になる。」

「彼女はあなたの知っているリーン・サンドライトとは別人です……」

「……」

「別人？」

「記憶も性質も同じですが……それでも彼女はあなたの知っているリーン・サンドライトではありません。」

「意味が分からないな……」

「その事は、この会議の中であなたは理解するはずです。」

「死人が生き返った……その事だけでリーンが特別だとは十分分かるよ……」

「来ました。」

紫炎の前でクルクルと回っていた四角錐の置物がピタリと動きを止めた。その瞬間ドアが開いた。

ドアを開けて入って来たのはアレクシーナだった。その後リー・サンドライトと西城が続く。

「リー」リユーヤはそう口にしようになったが、口を止めた。その姿は、確かにあのリーンだった。だが、何かが違う。自分の知っているリーンとは何かが大きく違っている。それが何かはリユーヤにはよく分からなかったが、話し掛けるのを躊躇うには十分だった。

3人が席に着いた。後、残るのはジョー・アルシュだけだった。到着まで後、15分程かかるらしい。

「6人だけで会議を始めるのはルール違反かな？」
アレクシーナが微笑してそう言った。

「軽く挨拶は済ませて置いた方がいいかもしれませぬ。」

リーンがアレクシーナに相槌を打った。
「好きにするがいい……ジョーが来れば来たでまた話を始めればいい。」

アレクシーナがそう言った。リーンはそれに頷き、リユーヤの方を見て静かに口を開いた。

「リユーヤ……お久しぶり。」

「久しぶり……」

リユーヤにはリーンに聞きたい事が有り余るほどであったはずだった。しかし、それらの聞きたい事は生き返ったリーンの口から零れてくる言葉の前に霧散した。

「大変だったわね……その間、私はあなたに協力出来なかった……その事を酷く辛く感じているわ。」

「いや、生きていてくれた……それだけで、俺は十分だ……」

「そう……」

リーンは頷いて少し寂しそうに笑った。

「小夜子さん……」

「何か？」

リーンが続いて小夜子に声をかけた。

「私が何も出来ない間、リユーヤを助けてくれて有難う。」

「いや、任務だったから……今は私の生きる意味だから……私は私の為にリユーヤと共にある事を選んだんだ。礼を言われる事じゃない。」

「それでも、私はあなたにお礼を言わなければならないの……リユーヤは私にとって大切な人だったから……」

「スラリとそう言える所を尊敬するよ。私には死んでも言えそうにない台詞だ。」

小夜子は胸の内でリーンに対して反発心を覚えていた。嫉妬だろうか？リユーヤの内部での特別な存在。死してなお生き返らせる程の意味のある存在。リユーヤは自分が死んでも生き返らせてはくれない。自分はリーン・サンドライト程の意味のある存在にはなれないだろう。だから、自分より遥かに存在意義のありそうなリユーヤを守ってきた。自分がリユーヤを好きなのかどうか？よく分からなかった……最初は殺す気も十分あった。だが、それもいつしか消え、いつかリユーヤは自分の中で特別な存在になっていた。それを恋愛感情と結びつける事に特に意味も感じなかったし、リユーヤを守るといふ使命を守る事に充実感を覚える。それでいいと思っていた。だが、それは、今感じるリーンへの反発心から考えるとまやかしなのかもしれない。そう思い心が揺れた。

「紫炎さん……初めまして……」

リーン・サンドライトは小夜子の言葉に軽く頷くと、次に紫炎に言葉を向けた。

「初めまして……リーン・サンドライトさん……」

「あなたには随分、御迷惑をお掛けしたようですね……」

「そうでしょうか？私の知らない事を知ったあなたに、私は私の事をあなたに聞いてみたいと思っていました。そしてそれらの思い……」

・カラクリは全て繋がっているはずですよ。」

「それをこの場で明らかにしたいのですか？」

「いえ、ジョー・アルシュが来てからでないという意味がない………
違いますか？」

「分かるのですね………」

リーンはそう言って静かに紫炎を見詰めた。

「あなたのように、全てを知る訳ではありませんが、事は直感で分か
ります。」

「そうですね………」

そう応えたリーンは少し悲しそうだった

第16話「一つの欠片」

コンコンというドアをノックする音が聞こえ、衛士の声が響く。

「ジョー・アルシユ様をお連れしました。」

「お通ししろ。」

アレクシーナの声がかたまり、それに続いてドアが開く。ジョー・アルシユの登場である。6人がそれぞれ複雑な表情をしている。扉が閉まると同時にジョーが口を開いた。

「このような意味深い会合に招かれた事を深く感謝します。クイーン・アレクシーナ。」

リーンがクスリと笑った。

「大仰な事ですね、ミスタージョー。この会合の意味をあなたは知りですか？」

「失礼ですが、あなたは？」

「これは失礼しました。私はリーン・サンドライト。あなたに言わせれば双子の片割れでしょうか？」

ジョーがクツクと笑う。

「これはこれは、黄泉の国からのプリンセス殿でしたか。私は現実主義者でしてね。死人が生き返ろうがなんであろうが、事実は事実として受け入れますよ、確証さえあればね……」

「信じると言う方が無理ですわね。目の前で現実を見せられない限りは……あなたのような方は……」

ジョーが再びクツクと笑う。

「人形遊びの好きな連中の手駒にしては面白い事を言われますな。」

「私が人形なら、あなたもまた人形では？」

「私が人形ならば、全ての責任は私には無い訳だ。」

ジョーは三度クツクと笑った。

「化かし合いはいい加減にしておらおう。」

アレクシーナが、二人の間に入り言葉を止めた。とど

「ジョー・アルシュ、座つてくれないか？」
「ええ。」

ジョーは素直にアレクシーナの言葉に従った。
「全員集まった所で議題に入る。」
「全員の目がアレクシーナに集まる。」

「まず、最初の議題、ジョー・アルシュの処遇をどうするかだ。」
リユーヤと小夜子、そしてジョー・アルシュが驚きの目をアレクシーナに向けた。事前予告なしで本人の目の前でその対応を決めようというのだ。しかもあえて「処遇」という言葉を使っている。

リン・サンドライトが手を上げる。

「リン・サンドライト、発言をどうぞ。」

「ジョー・アルシュに関しては放置でよくはありませんか？どうせたいした事など彼には出来ませんから。」

紫炎が手を上げる。

「紫炎、発言をどうぞ。」

「ジョー・アルシュの問題は彼の問題というより、彼の背後にいる干渉者達の問題でしょう。そしてその更に奥で意図を引く者の存在彼らがどう考えて何をしたがっているかが問題です。」

「彼らの意図とは？」

アレクシーナがそう聞いた。

「この世界の口減らし、そして預言の成就でしょう……
ジョー・アルシュはこれらの問題の表層の形に過ぎない。また、これらは人間にとっても大きな問題です。何をどう出来るかやってみる事は意味があると思います。その為にはジョー・アルシュも干渉者も邪魔です。」

ジョーが手を上げた。

「ジョー・アルシュ発言をどうぞ。」

「あなた方は普通の方法で間に合うと思っっているのか？馬鹿馬鹿しい楽観論にしか私には思えない。」

「だからと言って核戦争などやり過ぎであろう。」

「人間自身にその自覚がありさえすれば、そんな手段は選ばずに済んだ……いや、私が力を持つ事すらなかったはずだ。そもそも、普通にやって人間はその道を選び取れるのか？人間は目の前の欲望に弱すぎる、自分の事は棚に上げて非難する、表面上はともかく本質的な意味で思いやり合う事などない。自らの罪で自らが滅びるのは勝手だ。だからといって、そうでない者を巻き込む必要はないだろう。」

「それを、お前が選ぶと言うのか？」

「選ぶのは神だ。私はナンバーオブビースト。私の行動は神の計画の上にあるものだ。」

ジョー・アルシュが右腕の袖をまくり、腕を巻いていた包帯を外し666の痣を見せる。

「その痣がなんだというのだ……お前はそんな痣を刻んだ者や干渉者の思惑によって動くと言うのか？」

「違う……私は世界を救いたいのだ。その思いがたまたま干渉者の思惑と一致した。それだけの事だ。」

「お前の世界を救うと言うのは世界を滅ぼす事か？」

「破壊の中にこそ再生がある。ここまで来てしまった世界は滅ぶ事では救われない。」

「だから……だから多くの人間の命を奪うと言うのか？」

リユーヤが口を開いた。

「子供は黙っている！」

「俺が子供かお前が子供か、いずれどちらも子供なのだろうな。だが、諦めるという言葉は俺にはない。よく覚えておく事だ、ジョー・

アルシュ……いやさ、ナンバーオブビースト」

「リユーヤ、お前は知らない、この世界の穢れを……様々な裏側を……本当に狂っている人間がこの世界には巣食っている……そいつらがこの世界を壊し続けるのだ……

真に大事な事は亜流へとおき、目の前の自らの利得のみを追求する事を当たり前としそれを正義に包み隠し、次から次へと不幸を生み

出して行く連中の事を……しかも、そいつらは本気で自分が正しいと信じている……そういう連中に説得が通用すると思うか？……何故、私がすぐ連合の長に立てたか分かるか？ 能力者を通して、彼らの利権を保証し正義を吹聴したからだ。私は見続けたのだ……そして、ここで私が立たねばどうなるか？ その未来を私は見たのだ……この世界は生きながら腐っていく……」

「そう説得されたのだな……お前は……」

アレクシーナが少し悲しげな目でジョーを見詰めた。

「違う！ 俺は自分でそう考えたのだ！ 他者の意思ではない。」

「私はお前と話をしているのではない！ 「私」を出すのだな……」

「何！……俺は……違う……私は……」

……」

ジョー・アルシュが頭を振る。

「俺は！」「私は……」「違う、私は」「俺は……」

俺は……」

リユーヤが立ち上がる。

「どういう事だ？」

紫炎が静かに答える。

「彼に痣と共に打ち込まれた人格が……」「俺」なのです。ジョー・アルシュは「俺」と「私」という二つの一人称を内在させる事でナンバーオブビーストとして完成させられていた訳です。」

第16話「一つの欠片」（後書き）

ご愛読有難うございます><

作者めは読者様のご意見ご感想を聞かせて頂きたいと思えます。

評価から感想がいれるので、もしよかったら、ついでに評価もしたってくださいな。

頑張ってUPし続けます。

来週の頭、友達が来るのでちょっと休みます。あしからず。

第17話「フェイク」

馬鹿な私は私だ。俺？いや、なんだ？ウロタエルナ。連中の探りに過ぎないわ。誰だ？私？私は私。落着いて、あなたは役目を果たすのよ。

「ハハハ」

ジョー・アルシユは急に高笑いをした。

「冗談が過ぎましたか？あなた方の描くシナリオがあまりに滑稽だから私も少し付き合いましたが、悪乗りし過ぎましたかね。」

「しぶといな。」

アレクシーナがそう言った。

「あなた方には私が世界を滅ぼす者のように見えている訳だ。」

ジョー・アルシユはそう言って、自分の右腕の痣に左手を添えた。そして、ビリビリと666の痣を剥がした。その下には何も無い無垢な肌が露出していた。

「ご覧の通り、この痣はフェイクです。驚きましたか？」

アレクシーナ、紫炎、リーンがムスツとした顔でジョー・アルシユを見詰めた。リユーヤと小夜子が少し驚いた表情をする。西城は最初からムスツとしたままだった。

「こんな痣に自分の人生を縛られるほど私はバカじゃない。そういう痣があるというなら整形でもして消せばいいわけです。それで、自分のそういう属性を消してしまう。それだけでいい事でしょう？そもそも、本気で世界制服を企むような人間が、こんな場所でそんな痣を見せたりする訳がない。違いますか？あなた方があまりに私を異質に見るから、私もちょっと悪ふざけを試みただけです。そもそも私がそんな者だと言うなら死者を復活させるほどの神の使いとその仲間に限られた場所にノコノコ現れるはずがない？違いますか？まあ、私は死者の復活などという馬鹿げた事は信じませんがね。」

おかしい……ジョーはこんな立場に着く前に確かに痣の事で紫炎に相談にきていた。当時のジョーがわざわざそんな事をするはずはない……そもそもそんな悪ふざけをする意味がない。リユーヤはそう思って首を捻った。ジョーはそのリユーヤの考えを見透かしたように言葉を続ける。

「怪訝な顔をされていますな。確かに、紫炎教の教祖とあなたの前で私はそれを相談する素振りを見せた……確かにそういう事をするメリットは私にはないように見える……です
が……」

「？」

小夜子が首をかしげた。

「あなた方が本物かどうか私が非常に興味を持っていたらどうです？世界の命運に関わると言われるあなた方がインチキな人間だとすると、あなた方は世界中を謀っていた事になる。あなた方のようなインチキな人間が世界が動くという場で権力を握る。それを看過することが出来ないと考えている組織があったとしたら？もちろんあなた方が本物であったならば、その組織もこういう風には動かなかつたでしょうが……」

「痣はあつたのです……」

紫炎が静かに言った。

「我々は、リユーヤアルデベータが起こした奇跡も、紫炎の預言も、能力者も何一つそんなインチキな物は信じていない。立場は反対でしたが、我々の考えはラスア・エラーラの考えに非常に近かつたといえます。」

「お前の言った通り、痣を整形で消したという事も十分にありえる。」

「確かに……ですが、その証拠は何処にも無く、実際の今の私の何処にもそんな痣はない。それが現実なのです。」

「なるほど……な」

「アレクシーナ女王、貴女ほどの方が、このようなインチキマジナ

イシのいう事を鵜呑みにするなどあつてはならない事なのです。どうか、考えを改め我々の元に返ってきてはもらえませんか？」

「どういうトリックなのだ？」

アレクシーナは静かに言った。

「彼らより私をお疑いになるのですね……悲しい事です。」

「私は体験主義者だ。自分の体験は信じる事に決めている。」

「それが錯覚ではないと言う保障が何処にあるのです？ある種の団体が能力者の存在を演出し、リユーヤ・アルデベータの奇跡を演出した。確かに多少の直感の鋭さはあるのかも知れませんが、実際はそれ以上の物でもなんでもない。そういう事はありえませんか？」

「馬鹿な？ではリーン・サンドライトが生き返ったという事実はどう説明するのだ？」

「まず、あなたに手渡された遺伝子データが本物だったとして、遺伝子が同じというだけ。それが同一人物だという確証にはこの場合はならない……何故なら、リーン・サンドライトは研究施設で育てられている……」

「クローン??？」

「そういう可能性もあるという事です。オカルトなど信じずとも幾らでも事象の説明はつく。双子であつて一人はあなたに知らされていなかったとかあなたに手渡された結果が全て改竄されたものであったとか……不思議ではありませんか？復活したリーン・サンドライトは命を賭ける程愛したリユーヤ・アルデベータに会う事を拒んでいる……それは取りも直さず別人である事を知られぬ為……そう考えれば納得がいくでしょう。」

「そんな事はありません！」

リーンが叫んだ。

「少し待ってくれぬか……」

アレクシーナが頬杖を付き疲れたように言った。

「何が事実で何が嘘か分からなくなるな……」

アレクシーナの表情が曇り、一同に懐疑の目を向ける。自分が大掛

かりなトリックに引つかかっている事、その可能性を捨てきれなくなっただ。

「見事なものです。」

紫炎が静かに言った。

「そのような論法を使えば誰でも自己を揺らされる事でしょう。」

「新興宗教の教祖のあなたにそんな事を言われる覚えはないですな。」

「私達は事実を突きつけ合わせ道を先へと進ませるものです。確かに過程として自己を揺らす事はありますが……あなたのように悪しき目的を持ってはやりません。」

「あなたが善悪の判別を出来る人だと仮定しても、あなたが嘘を言っていない保障にはならないでしょう。私が話したのは全て事実に基づいた本筋的仮説。オカルトなどなくても説明はつくという事。むしろ死者が蘇るとか未来が分かるとか……そんな事が現実にあります。訳が無い。」

「それは、唯物論、不可知主義に基く妄念ではありませんか？いえ、そう考える事を元にしたあなたの洗脳プランでしょう。」

「そうですね？私にはあなた方こそが、人々を洗脳し「神」の名を語り、世界を支配しようとしているように見えるのですよ。事実……あなたは私の偽物の痣に対してトンチンカンな答えをした。」

「私達は「神」という言葉を振り回してなどいません。そもそも、広義で言う神は、創造神といえど宗教によって違う。我々が知り得たのは「干渉者」の存在「創造の主」の事です。それもほんの僅かなことしか分かっていない。」

「それを私はあなたが利用しているのではないのかと云っているのです。そもそも、あなた方が嘘をついていないとしても、それがあなた方の幻覚でないという保証はどこにも無い。」

「過去とは過ぎ去りし時空、どのような奇跡が起ころうと疑うことは可能だし、我々は少なくとも過去には戻れない。そして記録とい

う物は幾らでも改竄出来る。そう言いたいのですか？」

「記憶も……ですがね。」

「ですが、世界の9割以上の人間が何らかの「神」を信奉しているのです。あなたの言ってる事は近代唯物論によって築かれた強固な論理的妄想に過ぎない。それについての自覚はありますか？」

「確かに、世界の9割以上の人間がなんらかの「神」を信奉している。しかし、それは数字上の話。実際にはまるつきり無信心で、そんなものなど信用していないという人間も数多く含まれているでしょう……百歩譲ってこの世界を「神」が作ったとしても我々がそれに従わねばならない道理がない。事実、リユーヤ・アルデベータもそのような思想だと聞きますが？そして、私は思う。

「神」がいるのならば、何故この世は「愛」と「正義」に満ちない？この世界を作り、「神」の言葉を信じるならば、この世は不条理に満ち満ちている。「神」はこの世界を作っていないか、最初に作った後に放置しているとしか思えない。」

「別にそんな事は不思議ではないでしょう。普遍的宗教のどれもが「こう生きなさい」と示唆はくれています。ですが、それは元來報われる為のものではないのです。不思議な事にこの世界が天国であるとはどんな宗教も言っていない。恐らく、この世界は「天国」に近づける事は許されているが、その為には数多くの試練をくぐらねばならない。そういう世界なのです。」

「恐らく……ですか……しかも報われる事がないと……」

「厳密に報われない……という意味ではないのですが……
・それをあなたのような人間に説明する事は難しいのです。」
「いえ、是非ご拝聴させて頂きたい。」

ジョーは真面目なようなふざけたようななんとも言えない口調でそう言った。

「ならば、言います。「報われる」とはどういう事ですか？」

「なるほど、そう来ましたか……」

「身近な例を挙げますが……」

紫炎はリユーヤの方を見た。リユーヤは微かな予感に震え、頷いた。

「リユーヤ・アルデベータの為に身を投げ出したリン・サンドライトは死にました。生き返っていなかったとして、「報われなかった」のでしょうか？」

「最愛の人を残し早世そうせいしたのだ、報われたとは言い難い。」

「世間的にはそうでしょう。だからと言って報われない人生とあなたは言い切れますか？」

「それは……確かに……難しいですな……ですが、その場合のリユーヤ・アルデベータはどうなるのですか？彼もまた自分の命を賭けて最悪の結末を回避しようとしたはずだ。結果は彼にとって自分が死ぬ事よりも最悪だった。」

「信じ生きる事……それ事態が報われた生き方とは言えませんか？金や権力を得る事を幸福と考える生き方に私は賛同できません。金を得たところで権力を得たところで世界一の美青年と結ばれたところで、幸せで報われた人生とは限りません。」

「詭弁だ。金が無ければ生きていけない。権力がゼロなら一生惨め。そうでしょう。」

「そうですね、それらがまるで無くては不幸になりやすいのも事実ではあります。ですが、生きる以上にそれらの力を手に入れたらどうするか？どう使うかそれを試されるのもこの世の試練ではないのか？私はそう考えています。」

「なるほど……たいしたものだ。その考えが本物ならば、是非この先の世界の構築に手を貸してもらいたいものだ……あながインチキ霊能者でなければ……ですがな……」

ジョー・アルシュはそう言って言葉を切った。

第17話「フェイク」(後書き)

来週の頭、二日ほど用事があるので休みます。
水曜以降に乞うご期待！

第18話「変貌」

かわした……かわしたはずだ……こう主張しておけば、自分は不可知論者で通る。この場が論理的な話をするのであれば、お互いの話は平行線になるはずだ。例え、連中の言う事が正しくても「信じない」と言うだけですむ……真実などどうでもいい……この場を乗り切ることが先だ。厳密な意味で過去は調べようはない……ならば、私がアレクシーナ以外全員をインチキだと思っっている事にすればいい。簡単な話だ。いや、現状で自分が不可知論者でも困る。この場はいいとしても、先々が困るのだ。もう一押ししておくか……

「もちろん、私が先のような話をしたからと言って私が無神論者という訳ではない。ただ、あなた方が本物だという保障もない。むしろ、あなた方がインチキだという可能性も高いのですよ。そもそも、あなた方が呼んでいる「創造の主」とやらが、本当にこの世界を作った者だと何故言えるのです？ 魔女の力と神の奇跡とは私のような凡人には見分けがつかないのですよ。」

「見分けがつかないのなら黙ってりゃいいだろ。」
西城が不貞腐れたような顔で言った。不貞腐れたその顔が既に脅しの顔である。

「おまえさんの言い分を聞いてると、屁理屈にしか聞こえねーな。俺だってオカルトなんぞ信じられねーし、正直今でも尻がむず痒いだが、俺だってエージェントの端くれだ、どっちが事実に基づいているかなんて俺でも分かるぜ。お前の言う事を聞いてると、最低でもF国とクライ王国の全員がこぞってアレクシーナ女王を騙してなきやならねー。オカルトを信じられんのにそんな事は信じるのか？ お前こそどーかしてんじゃねーか？」

ジョーが目を吊り上げ、西城の方を見る。
「君は？」

「西城真治……クライ王国の末端調査員さ……」

「一介のエージェント風情が随分たいそうな口をきいてくれるな。」

「まあ、権力はなくなつて口がありゃ喋れるわな。」

「ジョーのこめかみがヒクヒクと動く。」

「ハハハハ」

アレクシーナの高笑いが室内に響いた。

「まったくその通りだ。F国も私の部下もそんな事で私を騙す必要がない。権力という立場にいと、当たり前前の事に目が向かなくなるらしい。疑心暗鬼は毒だ。」

「アレクシーナ陛下、なんの権限でこんな一般人がこの場に紛れ込んでいるのですか？」

「ジョーが歯噛みしている。」

「円卓というのはそもそも同じ立場で喋るといふ約束を加味している。今回の場合は特にそうだ。それに、この会合にサイジョーが加わることはきちんと私の署名で伝えてある？西城は我々にはない視点をくれるのでこの会議に特別に私が呼んだのだ。」

西城は軽く頭を下げた。

「そういう事です。西城さんの言うとおり、あなたの言い分などこのさいどうでもいいのです。」

リーンが静かに高い音域の声を発した。

どうする、搦め手があるか？一時的に騙したりかわすだけなら方法は幾らでもある。ですが……そうね、相手の出方が分からないわ。それにこの瞬間も作戦は続行中だ。少しでも時間を稼ぐ方法それを考えるのだ。その為には……相手を……ならば……

「なるほど。私を呼んだのは私の主張を聞く訳ではないと……まあ、いいでしょう。とにかく、私の考えはそういう事です。」

興奮したような態度を取って立ち上がったジョー・アルシユが落ち着きを取り戻したように座った。

「私も度が過ぎたかな？本人の前で処遇をきめるなどと……」

アレクシーナが薄く微笑んだ。

「本来の議題に入る。この世界の先に我々がどう動いていくか？ 忌憚の無い意見を聞きたい。」

アレクシーナが再び音頭をとる。

「一人一人の意見が聞きたい。まず、リーン。」

リーンも薄く笑う。

「本当に本当の事を聞きたいのですか？」

アレクシーナが頷く。リユーヤは腕を組み視線を落としており、

紫炎は目の前の白地で名前の書かれた三角錐を見ていた。

「私は、ここまでできた流れを変える事は不可能だと思います。ジョ

ー・アルシュがこのような存在に近づいたのも、既に手遅れだから。

「神」の裁きを受け、新たな新世界の到来を待つべきだと思います。」

リユーヤの視線が上がり、口が開かれた。

「本気でそう言ってるのか？」

「リユーヤ……私は死ぬ事によってこの世界の理を知ったわ。そして、その理の中で生きる以上、この世界が破滅するのは必然なの。ジョー・アルシュが先程言った通り、この世界の多くの部分が濃み、科学は中途半端に進歩し、世界は壊され続けるわ。誰かがなんとかしなければならぬ。それはそうなのかもしれない。

でも、環境の問題も食料の問題も遥かに前から警鐘を受けているのに、誰もどうにも出来なかった。誰かが何とかしていく、その為に時間も必要なの……その為にはやはり、この世界の人口は多すぎる……そんな現実的な事以外でも」

「もうよしてくれ……死ぬのが誰で生きるのが誰で、それを決めるのが人間以外で……そんなこと……」

「そうかしら？ それを決めるのが人間である方がおかしいわ。では、人間自身が誰が生き、誰が死ぬかを決めるの？ そんな無慈悲な事を「神」はなされません。人間にそれを決めると言う方が余程残酷だと私は思うけど……」

「だが、その前に我々が出来る事をしたっていいはずだ。」

小夜子が体を抑え震えているリユーヤを庇いながら言葉を返した。リユーヤにとつてリーンの変貌は耐え難いものだった。

「やれる事を誰もがやったかしら……一部の間人は少しでもよくと考えて動きはしたかも……でも、それが人間の総体としての意思だった？むしろ、目の前の利得に溺れ、全てを先送りにする。次々と現れる兆候を目の当たりにしても、多くの人間がそれを笑い事にした。それで間に合うとも思っていたのかしら？「神」はずつと告げてきた。でも聞かなかつたのはあなた達だわ。

全てが滅ぶより上澄みだけでも残してくれる分、感謝するべきだとも思うわ。実際、アレクシーナ女王が立たれた時も自分の目の前の事だけを考え、疑い、ジョー・アルシュに主導権を渡した。それは人類が選んだこと……選んだ事には責任が伴う。それは当然の事でしょう。知らないならともかく、知つた私は「神」を恨もうとは思わない……例えどんな運命であろうとも……」

「だからと言って、目の前で死んでいく人間を見捨てていいというのか？いや、見捨てられると言うのか？」

「人間らしく……本当に人間の善性を信じ、行つた者がどれ程いるというの？あなたは、ジョー・アルシュがつけ込んだ人間達を真の意味で知らない。それを知つて「彼等」を人間と呼べて？私に言わせれば「彼等」こそ文字通りの意味でケモノだと思つわ……人間は不思議だわ。酷くなるうと思えば何処までも酷くなれる。因果応報という言葉を知つてる？それが今ただだわ。」

「リーン……」
リユーヤが震えを止め静かに呟いた。いつからリーンはこうなのだ？何の為に生き返つたのだ。辛辣な現実を受け止めさせるために使われし神の使い……「悪魔」なのか？いや、人間に不都合だからと言ってそれが「悪魔」だとは限らない。むしろ事実を

告げるものは「天使」と呼ばれるのだろう。

「神」にも「悪魔」にも見捨てられた……それが俺達だ
って言うのか……」

「見捨てられた人間も多くいるでしょう。でも、総体としてはお救
いになられるおつもりよ。「神」は真の意味で救われるべき者を決
して見捨てはしない。」

「何様のつもりだ。そんな馬鹿げた話！」

小夜子が叫んだ。

「私はその最後のチャンスを与えると同時に、その事実を伝えに戻
った。「神」にとつても最後の賭けだったわ。そのチャンスを蹴
つて反アレクシーナ組織の陰謀に乗ったのは私じゃないわ。何様の
つもりと聞くけど？「神」に言わせればあなた達こそ何様のつもり
なの？与えられたチャンスは一度や二度じゃないのよ！自分達の力
で自分達の破滅も止めれない……そのあなた達が何を言
ってるの？」

「俺は……どうすればいい……」

リユージャが力無く言った。

「あなたの道はあなたが選んで……私が忠告できるの
はそれだけ」

リーンは悲しそうな表情でそう告げた。

第19話「紫炎の言葉」

「だからと言って諦める必要があるのでしょうか？私は諦めたくないのです。」

紫炎が目線を落としたまま静かに言った。

「これは、私の代理人としての言葉に過ぎません。」

リーンが静かに続けた。

「「眺める者」……か」

アレクシーナが手を頬にあてたまま呟いた。

「次は私でいいのでしょうか？」

紫炎が視線を上げてアレクシーナを見た。

「どうぞ。」

紫炎が頷き、意を決したように言葉を紡ぎ出す。

「リーン様のおっしゃる通り、今までの事から考えれば運命に対する人類の勝負は惨敗と言えるでしょう。ですが……」

小夜子の目線が紫炎の顔を捉える。

「「神」……「創造の主」の意向は本当に破滅なのでしょう
か？ならば、何故その使いであろうリユーヤ・アルデベータはこ
も苦しむのですか？そもそも、この会議自体も、リーン様の知られ
ている運命とは違うはずです。」

リーンは意味深に微笑を浮かべた。

「いえ、それは私の思い違いで実際はこの会議すら運命の内な
ものかもしれません。ですが、私は僅かな可能性を見出したいのです。」

「それで……可能性はあるのか？」

アレクシーナが力強い口調で聞いた。リユーヤは頭を抱えたまま
の姿勢で紫炎の言葉を聴いていた。

「「創造の主」の言葉に逆らわず、運命を変える……これな
らば不可能ではない……そう思えるのです。幸いなことに我々
の誰もが「世界を破滅させる」とは聞いていない。ジョー・アルシ

ユがどうなのかは知りませんが……ならば……破滅を避けようとする事自体は「創造の主」の言葉に逆らった事にならない……いえ、むしろ「創造の主」はそちらを望んでいるのではないかと……私には思えます。」

「そういう人間はきつと生き残るのでしょね……」
リーンが冷たく言い放った。

「可能性がゼロの事を「創造の主」……いえ、「神」が望むでしょうか……」

リユーヤは黙ったままその声を聞いていた。

「ですから……「破滅」を確定付ける「戦争」などは避けてもらいたいです。」

紫炎がジョーの方を向いた。

「私は「戦争」など仕掛けるつもりはありませんよ。ですがね、我が平和連合が攻撃を受ければ「武力」による報復は避けられないでしょう。ラスア・エラーラ暗殺以来、西方連合は色めきたっていますからね。あながち「戦争」は夢物語でもない。これを避ける為には西方連合の諸国の怒りを抑えるしかない。そんな工作は出来ないし、やれたとしてもバレタ時には逆効果でしょう。」

ジョーも静かな口調だった。

「ジョー・アルシュの暗殺も含めてか……」

アレクシーナがそう言い放った。ジョーが能力者を利用して、戦争を引き起こそうとしているのは、明白な事実だった。

「例え、ジョー・アルシュの暗殺に成功したとしても同じ事でしょう……我々が「創造の主」の意向を変える以外方法は無い。仮にジョー・アルシュの暗殺に成功しても次のナンバーオブリストが生まれるだけです。そうですね？リーン様。」

「イエスでありノーであるとしたか答えられません。」

リーンは凜とした表情で言った。

「それは、「創造の主」の意向を我々が変える事は出来ない……
……そういう事ですか？」

リーンは首を捻った。

「そこだけ変えればどうにかなると考えるのがあなた方の大きな勘違いである。そう言うしかありません。」

リーンはそう言って微笑を紫炎に向けた。

「それは我々この地に生きる者としての意見ですか？」

「いえ、厳密には私はもはやこの地の人間ではないのです。その点において私とあなたは違う。あなたはあくまで、この地に生きる者なのです。」

リーンはあくまで静かに言った。

「そうです。だから私は足掻くのです。」

「それは、誰にとっても苦しい道です……それでも行くのですか？」

「私はどう足掻いてもこの地に生きる者なのです。」

「その期待を「彼」にかけざるを得ない。それも分かっているのですね。」

リーンはそう言って目を瞑った。

「そうせざるを得ないのが辛い所です。」

「そして、その為のあなたの言葉……」

紫炎は静かに頷き……「彼」……リユーヤの方を向いた。

第20話「西城の疑問」

「これで私の言いたい事は全て言いました。」

紫炎はリユーヤから目を逸らし、アレクシーナの方を見た。

「では……」

アレクシーナはそう言っただけで周りを見回した。そして西城の前で視線を止めた。

「サイジョー……この問題を語ってくれないか？」

西城は仏頂面を上げ、うーんと唸ってから口を開いた。

「俺は、はつきり申し上げてここにいる連中ほど、事実肉薄してない。取り留めのない事しか言えないと思いますが……」

「それで、構わん。サイジョーなりの考えを語ってくればいい。」

アレクシーナが促した。

「それじゃー言わせて貰いますがね……」

西城はそう言っただけで黙り始めた。

「はつきり言っただけで、俺はここにいる連中の言ってる事が半分も信じられない。「神」がどーのとか「干渉者」がどーのとか「眺める者」がどーのとかどうだっただけでいい話なんだわな。だからって、この世界がどうなってもいいって事じゃねー。だが、日本で育った俺は御多分に漏れず、無神論者な訳で。正直、こんなところに呼ばれて困惑してる訳だ。」

西城はそう言っただけで一息ついた。

「だがな、今の話を聞いてると正直、絶望的な状況という事は分かる。まず、本当に神さんは我々を滅ぼすつもりなのかね？」

西城がリーンの方を向く。

「イエスでありノーであると言えるでしょう。」

リーンは視線を受け、答えた。

「その持って回った言い方が俺には分からねーんだ。もう少し詳しく

く話してくれねーか？」

「地を破壊する者を滅ぼす……これは約束です……これはこの国の聖書に関わらず、キリスト教のバイブルにも書かれています。もちろん、これ以上の破壊が進んでいけば、戦争を待たずに全滅ですが……」

「地を破壊する者ね……それが今の人類にあたる訳だな……なるほど。」

「ただ、選ばれた民はその後の地上で神の約束の世界を生きる事になります。全員を生かした場合は全滅……アレクシーナ様が上げられたような問題。食料、エネルギー、環境の問題で世界は人間の住めぬ環境になるでしょう。そうでなくとも、食料とエネルギーの問題は「戦争」の原因としては十分です。このまま進めば、いずれ破滅は避けられない。」

「なる程な、さすが神さんだ。よく考えていらつしやるよ。滅ぶのは自滅で必然……全部を滅ぼさぬ為の犠牲……よく出来ちゃいる。犠牲なくして間に合わない……それも分からんじゃない……」

「だけど？」

リーンが鸚鵡返しした。

「どうか、誰も死なねー方法はねーもんなのか？」

「恐らく、そう考え、問題に立ち向かって行く人間こそが救われるのでしよう……」

「恐らく……ねえ……」

「私にも完全に与えられた物とそうでない物があります。そして言えない事も……」

「おひただ夥しい死体の上ののっかった「理想郷」なんぞを素直に喜べるかい？」

「死人が出ない方がいいと？それは神だってそうでしょう……あなたも情報部の人間ならばジョー・アルシュに限らず、様々な人間の悪を見てきたはずです……世の中には本当に死んだ

方がましな人間だっています。」

「だからって、死なしちゃ終わりだろ。」

「死が終わりなのは、そこを終わりと考えている存在にだけに有効です。「主」^{あまじ}にとっては、この世界での魂の行程は、途中に過ぎない。死が終わりという考えは、それらの事を知りえぬ者だけに有効なのです。「神」にとって、死は決して終わりではない。」

「じゃあ、人類は座して滅ぶしかないってのか？」

「座して滅びを選べば、それこそ終わりでしょう。」

紫炎が口を挟んだ。

「そういう事です。無駄に見える一つ一つの事を積み重ねる。それ以外に人類に残された道はどちらにせよないのです。全ての人類が自覚するならともかくそんな事は恐らくありえない……だから、どうしても滅ぶのです……。」

「俺みたいな人間にやどうしようもないって事かい。」

「ようやく理解したか」

ジョー・アルシュが聞こえない程度の声でぼそりと言った。

「サイジョーさん、そう考えるのは自分を過小評価しています……。……いえ、それは全ての人に言える事なのですが……自分の立場が弱いからと言って、この世界の運命を変える事が出来ないというのは思い込みです。全ての人はこの世界の運命に意識、無意識に関わらず大きく関わっています。影響力の大きさは人によって違います。多かれ少なかれ人は人に関わり、繋がっています。普通の人でさえ、家族がおり友人がおり恋人がおり、相互に影響し合っているのです。その影響が世界を変え得る……。」

「事実です。全は個であり個はまた全なのです。」

「なら、俺にも出来る事があるってことか……。」

「そういう事です。」

「少し、考えさせてくれ。」

西城はそう言って押し黙った。

第21話「小夜子の意思」

「では、次はミス・サヨコ……どうぞ。」

西城の発言がこれ以上ない事を確認して、アレクシーナがそう告げた。小夜子が一瞬リユーヤの方を見て、それからアレクシーナの方を見据えた。

「私は……」

小夜子は言葉を区切り、その後静かに伝えた。

「私は……日本の一エージェントに過ぎなかった。高いレベルの能力者とは言え、別段「干渉者」や「眺める者」に選ばれた訳でもなかった。」

西城もリユーヤも、いや、ジョーを除く全ての人間が静かに聞き入っていた。ジョー・アルシュだけが、どこか不真面目な雰囲気醸し出していた。

「リユーヤについていた事だって最初は命令に過ぎなかった。リユーヤの監視の為に紫炎教に潜伏し、リユーヤが他国と接触をもつやいなや「暗殺」しようとした。F国に行つてリユーヤに協力したのだって、命令だ。私は戦う機械マシン……理由は上が考えてくれた。私は命令に従う……ただそれだけの存在だった……」

「あなたの成育過程、それがあなたに大きな影を落としているのも事実でしょう……気に病むことはありません……」

「紫炎が静かに言った。」

「そう、私は家出少女だった……父は酒を飲むと私をよく殴った……母は浮気をしていて、父に手酷い折檻を受ける私を見ては、「お前なぞ生まなければよかった。」と毎日のように言った。「私はいらぬ……」毎日のように私は呟いた。そして6月13日の雨の日、死ぬ為に私は家を出た。」

小夜子はそこで言葉を区切った。

「そして、飛び降りようとした橋の上で、今の部長の山口に拾われた……適性検査を受け、私は内閣調査室特別部隊の予備部隊に入った……私には才能があった……専門家に言わせれば、親から受けた虐待のせいで脳の特殊な部分が成長したせいらしいが……」

小夜子は再び言葉を区切った。その顔は無表情に近かった。

「私は、男勝りの成績で特殊部隊に入った。戦う事が生きる意味であり、命令を果たす事こそが生きる希望だった……」

小夜子の顔は相変わらず無表情だった。

「だけど、私はリユーヤに出会った。世界の運命を背負う男……それがキャッチフレーズの青年だった……どんな人間だろう……そう思った……どこかのインチキ宗教の教祖のようなヤツだろうと思っていた……」

小夜子はちらりとリユーヤの方を見て、再び正面を向いた。

「だが、違った。特殊な運命を背負ったと言えど……恋人の死を悲しみ、目の前に広がる惨劇に目を叛ける事の出来ない……ただの人間だった……私はリユーヤに出会い少し変わった……それは自分ですら気付かないほんの少しの変化だった……そして、リユーヤを知り、また私は少し変わる……いつのまにか私は命令ではなく自分の意思でリユーヤを守っていた……命令では邪魔になれば「暗殺」する事を望まれていた……だが、いつのまにか私にはそんな気はなくなっていた……」

「それが、この問題とどう関わっていると言うんだ！私は日本の一エージェントの来歴を聞きに来た訳じゃない。」

ジョー・アルシュが苛立たしげに言った。

「馬鹿は黙ってる！」

西城が強張った声で言った。ジョー・アルシュにとってどこまでも憎憎しい男だった。

「すまなかつたな……続けてくれ……」

西城がそう言った。小夜子が軽く頷く。

「私の生きる意味はいつしかリユーヤを守る事に変わった……
・上命令もまたそうだった……もちろん「暗殺」を考慮
する命令は今も生きてる……だが、私にはもう殺せない……
……私は……」

小夜子が少し悲しげな目をし、決意を込めた表情で言葉を続けた。
「私はリユーヤを守る！……そして、その望みが世界の
破滅の回避ならば……私はその為に全力を尽くす！」

そして、小夜子は再び目を伏せた。

「それが、今の私の生きる意味だから……だから諦め
て欲しくない。決して不可能に見えても、誰が諦めようとも、何が
どうなるうと、あなただけは諦めちゃいけない！だから……
……だから……」

言葉が激昂しても小夜子の顔は無表情だった。しかし、その無表
情の瞳から涙が零れ落ちる。

「例え愛する者が変わろうと、自分の中の何かが崩れよう……
……あなたは……あなただけは……そんな、何も
かも諦めた顔をしないで！」

リユーヤはその言葉を静かに受け止め、曲がっていた背筋をゆっ
くり正し、小夜子の顔を見詰めた。小夜子は、無表情のまま中空を
見詰め続けていた。

第22話「リユーヤ・アルデベータ」

「私の話はこれで終わりです。」

小夜子は凜とした表情で言った。涙の跡はまだ乾いていない。

「リユーヤ……喋れるか？」

アレクシーナが聞いた。

「ええ。なんとか……。」

リユーヤは自分の名前の書かれた黒い三角錐を見ながら辛うじてそう答えた。

「俺は……俺は……俺は……俺はどこかで自分独りで戦っていたような気になっていたのかもしれない。皆の意見を聞いて、俺は思い出した。」

リユーヤが大きく息を吸い込み、声のトーンを上げた。

「俺は世界の破滅を止めるのだと……俺は……「干渉者」や「眺める者」の思い通りには動かない。たとえ滅ぶのが必定だとしても、俺は諦めないのだと……それを……それを……それを……皆の言葉で思い出させてもらった。」

リーンが微笑する。小夜子は静かな佇まいのままリユーヤの方をチラリと見る。

「俺はこの世界を守る……滅びが必定だと……滅ぶ事が決まっていると俺は諦めない。例え「神」が敵だとしても……俺にはやっぱりそれしか選べない。計算上滅ぶこの世界であるうと、最後まで足掻いて足掻いて足掻き通す……俺は出来る限りの事をやる。それしかないのだと、俺が迷いの中悲しみの中にいる間も、俺を必死で支えてきてくれた人間がいる。滅ぶ事が必定なら運命を変える……変えてやる。「干渉者」や「眺める者」が滅びに向かわせると言うなら俺は戦う……。」

「「干渉者」や「眺める者」がいるとして、お前は一人でそれに立ち向かい勝つ気にいるのか？ 思いだけで世界の運命を変えるなど……。」

「……出来る事ではないだろう。」

ジョー・アルシュが言葉を挟んだ。

「なら、何もせずに諦めろって言うのか？」

「何が出来るのだと言っているのだ。お前はラスア・エラーラのおかげで一躍有名になった。とはいえ、一介のエージェントに過ぎない。神の写し身だの、救世主だの言われて舞い上がっているのか？」

「関係ないなそんな事……俺がそんな存在であろうとそうでなかつたら、俺は俺の生きる道を行かなきゃならない。俺の側で俺を支えてくれた人間の為にも……例えば、「神」が俺を作ったのだとしても、この世界で生きて記憶は、俺が俺の生き筋を選んだ事は、「神」の意思じゃない。俺を選んだ事だ！」

「仮にも救世主と呼ばれる男がこんな子供っぽい男だとはな。現実にあるパワーバランスはどうするつもりだ。世界全部がお前の思いに同調すると思っているのか。もし、私がお前達の思っているような男だしたら……この歴然とした権力の差をどう埋めるつもりだ。私が持っている手駒達に幾らお前が「特別」な力を持っているとしても、かなうものか……リン・サンドライトの言葉によれば、「神」も「干渉者」も世界を滅ぼす事を決めている。お前一人の思いなどで止めれる物じゃないのは火をみるより明らかだろう。」

「そうなのかもな。世界はお前の言うとおり滅ぶのかもしれない。

例えばそうだとしても、俺は自分の道を選んで歩く。後で諦めた事を悔いる生き方など俺はごめん。」

「お前が世界の滅びを阻止したとしても、そのせいで、より多くの滅びを生み出す。お前の言ってる事はそういう事だ。」

「お前こそ勘違いしてる。俺は世界の滅びの全てを止めると言ってるんだ。」

「馬鹿な……アレクシーナ閣下でさえ、間に合わなかったのだぞ。」

「だからって、リユーヤに出来ねーとは限らねーんじゃないか？」

西城がぼつねんと言った。ジョー・アルシユは「忌々しいヤツめ」と心の中で毒づいた。

「俺が特別な存在だと言うならその全てを使う。「神」が与えた運命も力も俺の意思も全部だ。」

「出来るものか。」

ジョーが呟く。

「覚悟を決められたのですね？」

紫炎が微笑み小さく頷く。

「リユーヤの覚悟は決まってる……………ずっと前から……………」

小夜子が涙の跡をそのままに頷いた。

「俺は止める……………戦争も……………世界の崩壊も……………」

「もつとも困難な運命を……………もつとも難しい道を……………」

「そうと分かっついていて進む……………そうですね……………ならば……………」

「ならば？」

リーンの言葉にリユーヤが返す。

「もしかすると、世界の破壊は最小限ですむかもしれませんが。人の覚悟と意思が道を切り拓く……………それは今までの歴史でも証明されている事です。だけど、それは私を救おうと運命に立ち向かった時より遥かに厳しく困難な道です。その覚悟はありますか？」

「ああ、俺は俺の存在の全てを賭ける。そしてきつと世界の崩壊を止める……………」

「ならば、歩み自分の全てを賭けなさい……………世界の運命が変わるように……………神が運命を変えて下さるように……………」

リーンは厳しい顔のまま静かに響く声でそう言った。

第23話「期待」

「俺に言えるのはこれくらいです。」

リユーヤが最後にそう言った。

「ならば、私の話に入ろう。」

アレクシーナはそう言って、姿勢を正した。

「正直、私は今戦争を止めれる立場にも、世界が抱える様々な問題の解決にも、直接関わられる立場に無い。」

アレクシーナは一同を見回してから、再び口を開いた。

「リーンの言う通り、世界の状況は芳しくない。そして、紫炎の言う通り諦めるつもりも無い。私は私なりのやり方で、世界の運命を変えていくつもりでいる。」

小夜子が頷き、ジョーが微笑を浮かべる。

「果たして人間は本当に間に合わせるだけの実力がないのか……
……それとも、これは不遜に思いついた人間に対する神の罰なのか……
……私には知る由もない。それでも、出来る事はしようと思う。私にはリーンや紫炎のように、能力もなければ、リユーヤやサヨコのように、能力を持つ訳でもない。それでも、私に出来る事があるはずだ。私は、自分も、ここにいる面々も最善の手を打つてくれると信じる。世界の壊滅などあつてはならない。また、そうしないだけの知恵が人類にはあるはずだ……いや……
……そう信じたいのだな……」

「アレクシーナ陛下、貴女が議長の座を降りたせいで人類が打つ手は、また数順遅れるでしょうな……それを何とかする為にもどうか、お戻り願えませんか？」

ジョーは心にも無い事を言った。アレクシーナはフツと笑う。

「それは遠慮しておこう。在野にもお前を抑えられる人員がいるであろう?」

どこまで読んでいる?まだ、議会に強い影響力を持っているとい

うのか？ジョーのその考えを打ち消すようにアレクシーナが言葉を続ける。

「もし、今、西方連合と平和連合が戦争に陥れば、国連やアメリカが動くだろうな。世界の警察として……」

手は打ってある。アメリカも国連もこの争いには巻き込まれる。そうなるように手は打ってあるのだ。

アメリカは平和連合の味方か、中立として動くだろう。国連は常任理事国が拒否権を発動すればどうにもならない。超大国や連合を抑えるには国連は少々力不足だ。アレクシーナが裏工作をしているのだろうか？それでも、西方連合が「核」か「生物兵器」を使えば、国際世論は一挙に平和連合に傾く。民主主義国家であるアメリカは平和連合に肩入れせざるを得ないだろう……。だが、西方連合には、アメリカや自由主義国家に牙を向くテロリストを大量に飼っている。「生物兵器」がテロリストの手に渡れば、抗争は泥沼化する。最終的には平和連合の勝利に終わる。そして、世論も平和連合に向くだろう。アメリカもロシアも中国もヨーロッパ連合も疲弊する。そして、その時一番被害が少なく、力を得ているのは最初に「核」攻撃を受けた平和連合となる。シナリオは出来ているのだ。そして、能力者や隠し玉を持つ俺のシナリオが崩れる可能性はすごく低い。

今の時点で何を言おうと、アレクシーナの言葉を誰も信じない。ラスア・エラーラの暗殺が効いているし、俺が世界制服を企んでいるなどアレクシーナ世界征服説より滑稽で陳腐だ。そんな妄言を誰が信じるだろう。全ての能力者は既にアレクシーナ犯人説を吹聴している。となれば、答えは一つだ。これはアレクシーナの揺さぶりに過ぎない。引っかかったフリをしておくか……。そうでしょうな……。もし、あなた達が言う通り私が世界征服を企んでいるとすれば、それは大きな障害となりますね。私は望んでいませんが、戦争になる可能性は現状でも低くはないのです。その場合どうすべきか……。非常に参考になりますね。

アレクシーナがチラリとジョーの方を見る。

「ジョーには、その戦争を避ける為に動いて欲しい。」

「今までの話を総合すればそれは避けられないのじゃないですか？それこそ「神」の御意思ではありませんか？私は、平和連合の議長でもない。それを避けるのは私一人では無理ですよ。」

「今の話を聞いてもお前は変わらないのだな……………」

「どういう事ですか？」

ジョーがそらとぼけて聞く。

「お前が苦労知らずのお育ちのいいボンボンだつて事だよ。」

西城が痛烈な皮肉を浴びせた。ジョーがキツと西城を睨む。アレクシーナはその喧騒を無視して言葉を続ける。

「そして、リユーヤの事……………私はリユーヤがこんな力を持ち死者を復活させ、「諦めない」という考え方を持っている事が偶然だとは思わない。やはり、リユーヤ、お前の行動が知らず知らずのうちに世界を救うのだ。私は、そう信じたい……………でなければ、リーンの言った通り、滅ぶのが必然という事になる。動き回ったあげく全員が死ぬ……………そんな結果だけは避けたいものだ。」

アレクシーナは少し視線を外に向け、その後で全員の方に向き直り再び口を開いた。

「確かに……………ここにいる人間に何が出来るかは分からない。だが、我々はこの地に生きる者の義務としてやれるべき事をやらねばならない。何が出来るかは分からないが……………そして……………」

アレクシーナはリユーヤの方を見据えた。リユーヤはその、悲しげな視線を受け止める。

「私は、リユーヤに謝らねばならない。お前一人に大きな運命を背負わせ、リーンとの再会をこんな形でしか実現してやれかつた事を。」

「いえ……俺が選んだ道です。」

リユーヤは静かだがハツキリした口調でそう言った。アレクシーナはその言葉を受け止め、少し微笑し、顔を引き締めて全員に目を配った後、こう言った。

「ここにいる、私の部下にあたる人間……リユーヤ、リーン、サイジョー、お前達の今までの任務を今日限り解く。この先は自分の考えで動いてくれ。動きやすいように階級を2階級上げておく。皆、頼んだぞ。」

アレクシーナの言葉の後、風が吹き抜けた。そんな気がした……

第24話「道筋」

七者会議が無事に終わり、リユーヤは外に出て待ち客用の椅子に座った。待ち客用の簡素な椅子とはいえ、さすが王宮だった。金で出来た枠組みに赤い絨毯のような布地がかぶされており、すわり心地が最高になるような曲線で作られている。だが、リユーヤにはその座り心地を楽しむ余裕はなかった。先々について何も決めていない。今までの目的は「干渉者」の手先を狩る事でアレクシーナを援護する事だったが、アレクシーナが失脚してしまった今、それに重要な意味があるとも思えなかった。成すべき事をもう一度見直す事、その時間が必要だった。7者会議の内容が頭の中を駆け巡る。誰がどう動き、何を成すべきか？考えても自分の分かるような事には思えなかった。

「何を考えているんだ？リユーヤ？」

小夜子が隣に座ってそう問いかけた。

「今、俺は何をするべきか？それを考えてた。」

「そうか……」

小夜子が素っ気なく返事した。暫くしてから、西城がリユーヤを挟んで小夜子の反対に座った。

「どうした？リユーヤ。」

「俺が何をすべきか考えていた。西城、お前は どうするんだ？」

「俺か？俺は引き続きアレクシーナ様の部下として働くつもりだ……」

西城はそう言って、胸からピースという銘のタバコを取り出した。

「吸うか？」

西城がタバコをリユーヤに勧めた。

「いや、いい。」

リユーヤがそう答えた後、暫く無言が続いた。その後、リユーヤがその沈黙を破った。

いかねーだろ？誰にだって巢立ちの時は必要さ。」

「なら、俺は何をすればいい。」

「それを」

「自分で考えろって事か……」

「そういう事だな……」

西城がもう一本タバコを取り出し、口元にあて火をつけた。

「だからって、あんまり深く考え過ぎなくていいんじゃないか？何者が、お前にそんな力を与えてるのかしらねえが、死者まで復活させといてそれで終わりって事はねーだろ？お前さんが普通に生活してたって、向こうから動かざるを得ない状況を作ってくる。多分、そうなるだろう。」

「それまで待つてろって事か？」

「そうだな、お前はずっと戦いどうしだろ……少しくらい息を入れてもいーんじゃないか？」

西城はタバコの灰を灰皿へ落としたりした。

「そうですね。少しゆっくりなさった方がいいかもしれません。」

紫炎だった。いつのまにか小夜子の隣に座っていた。

「あなたは、どうしても世界を守る為に戦わざるをえない。だからといって戦いだけが人生ではありません。暖かな物があるから戦い続ける事が出来る。どんな人間にも息抜きは必要です。違いますか？」

リユーヤは灰皿を見たまま答えた。

「そうかも知れない。俺は焦り過ぎていたみたいだな。休むというより、考える時間。それは必要なかもしれない。」

「そうですね。行動に移られるまで暫く休息されるといいでしょう。」

「俺もそれには賛成だな。」

西城はタバコを蒸かしながら、中空を見詰めそう言った。リユーヤは頷き、小夜子はどこかでホッと安堵していた。

第25話「ある穏やかな午後」

クライ王国の首都クライ・リンネでアパートを借りた。家具や調度類を、昔使っていた部屋から運び込んだ。西城や紫炎の言った通り、考える時間が必要だった。自分が現状で何をすべきか、考えざるを得なくなった。小夜子とそういう事をじっくり話してみたいとも思った。長い戦いを二人でくぐり抜けてきたおかげで、気心はしれていた。だが、俺が小夜子に関して知っている事は少ない。それは、この間の七者会議での「過去」の告白でも明らかだった。自分の調度は大方揃っていたが小夜子の調度は揃っていなかった。それに、歯ブラシや髭剃りなどの消耗品も不足していた。

長い滞在になる

そんな気がしていた。だから、二人で買い物に出かけた。まず、影法師のように暗い小夜子の戦闘服を一般用に変えようと提案した。小夜子はそれでは護衛が出来ないと言い、俺は、じゃあ一着ドレスを奢らせると言った。そんな事をして貰う義理はないと小夜子は返した。護衛とはいえ、俺の長い戦いに巻き込んだ事に対する詫びだと無理やり奢った。

「こんな服を着るのか？」

服屋で小夜子は困惑した表情を見せた。

「着てみるよ。きつと似合う。」

「そうか？なんだかコソバユイ感じがするんだが……」

「いいから、着てみな。どこのパーティーで護衛する時には必要だぜ。」

俺は小夜子をつまき言うてきた。しびしびながら、小夜子はドレスを着て俺の前に姿を見せた。

エメラルドグリーンドレスは小夜子によく似合っている。どこぞの貴人のようにすら見える。

「似合ってるよ。」

「そ……そうかな……私でも、こんな服が似合っただな……」

小夜子はそう言っただけ嬉しそうに笑った。会計を済ませて俺達は服屋を後にし、次の買い物に向かう。

「穏やかな日だな……まるで敵の気配を感じない。」

「そういう日が日常なはずなんだ。」

「嵐の前の静けさじゃないのか？」

「そうかもしれない。だが、今はこの時を楽しもう。俺達だってたまには息を抜かなきゃそれこそ息が詰まっちゃう。」

「そうだな。私達にだってこんな日が一日くらいあった方がいいはずだ。」

こうやって過ごす「世界の破滅」など絵空事のように思える。だが、世界は今、確実に滅びに向かっている。アレクシーナは失脚し、ジョー・アルシュが平和連合の実権を握った。その時から世界はあらゆる方向へ傾いていっていた。本当に俺に何か力があり、それは破綻を防ぐ力なのだろうか？それすらも疑わしくなる。もし、世界が終わらないのなら、こんな穏やかな生活が続くのだろうか？それならば、そうしたい。俺は素直にそう思った。

「考え事か？」

押し黙った俺の姿を見て小夜子がそう言った。

「少し……な……」

「そうか……悩みは尽きんな……」

「何を？とは聞かないんだな。」

小夜子がフツと笑う。

「私はお前を信じると決めたんだ。私はお前が目的を遂げられるように全力でお前を守る。それだけだ。」

「俺が本当に世界を救うような者だと思うか？」

「さあ？どうだろうな。私にはよく分からない。「神」や「干渉者」や「眺める者」が何を考えてるのか。リーン・サンドライトの言っている事が事実だとすると、ジョー・アルシュを殺して片がつく問題とも思えんな。ならば、「神」とやらは一体お前に何を望んでいるんだろうな？」

「それは俺が知りたい事だ。リーンを蘇らせた拳句にアレクシーナ様を失脚させたんじゃないや本末転倒だ。そうは思わないか？」

「リーンに言わせれば人類が選り間違ったって事になるんだろうが、どうなんだろうな。果たしてジョー・アルシュの策略を避ける事が果たして人類に出来たか？アレクシーナ女王がとった行動はあの時点では最善の手だろう。個を殺し全を生かす。為政者がせねばならない事だ。」

「それは俺も思う。疑惑を平和連合に向けさせない為にはどうしてもアレクシーナ様は辞めねばならなかった。これが人為で避けられた事だろうか？」

「同感だ。連中が最初から世界を滅ぼすつもりなら、どうだ？」

「それなら話は合いはするが、最初にアレクシーナ様を選ぶ必要がない。いや、アレクシーナ様の求心力と政治手腕を利用して破滅の下準備を作る。そこにリーンを置けば……」

「辻褄は合う……だが、その場合はリユーヤ、お前が「謎」だ。リーンの死者の復活はいい。それは、より信頼度を上げる為に考えられる。だが、何故お前を仲介する？普通の人間が現場の事を考えたら、まず、お前が「神」か「悪魔」の手先だと考えるだろう。そのお前はこういう考え方を持っているんだ？世界が破滅して欲しいと思っっている訳じゃあるまい。」

「謎は俺か……」

「「干渉者」「眺める者」「神」どの使いを自称する連中も世界は破滅すると言っている。だが、世間的に一番「神」の使いであろうと認められうる「死者の復活」「運命の改変」をやったのけたのはお前なんだ。そのお前は世界を破滅させないと願っている……」

「いや決意している。」

「どういう事なんだ？」

「私はお前が「鍵」なのだと思う。いや、おまえ自身が気付いていないだけで、お前が「神」なんじゃないのか？それならば、リーンをお前が復活させた事も、運命の改変をやつてのけた事も説明がつく。」

「待てよ。俺はそんな偉そうなもんじゃないさ。それじゃあ、なんでリーンはあんなつたんだ？俺が「神」で俺の望みが叶うなら、リーンはあんな形では復活しない、いや、そもそも死なせない。よしんば復活させたつてあんな風には変えさせない。」

「だから、謎はお前なんだ。これはお前の物語ではないのかとさえ思う。」

「俺の……物語？」

「お前を主人公に仕立て上げた何者かの手によって織られる物語。そんな気がするんだ。」

「馬鹿馬鹿しい……この世に何人人がいてると思ってるんだ。そいつらは、皆、自分の物語を生きている。それぞれに様々な物語がある。その物語の帰結は全ての人に繋がっている。そんな中から主人公を選ぶつて誰が決めるつて言うんだ。」

「「神」じゃないのか？それが……」

俺は少しどきまぎし、言葉に詰まった。「神」が主人公を決めて物語を織り成す為の世界の破滅を描いている。そんな事が本当にありえると言つのだろうか？

「だとすれば、世界はどうなるんだ？」

「滅ぶか、救われるか……まあ、そんな事がある訳もないさ。だけど、お前はやっぱり「特別」なんだ。だから、私はお前を守る。きつと……最後まで……」

「それは死なないという約束だな。」

小夜子は首を捻った。

「お前が先に死んだら、最後まで俺を守れない。だから、お前は俺

が死ぬまでは生きる。」
俺は小夜子の顔を見れず、まだ眩しい夕日を見ていた。

第26話「意図しない告白」

リユーヤは小夜子とパーティーに出席した。アレクシーナからの招待状が一昨日届き、二人はジョー・アルシュの動静を探る為と、アレクシーナへの謁見をする為に参加する事を決めた。

王宮の舞踏の間は、小学校の体育館ぐらいの大きさがある。幾つもの豪華なシャンデリア。敷き詰められた美しい赤いカーペット。それらを燦然と輝かせる美しい照明。どれもが、リユーヤや小夜子が暫く暮らした生活からは夢のような情景だった。

「ドレス、着る機会があつたら？」

「ふふ、そうだな。」

小夜子が少し快活に微笑む。二人暮しを始めて10日程たっていたが、その間に二人のささくれ立った心は、徐々に穏やかなものへと変わっていつていた。とくに、何故だか小夜子の笑顔が目立って増えていた。紫炎教に潜入していた時からほとんど小夜子の笑顔など見る事はなかった。小夜子の零れる笑顔を見て、リユーヤも少し笑うようになっていた。

「たまのパーティーも悪くないものだろう。」

いつの間にか側に来ていたアレクシーナがリユーヤにそう話しかけた。

「そうですね。悪くないです。」

「穏やかな生活を続けていると聞いた。いい事だ。」

「ジョー・アルシュの動向はどうです？」

リユーヤが唐突に聞いた。アレクシーナは微笑み、一瞬目を瞑り再び開けた。

「動きは掴みきれんな。防音設備の整った部屋で何者かと会話している事は分かった。だが、何を話しているか、その相手が何者かについては一切分かっていない。だが、動いているのだろうな。あの男が世界の権力を一手に掴む気である事は疑いようも無い。」

「ならば、戦争は……」

「そうならぬように動いてはいる。だが、ジョーの言う通り、西方連合が軍事行動に移れば止めようがない。あちらでは、ラスア・エラーラを私が暗殺した事になっている。どうにも打つ手が限られる。」

「では……やはり、西方連合から攻撃させるように仕向けるつもりでしょうか？」

「そうなくても、アメリカとロシア、ヨーロッパ連合には動かないように打診はした。だが……」

アレクシーナが目を細める。

「さすがに確約までは取れぬ。それらの国と友好的関係を築く為に平和連合との同盟、参入までの段取りをしておいたのが逆に仇になっているのが現状だ。」

「やはり、ジョー・アルシュはそこまで知った上で動いているんですね。」

「能力者が裏切っている。こちらがどこまで事を進めていたかは丸分かりだろうな。」

「となると……」

「ジョーが動いた時、その時がラストチャンスだ。」

アレクシーナはそれだけ言つと口を噤み、手に持ったグラスを開けた。

「さあ、お前もサヨコと踊って来い。長い戦いになる。楽しむ時間は楽しまねばな。」

アレクシーナはリューヤの肩をポンと叩き、小夜子に笑顔を見せた。アレクシーナが去った後、リューヤは小夜子に微笑んで「踊ろう」と誘った。

一瞬の油断だった。穏やかな生活をし、敵のいない10日間が小

夜子の勘を鈍らせていた。送りの車にドレスのまま乗り、酒も少しだけ入っていた。気が大きくなっていたのと明確な敵だと分からない相手だった事が更に反応を遅らせた。車から降りる時、自分の服と刀を取り出そうと後ろを向いた瞬間、刺された。

小夜子を刺したのは13〜14の少女だった。小夜子は倒れ、少女は呆然と立ち尽くしていた。少女を尋問するのは後だった。小夜子のドレスがみるみる血に染まっていくの見ながら、リユーヤは必死に止血した。傷は深い。少女の体重をかけた刺し方は、明らかに訓練を受けていた。応急処置の止血では血は止まりそうにない。

「やられたわ。」

小夜子が傷口を抑えて言った。

「喋るな。」

止血をおえ、リユーヤは小夜子を抱え、再び車に乗った。

「救急病院へ急いでくれ。」

リユーヤは小夜子の手を握った。

「大丈夫だ。大丈夫だからな。」

小夜子はうんと頷く。

「リユーヤ……………」

「喋るな。」

「私は死ぬかもしれない。この傷は深い……………自分でも分かる……………」

「……………」

「いいから黙ってる。」

「言っておかなければならない事が……………ある。」

息を途切れさせながら小夜子が言った。

「後で幾らでも聞いてやる。」

「お前は一人じゃない……………例えリーンを……………失つても……………リユーヤ……………」

「黙ってる！」

リユーヤは涙目になっていた。

「私は……………」

「小夜子……」
リーンが死んだ時の事が蘇る。死なせない。死なせてたまるものか。

「お前が好きだ……だから……一人じゃ……」

小夜子はそう言っただけで目を瞑った。

「急いでくれ。」

愛した人間を二度も失うのはまっぴらごめんだ。リユーヤは自身の変化に気付かず、いつの間にかそう思っていた。

第27話「西城の言葉」

救急病院の手術室の前にリユーヤは座っていた。血が止めどなく流れていた様子を今も覚えている。

俺はまた大切な者を失おうとしている。油断……それが招いた事だった。油断したのは小夜子とはいえ、リユーヤは遣り切れない思いに捉われた。

「小夜子は助かる。」リユーヤは何度もそう呟いた。助かる可能性は五分五分だと言われた。失血死ギリギリの量の血液が流れていたらしい。

誰が……恐らくジョー・アルシユの手に違いなかった。リユーヤ自身よりも小夜子を狙った意図は何だったのだろうか？いずれにせよリユーヤの護衛などといった役でなければ、こんな事態は興らなかつたらう。もし、自分がドレスをプレゼントしていなければ、小夜子はいつもの護衛の服を着ており刀を持ったままだったはずだ。ならば、小夜子は確実に反応し、相手の短剣を確実に叩き落していただろう。なごやかな生活が油断を生んだ。なごやかな生活を望んだのはリユーヤ自身だ。ならば、小夜子を死に至らしめようとしているこの事件の原因は自分にあるのだ。リユーヤはそう考えた。

胸の中でリーンの体温が失われていったあの時の感覚を思い出し、リユーヤは胸を締め付けられるような感覚に捉われる。「死なせるものか。」今の自分に出来る事などなかったはずだが、リユーヤはそう口にしていた。

カツンカツンという誰かが歩いてくる音が聞こえた。看護婦だろうか？リユーヤは足音の方に目を向けた。

「西城……」

足音の主は西城だった。

「大変な事になったな……まさか、今頃国内でこんな事

になるとは考えていなかったさ。」

西城はリユーヤの横に座った。

「犯人は……犯人は捕まったか？」

「ああ、捕まった。茫然自失としてその場に立ち尽くしていたよ。」

「どうやら、催眠状態にあつたらしい……」

「そうか……」

「普通、催眠術で人は殺せない。禁忌が潜在意識に入っているからな……。何らかの方法でその禁忌を取り除いちゃったらしい……」

「……」

「こんな場所でなんだが、その少女の「供述」によると、どうもアリス・メーラーという「女」に催眠術をかけられたらしい。」

「アリス・メーラー？」

「アレクシーナ様は役柄上、一応、世界に散らばる能力者の殆どの名前を掌握している。その中に名前がない訳なんだ。」

「ただの催眠術師……じゃないのか？」

「コンピューター検索では引っかけからなかったし、ジョー・アルシユの周りにもそんな人物はいない。」

「「敵」が他にもいるって事か？西方連合の連中？」

「そうなら話ははえーんだが、どうも勘に引っかけたよ。一応伝えとこうと思つてな。」

「わざわざすまない……」

「水無月の事が落着いてからでいい。詳しい事が分かればまた連絡はする。」

「ああ……すまない。」

リユーヤはそう言つて力なく頷いた。

「お前は、お前がついていながらなんでこんな事になつちまったとか考えてるんだろうが、あまり気に病むなよ。辛い話だが、小夜子はお前の盾になつて死ぬのが仕事なんだ。変に責任を感じるのはいせよ。小夜子も悲しむぜ。」

「そういう事じゃないんだ……」

「俺は……」

リユーヤはそこまで言っただけ息を呑んだ。

「俺は小夜子を失いたくないんだ。」

「お前……」

「俺は小夜子を失いかけて初めて自分の思いに気付いた。俺の為に誰かが傷ついちゃいけないんだ。だから……」

「そうじゃねーだろ。前にも言った通りお前は人類にとって重要な駒だ。ひよつとすれば、お前ならこの状況を覆せるかもしれない。」

その為の盾になら俺も水無月も喜んでなるぜ。いい加減お前も自分の立場を悟れ。でなければ、俺も水無月も犬死だ……そんなのはごめんだぜ。」

「俺は自分の周りで死人が出て超然と出来るほど強くはない。」

「だが、そうして貰わなきゃ困るんだよ。今更逃げ道はねーんだ。悟れよ。」

「それでも……」

俺は失いたくない。そう言いかけて言葉を止めた。光っていた手術中のランプがその時消えた。

第28話「くちづけ」

出てきた医師にリユーヤが駆け寄る。

「手術は……」

「成功です。取りあえず命は取りとめました。」

「そうですか。」

リユーヤはホッと一息ついた。

「よかったじゃねーか。これで一安心だな。」

「ああ……」

「今晚はもう目を覚ますこともないと思います。暫く入院という事になりますから、身の回りの物等を持ってきてあげて下さい。」

医師の言葉にリユーヤが頷く。

「西城、時間あるか？」

「お？おお、今日は仕事も終わって暇してるがな。」

「悪いんだが、小夜子の身の回りの道具を持ってくるから、護衛しててもらえないか？30〜40分で戻ってくる。」

「まだ、小夜子が狙われる可能性があるって事か……だ……
……止めを刺し損ねたとすりゃあ、動けない今もチャンスだわな。」

「そついう事だ。」

酒は抜けており、リユーヤは運転手を降ろし、西城と話していきくと伝え、運転席に座った。

リユーヤがアパートへ向かう。片道10分程度ではあるが、少し物を考えるには十分な時間だった。

狙われたのは小夜子。そして、刺したのは催眠術にかけられた少女。黒幕はアリス・メーラーという女。アリス・メーラーとジョー・アルシュには接点がない。もし、アリス・メーラーとジョー・アル

シユ、西方連合が関わっていないとなると、他にも敵が存在する事になる。小夜子が助かった事が分かって、リユーヤの頭の中を西城の台詞が走馬灯のように回った。

だが、取りあえず小夜子が命を取りとめた。助かってくれてよかった。心底からそう感じていた。だが、それと反対の嫌な考えも駆け巡った。10日ほど続いた穏やかな日々は、小夜子の命を危険に晒せた。敵はそこらじゅうにおり、虎視眈々とリユーヤ達を仕留めるチャンスを窺っているのだ。これらの問題を解決せねば、リユーヤ達に穏やかな生活は無理なのだ。

「静かに暮らす事も出来ないのか」
リユーヤはそう呟き車を止めた。

暖かい手……誰の手だろう。自分の手を握って待たせてくれている存在など私にはないはずだ。ならば、夢？これは夢？夢なのだ。夢でもいいからもう少し覚めないで欲しい。自分の手を優しく握ってくれる誰か……私が心の底で望む小さな温かみ……けして得られないはずのもの。

それが、今は与えられている……
明るい……朝日？誰がいるのか？誰が……

小夜子は目を開けた。

「気がついたか？」

声の主はリユーヤだった。それに気付いて小夜子はスッと手を引いた。

「まだ動かない方がいい。」

小夜子は置きあがるうとし、ウツとうめき声をあげる。

私は……

小夜子は横になって呟く。

「刺されたのだな……」

「そうだ、結構な重症だぜ。傷は……残るだろうって。」

「そうか、そんな事はたいした問題じゃない。まともに動けるまでに何日かかるかだ。」

「気にせず休め。俺はお前が治るまでずっとここにいる。護衛の任務は果たしてもらうぜ。」

リユーヤはそう言って軽く微笑んだ。

「リユーヤ」

「なんだ？」

「忘れて欲しい事がある。」

「なんの事だ？」

「私が」

小夜子はそこで息を詰まらせた。

「私が……お前を好きだと言った事だ。」

「忘れるような事じゃない……それに俺も……お前が大切だと思ってる。」

「言うな。お前にはリーンがいる。」

「リーンの事は、忘れようたって忘れられない。だけど、リーンは変わっちまった。それで、心変わりした訳じゃないが、今は俺はお前を大切に思っている。リーンに対する複雑な感情を終わらせて、その時お前の気が変わってなかったら……」

「私に愛される資格なんてない。」

「そんな事はないさ。お前は任務だとはいえ、それ以上に俺と共に戦い抜いた。俺の戦友だ。そして、俺の大事な人だ。」

「私は！お前を殺す為の任務についているんだぞ！」

「俺を孤独から救ってくれた礼だ。」

リユーヤはそう言って小夜子の唇を奪った。

第29話「小夜子の迷い」

容態が落ち着いて、小夜子は警護付の病院に移された。アレクシーナの計らいだった。

キスをされ口ではリユーヤを拒絶したが、心まではリユーヤを拒絶出来なかった。やはり、私はリユーヤを好きであり、心の底で感じるリユーヤへの温かさ、リユーヤへの感情はより激しい物へと変わっていった。

リユーヤが所用で出かけるその瞬間に寂しさを感じたし、いない間に感じる寂寥感はいよいよの程激しい物に変わっていた。

いっそ、リユーヤがリーンを思い拒絶してくれていれば、少なくとも自分は強いままの自分でいられたはずだった。だが、リユーヤは小夜子の思いを受け入れ、リーンとの間に横たわる複雑な感情に決着をつけていくと言った。

病室で繰り返されるリユーヤのキスは自分を別の物に変えていくようで奇妙な感覚だった。だが、それは悪い感覚ではなかった。恋愛は自分以外の他者を大切に考える最初のハードルだと誰かが言っていたが、その意味が少しだけ分かるような気がした。

病室で見上げれば、リユーヤはいつもすぐ側にいた。小夜子の告白を聞いてから、リユーヤは前よりもずっと優しく接してくれた。キスを求められればキスをした。体が重症でなければ、感情の波に飲まれ、きつともつとリユーヤを求めていただろう。リユーヤを抱きしめたいとも思っていたし、リユーヤに抱きしめられたいとも思っていた。

その反面、自分の任務はリユーヤを守り場合によっては暗殺する事だという事を考え、自分の感情に蓋をしようとした。私は冷静で冷徹なはずだろ？ 何度もそう問いかけた。叶わぬ望みであるからリユーヤに対する自分の感情を私情と割って捨てられていた。だが、その望みは完全とは言えないまでも叶ってしまった。リユーヤも私

もこれでいいのだろうか？何度も考える。世界を変え得る者とそのボディーガードが恋仲になってしまう。まるで映画の中の世界のようだった。これでいいはずはないと何度言い聞かせたところで、本気で自分の身を案じ、優しく接してくれているリユーヤを見ると、心は萎え、恋の感情に身も心も捉えられた。

「何故、私は告白などしてしまっただんだ……」

小夜子はリユーヤのいない部屋で静かに呟いた。

トントンとドアのノック音が聞こえる。

「誰だ？」

「西城だ、入っていいか？」

「ああ、だが、リユーヤは今いないぞ。」

西城がドアを開け、カツカツと足音をたて入り込んだ。

「具合はどうだ？」

「大丈夫だ。回復待ちだな。」

「そうか……まあ、ゆつくりと休む事だな。リユーヤもそうだが、お前さんもちつとは休んだ方がいい。」

「気を使わせて悪いな。私は大丈夫だ。後、三日もすれば動けるだろうさ。」

西城は近くの丸椅子に腰掛けて小夜子から目を逸らせた。

「お前さんもリユーヤも無理をする性質タチだ。体をきっちり休ませなきゃ仕事はできねー。そう考えて休むこつたな。」

小夜子はフッと笑う。

「リユーヤは一度家に戻って来ると言っていた。暫くは戻らないと思うぞ。」

「知ってるさ。その代理の護衛できたんだ。」

「？ここは王侯貴族専用の病院だ。警備システムに抜かりはあるまい？少しくらいの時間なら大丈夫なはずだ。」

「まあ、そうなんだが、ちよいとばかりリユーヤが時間が欲しいって言うんでな。F国の一件でえらい信用されちゃったもんだ。難儀な事だぜ。」

小夜子が再びフツと笑う。

「お前さん……笑うようになったな。」

その言葉を聞いて小夜子は顔を引き締めた。

「気が緩んでいるのかもしれないな。刺されたばかりだというのに。」

「笑うようになったのはいい事だと思うぜ。」

西城はそう言ってニヤリと笑い、小夜子も微笑を零した。

「お前さんリユーヤに告白したらしいな。」

西城が唐突に言った。小夜子が気色ばむ。

「リユーヤから聞いたのか？」

「いんや、運転手が聞いてたのさ。残念だがお前さんがたは完全に自由じゃない。我々の監視がある程度行き届いているって事さ。」

「そうか……そうだろうな。運命を変え得る男、リユーヤ・アルデベータの事だからな……」

「そういう事だ。まあ、知ってるからリユーヤにもかまをかけた。

最初は渋ってたが成り行きは聞いた。勘違いするなよ。深いとこまでは聞いちゃいねえ。お前さんがリユーヤを好きでリユーヤもお前

さんを憎からず思ってるって程度の事だ。それ以上の事は聞いちゃいねえよ。」

「下世話な事をするな……」

「わりーがこつちも仕事なんぞな。リユーヤの動向を知つとかなきやなんねーんだよ。人の恋路に入り込むなんぞ、俺は反対だったん

だが、アレクシーナ様が酷く知りたがってた。リユーヤが「救世主」なら様々な問題に対する答えがそこにあるはずだったな。だが、ま

あ、野次馬根性だな、今回ばかりは……」

西城が諦めたように溜め息をつく。

「アレクシーナ様の言う事も分からなくもない。恋愛や結婚の問題はいずれの宗教でも結構大切に扱われている。」

「俺にしてみりゃ、好きだ惚れたなんてのは個人の問題で他人が口を挟むような問題じゃねえって思うんだがな。」

「神が運命を定めているなら、結婚相手も神の定めた相手だろ？それをコロコロ変えてもいいのかという考えは何度も問題になってる。それが理由で改宗した王様もいるくらいだ。」

「リーンの事を言ってるのか？」

西城が問った。

「リユーヤの定められた相手というのはリーンだろ。私はそう思う。」

小夜子が答える。

「おりゃあ恋愛にゃ詳しくねえが、そういうのは当人同士の気持ちじゃねえのかい？」

「リーンはリユーヤのパートナーとして文字通り「復活」までしてるんだ。それを、私なんかが割り込む余地はなかったはずだ……だから……」

「だから、今の恋がいけねーてののか？俺はそうは思わねーぞ。幸せになる権利ってのは誰にでもあるはずだろ？リーンにもリユーヤにも、もちろんお前さんにもだ。相手がいるからって思いすら伝えちゃいけねーなんて決まりはねえだろ。それに、俺はリーンはリユーヤのパートナーとして生き返ったんじゃないと思うぜ。リーンはリユーヤに復活した事を伝えず会いもしなかった。七者会議でようやくご面談だ。それで、あの言いようだ。昔からなのか変わったのか知らないが、今のリユーヤにとっては酷な話だ。俺はリーンよりお前さんの方が似合ってると思うぜ。戦友だし、どちらかと言えばお前さんを応援するさ。」

西城はそう言って小夜子を優しく見詰めた。

第30話「庭園の日差しの中で」

王宮の庭園。そこでリーンは待っていた。

デッキチエアーに腰掛けたリーンは、紅茶カップを片手に訪れた客を見もせず

「来たのね。リユーヤ。」

と言った。

「久しぶりだな。」

「七者会議以来ね。」

リーンはカップを白い丸いテーブルの上に置いて、リユーヤの方を見た。

「二人で会うのはもう、何年ぶりだ？」

「そうね。二人きりで会うのは7年振りかしら。長い時間が掛かったわ。」

「俺は、お前を死なせた……………」

「呼び戻してもくれたわ。」

「お前まで俺が生き返らせたというのか？」

「違う……………でも同じ事かしら、「私」はあなたに呼ばれて生き返った。それは事実よ。」

「どういう意味だ？」

「それをあなたは知る事になる。でも、それは今ではない。今あるこの運命はきつと変わらない。だから、迷わず自分の道を行って……………それがきつとこの世界を救う事になるから……………」

「俺は……………」

「……………」

「お前のいない間にある女性と出会ってしまった。俺は今その女性の事を愛しいと思っている。」

「小夜子さんの事ね。聞いてるわ。」

リーンは冷静に言った。

「だから……お前に対する気持ちに自分なりに決着をつけにきたつもりだったんだが……こう考えてみると身勝手な話だな。」

「ええ、身勝手だわ。」

リーンはそう言い放ち、リユーヤから一瞬目を離し、再びリユーヤを見詰め言葉を続けた。

「でも、仕方のない話……私は「死んだ」事になっていた。いえ、実際に死んでいたわ。そして、「生き返った」……でも、私は変わっていた。そして、あなたに会う事を拒んだのも私。そして七者会議でハツキリとあなたの意思を否定したのも私。そして、あなたの側にはあなたを支える人がいた。あなたの心が私から離れて小夜子さんに傾いても仕方ない事だと思う。」

「そう仕向けたのか？」

リユーヤは縋る様な目でリーンを見た。心が動揺し自分でも自分が分からなくなっていた。

「ある意味ではそう。」

リーンは静かに再びカップを口元に近づけた。

「でも、それは私のあなたへの愛が変わってしまったから……もう変わってしまった事だから言うわ。あなたはアレクシーナ様の敵になる事になっていた……」

リユーヤの顔が蒼褪める。

「アレクシーナ様の世界を救いたいという思いが平和連合を築き、それは戦争へと繋がっていくはずだった。それは、今もそうなのだけれど……世界の破滅を知ったあなたはアレクシーナ様を倒しに行く事になっていた……あなたの敵として私も存在するはずだった……その中でジョー・アルシユは特殊な役割をするはずだった……」

「何を言ってるんだ！俺が……」

俺がそんな事をするはずがないとリユーヤは言いたかった。だが、

わざと捕まりアレクシーナと話す機会がなければどうだっただろうか？ 能力者の裏切りはなく、アレクシーナは世界を救う為にと動き、またリユーヤはそのせいで世界が破滅すると信じ、アレクシーナとの抗争は避けられなかったはずだ。そして、リーンが生きている事も知らなかった事になる。

「だけど、この物語は語られなかった物語。アレクシーナ・クライとジョー・アルシュこの二人の物語は別の方向へと変わっていった。アレクシーナ様は御自分の未来を変え、ジョー・アルシュもまた新たな運命の奔流へと巻き込まれた。その中で変わらないものがあった。」

「？」
「世界の破滅とあなたの破滅と戦うという運命。」

「！？」
「元々、あなたは私が生き返った事を知らず、小夜子さんと結ばれる運命にあった。それは、新たな災厄の前触れなのだけれど……」

馬鹿な……ならばジョー・アルシュの反乱も俺の小夜子への気持ちも作られた物だというのか。ならば、人は何の為に生きている。生きた思いが全て何者かの織り成す運命の結果に過ぎないというのなら、何の為に人は……そんな事は……信じられない……いや、信じたくない……」

ならば、「敵」はなんなのだ？「干渉者」「眺める者」「いや、そんなちゃんけな物じゃない。「敵」はあらゆる運命を織り成す「神」なのか……」

「新たな災厄と言ったな。それは……」

「それは、あなたが最愛の者を失うという事……」

「俺は小夜子を失う……そういう事が……」

「全てを破壊しようとするか……全てを救おうとするか……あなたはそこで選ばなければならないの。」

「俺は……俺は同じ過ちを……」

リユーヤは一瞬言葉に詰まり、続けた。

「繰り返したくない。」

目の前の女性が、傷つき倒れ自分の腕の中で死んでいった事を思い出していた。

「ジョー・アルシュを放っておいても、世界は壊滅していく……
……でも、それを決めているのはジョー・アルシュでも「干渉者」でも「眺める者」でもない……それは……」

「神」なのか……

「あなたなの」
リン・サンドライトによって放たれた言葉は庭園の日差しの中を舞った。

第31話「恋と戦友」

帰ってきたリユーヤは無口だった。西城はリユーヤと入れ替わって出て行き、二人つきりになっていたが、小夜子が何を話しかけても、ああとかうんとかいう言葉しか帰って来なかった。

「何かあったのか？」

小夜子が意を決して聞いた。

「小夜子は……」

「ん？」

「小夜子は俺の側にいて危険を感じた事はないか？」

小夜子は少し笑う。

「危険危険でないと言えば、常に命懸けだったな。お前を守る事が私の役目だろ？危険があつて当然だ。違うか？」

「そう……なんだよな……今回の一件だって俺を護衛する役目じゃなきゃ、刺される事もなかったはずだ。」

「何が言いたい？」

小夜子はハツとするほどのきつい表情でリユーヤを見ていた。

「俺の護衛なんて事をしなければ、お前の命はもつと安全じゃないかって事。」

「私の仕事を忘れていいのか？私の仕事はいつも死と隣合わせだ。」

お前の護衛につく以前からな。」

「だが、高レベルの能力者が死に晒される危険性は、俺に係わらなければ皆無に等しいんじゃないのか？」

「今回だって素人に刺されて命を落としかけた。どこにいても危険は同じだ。」

「だけど……」

「私を追い出したいのか？」

「いや……」

そんな訳ではなかった。

「リーン・サンドライトに会って来たど、お前は言った。お前が心変わりしたと言うなら遠慮なく言ってくれ。私は護衛に徹するか、徹し切れないと判断するなら私は自分から任務を降りる。」

その言葉は嘘だった。リユーヤの心変わりを知り、リーン・サンドライトとの事を心から祝福できる。そんな心理的状态にはなかった。

「俺がリーンを選ぶと言えば、日本に帰るのか？」

「そうなれば、私は私の内情を上層部に報告しなければならない。上がなんと判断するかは分からないが、今、私以上どころか、私に近いレベルの能力者もない、だから私を外すとは思えない。」アレクシーナに話し、圧力をかける事で小夜子を日本へ戻す事は可能だ。だが、果たしてそれで、小夜子の身の安全を保障できるというのだろうか？リーンの時のような事はごめんだった。

「正直に話そう……」

リユーヤは覚悟を決めたように言った。

「私が邪魔ならはつきりと言ってくれ。」

小夜子は冷徹な表情でハッキリとそう言った。

「小夜子……君はこの先の運命で命を落とすらしい。」

「だから？覚悟はとうに出来ている。」

「俺は、おまえを死なせたくない。」

「人間はいつか死ぬ。それを恐れては何も出来ない。」

「そういう意味じゃない。俺は俺より先に小夜子に死んでもらいたくないんだ。リーンの時のような気持ちはもうごめんだ。俺が死んだほうがましだ。」

「お前は私が死なせない。何があってもだ。」

リユーヤの言葉が嬉しかった。だが、小夜子は自分の心を表には出さないように勤めた。

「愛する者が目の前で死んでいくのがどうという気持ちか分からないから……」

「そうだな。私には月並みな感情など不相応だろう。だが、愛する

者を失いたくないという気持ちは今は分かる……………」
「なら……………」

「お前は私を安全な場所に送って自分だけが危地に飛び込むつもりか？お前一人で戦う気か？全ての戦いが終わる。それを私にずっと待っていると言うつもりか？私に力がないのならともかく、私にはお前を守る力はある。それで、私に自分だけ安全地帯に隠れて待つてると言うのか？お前は命の危険性があるというのに……………」

「俺は、どうしたってお前を失いたくないんだ！」

「私だってそうだ！」

リユーヤが表情を引きつらせて言葉を発する。

「もう二度とあんな思いは……………」

「私に出来ることをやらせず戦死報告を待たせるのはやめて欲しい。」

「お前らの言うとおり俺が「特別」なら俺は死なない。」

「イエスだって殺された。神の保障が何になる。」

「俺はリーンを選ぶ！邪魔なんだよ！」

心からの言葉ではなかった。だが、小夜子を傷つけ黙らせるには十分だった。

「例えそうでも……………私は……………私はお前を守る。私が「生きる」意味はそこにしかないんだ……………」

「違う。お前はドレスを着て笑った。パーティーの場所でも笑った。普通の女の幸せだって十分手に入れられる。だけど……………今のまま俺の傍にいれば、きつと……………命を落とす。」

「それをくれたのはお前だ。お前の前だから笑えた。そのほんの一時を過ごせたのもお前といたからだ。私は、その為になら命も惜しくない。」

「幻想だ。お前が選べばそういう道だってある。」

「初恋の男を死地に追い込んで見物してか？そんな事が出来るほど私は器用じゃない。」

「俺が死んでもきつと時が忘れさせる。リーンの時だってそうだった。」

「廃人のような生活を何ヶ月も続け、なお引きずって？私はお前が死んだら生きていない。私には「命令」とお前への感情以外何も残っていないんだ。捨てられてまで自分の恋を取り戻そうとは思わない。でも、私がお前を好きだという気持ちはきつと消えない。」

小夜子の生い立ちを7者会議の時に聞いた。きつと事実なのだろう。壊れそうな精神を国家の為の「命令」で支えてきた。そして人の温かさをリユーヤから感じた。止める事はもう不可能なのだろうか？

「俺は……俺は小夜子、お前の事が本当に好きだ。いや、気付いたら好きになっていた。どうしようもない何の歯止めも効かないほど……」

「それが本当なら傍に置いてくれ。私の寿命がいつ終わろうと、それまで傍にいたい……」

リユーヤはゆっくりと小夜子に近づきキスをした。

「これが答えだ。」

「私の護衛を認めるのだな？」

「戦友に引っ込んでいるとは言えないものなんだな。」

リユーヤは諦めたような口調だった。

「そうだ、私とお前は最高の戦友で最強の恋人だ。私もお前が好きだ。」

今度は小夜子がリユーヤにキスをした。

第32話「黒衣の男」

「お目覚めですか？」

真つ黒な服を着た男がジョー・アルシュに言った。ジョーは最近この防音設備のついた部屋の中で寝起きしていた。この男の来訪を受け入れる為である。ジョー・アルシュは軽く首を振り、眠気を頭から追い出した。

「ああ。それで、リユーヤ・アルデベータの暗殺には成功したのか？」

「いえ、ミナヅキ・サヨコに阻まれました。」

「チツ」

ジョー・アルシュは忌々しげに舌打ちをした。

「お前達も口ほどには使えんな。」

「はっ。仰せの通りですが、サヨコに深手を負わせました。少なくとも数週間は足止め出来るかと。」

「暗殺に失敗したとなればリユーヤが単独で動いてくるだろう。」

「どうやらそれはないようです。リユーヤはサヨコの看病につききりです。動く様子はありません。」

「また、下らん情に流されたか。こつちとしては願ってもない展開だ。世界の破滅と仲間の命を天秤にかければどちらが重いかは分りそうなものを……相変わらず甘いな……」

「こちら準備を急ぐ必要があります。」

「そうは言っても、さすがに西方連合の連中も核を使うのには躊躇いがあるらしい。一国の責任にして、無理やりさせるか。連合全員の承諾は受けれなくとも。一国の核管理者を手中に入れるのはそう難しくもないと思える……能力者を動かし、催眠を使うか。」

「「禁忌」を取り除くプログラムは渡してあるはずです。それをお使いになればあるいは……」

「そんな事は分かってる。お前に指図される覚えはない。」

「ハッ。出すぎた事を……ですが、この先を考
えあなた様の護衛を三人ほど増やしたいと思えます。」

「アレクシーナやリユーヤが動くということか？」

「その三人、私の子飼いです。きつと役に立つかと……」

「分かった。それは任せよう。」

「ハッ。その三人の名はアリス・メーラー、レー・ルーク・シエペ
シ、シーザー・ホワイト」

「ジョー・アルシユは頷く。」

「他に言う事はあるか？」

「いえ。」

「ならば下がってよい。」

その言葉が終わると黒衣の男はスツと消えた。

ジョー・アルシユはフウと溜め息をつき、辺りを見回した。

「だいじょうぶ。うまくいく。そうよ。あなたの計画は運命が手助
けするわ。例え、リユーヤであろうとアレクシーナであろうと止め
られない。恐れるな。怖がるな。裁可はお前が下す。誰にも止めよ
うがない。神がお前にはついてる。愚鈍なる者に死を……」

ジョー・アルシユは腕に浮かび上がった痣を見ながら、頭の中に
流れる声を聞いた。

黒衣の男が、廃屋の中に立っていた。他に5人の男女がいる。

「まず、言っておく。計画は順調だ。ほぼ当初の計画通りにあると
言っている。」

黒衣の男がそう語った。

「アレクシーナの代わりにジョー・アルシュが立ち。小夜子とリューヤの関係も同じ方向へ修正した。」

「苦労したわ。小夜子にギリギリ死なない程の傷を与える。難しい注文だったわ。確実に殺すならば、刺した後捻れば空気が入って確実に死ぬ。殺す気がなかった事が悟られないか冷や冷やものだったわ。」

「それは問題はなからう。元々の流れがある。小夜子はその時点で死ぬ流れになかった。我々が意図的に殺さない限り、小夜子は助かるさ。リューヤの意思もあるうしな。」

「そして、アリス・メーラーの名前を少女に語っておく。もちろん偽名だと思うだろうが、この後、ジョー・アルシュの側近につけば、いやでも気付く。」

「我々が挑発し、連中が動くように仕向けている事にだな。」

「そつだ。」

黒衣の男が答える。

「だが、ジョー・アルシュをあのままつけ上からせておくのか？我々は臣下ではない。対等な存在だと教えてやればいい。」

「奴の覇欲が萎えるだけだろう。うまい手ではない。ジョーだけが我々の中で特異なもの事実だ。奴は政治に特化した能力者だ。我々とは違う。知らぬから演じれる。知らぬからやれるという事もある。政治家特有の思い上がりも十分使うべきだ。」

「だが、選ぶのはジョーではないのだぞ。それを知らぬままでは、少々可哀相な気もする。」

「本人が幸せなら我々が口を挟むべき事ではないのでは？彼は知らずに演ずる。我々は知って演ずる。そこに大きな差はないでしょ？」

「それはリューヤにも言える事では？」

「彼は知ってはならない……知っては意味がないのだ。彼は「選択する者」。我々とも彼等とも違う。」

「水無月 小夜子はその為の羊。それに変わりはない。」

「辛いね、ミハエル。」

アリス・メーカーが言った。

「そうだな。少し……」

黒衣の男……リユーヤに 能力の使い方を教えた男・

……ミハエル・コーターはそう言って頷いた。

第33話「6対2」

「リユーヤ、起きたのか？」

小夜子がベットから出るリユーヤに寝ぼけ眼で言った。

「起こしたか？悪い。」

「いや、いい。私もそろそろ起きようと思っていた。」

小夜子が退院して3日がたつ。傷は塞がっていたが、まだ激しい運動は止められていた。その三日間、二人はお互いを求め、少しの間でも離れるのを厭うように抱き合った。退院して若い二人を止める障壁は何もなくなっていた。リユーヤは小夜子を求め、小夜子はリユーヤを求め、幾度も幾度もお互いがお互いを満たし合い、与え合った。

「小夜子、お前の傷が治ったら、俺はジョーの野望を終わらせる為に動き出そうと思う。」

リユーヤがグレーの腰掛に座って唐突に言った。

「そうか……お前の道だ……お前の好きなように選ぶといい。私はお前についていくさ。」

小夜子は敷布団の上に膝を抱えて座り込み、淡い青のチェックの柄の布団を肩まで被っていた。

「小夜子……」

リユーヤは再び小夜子の名前を呼んだ。それは、少し寂しげなトーンを孕む声だった。

「なんだ？」

「ジョーの周囲を探るのをお前に手伝って貰おうと思う。」

「ああ、構わない……私はお前を守り、お前の望みを叶える為にここにいるんだ。遠慮されたり、お前が黙って単独で危険な任務をこなそうとする方が、私にとっては苦痛だ。そういう事はしないで欲しい。」

「分かってるさ戦友。」

リユーヤは小夜子に纏わりつく死のイメージを振り払い、お互いの思いを大切にする為にそう口にした。リユーヤにとっても小夜子にとっても二人は幾多の修羅場を越えてきた、戦友である。だが、その前に二人はお互いを案じあう恋人同士でもあった。リユーヤの背負った責務も、小夜子の背負った任務も、お互いが単なる恋人同士であることを許してはくれない。だが、そんな関係だったからこそ、お互いはお互いを引き合い結ばれた。それは、戦場で咲く徒花あだばなで決して実を实らせる事はないものなのかもしれない。だが、リユーヤも小夜子もこの大きな戦争を止める為に、それに関わる小さな戦争を引き受けざるを得ないのだ。

世界を動かす 能力者、その首魁。そして、ジョー・アルシユこの二人は斬っておかなければならなかった。

首魁の名前が分かっている。だが、アレクシーナの所に来ていた人物は変装はしていたが、その人物はアレクシーナに最も近く、能力者を統括してアレクシーナの指示を 能力者にやらせていたらしい。狙い目はその人物という事になるか。

アレクシーナからジョーの側近にアリス・メーラーの名前が加わったと聞いた。小夜子を刺した少女に催眠術をかけた女の名前がアリス・メーラーだった。敵は取り合えず、アリス・メーラーの名前を秘密にしていない。挑発だろうか……

「何がだ？」

考えていただけのつもりだったが、最後の言葉は口にだしてしまっていたようだ。

「アリス・メーラーの事だ。」

「TVで見たが、かなり見えそうな人間だな……私達が狩ってきた「悪魔」とも違う。」

「人間でジョーのやり方に賛同する者がいるって事か？」

リユーヤにとって考えたくない結論だった。人間が人間を滅ぼさぬ為に粛清する。そんな事はあるべきことではないはずだという思いがリユーヤの中に確かに渦巻いていた。

「いてほしいとは思わないけど、いても不思議はないさ。」

小夜子は淡々とした口調だった。

「やつらは「悪魔」の只の人型兵器とは違う。連中も「選ばれた者」なのか？」

小夜子が肩にかかった毛布を一段と引き寄せる。

「少なくとも干渉者の人型兵器は、私やリューヤには通用しない。物理速度を上げただけで、この世界の機微、気配をまるで捉えられない。「眺める者」から力を借りてる私達の相手は、彼らじゃ無理だった。」

小夜子は辛そうな瞳を虚空へ向けた。

「「干渉者」から力を手に入れた人間が相手になると言う事か？」

「そういう事になる。そして、恐らくその敵はジョーを除いて6人。」

「6人？」

「聖書の記述だ。ケモノには7つの頭があるという。現実には666の男がいて、本人に7つ頭がないのなら、ケモノは残り6人いるという事だろう。」

「その一人がアリス・メーラーだと？」

「恐らくな。」

小夜子はそう言うってから一拍おいて、続けた。

「2対6じゃ勝負は見えてる。私とリューヤ二人だけでの暗殺は不可能だ。アレクシーナ様の協力は不可欠になる。」

「じゃあ、アリス・メーラーの名前をあえて出したのはやはり……」

「挑発だろうな。もし、我々と同じレベルの能力者が6人もいたら勝負にならない。」

「ジョーを含めて7人が……」

小夜子がフツと笑う。

「2人じゃ勝ち目がない。ジョーは身のこなしからして普通に見える。だから、そうたいした事もないと思えるけど。戦闘に特化した

第34話「閑休話」(前書き)

昨日、間違えてUPし忘れてです。
もう一話上げます

第34話「閑休話」

この一話は、仮題「シャングリラ」に登場して、消えていった様々な人々の話です。本編とはなんの関係もないので、飛ばしてもらっても構いません。この一話は一部のコアなファンからの要望により企画された一話です。

「こんばんわ〜登場しなくなったキャラ輝かしい第一位に輝いた佐藤陽子です。おばかな作者に名前すら忘れられかけていた私は、人気キャラの一人西城 真治と同時期に登場しました。読者の皆様には忘れられてるかもしれませぬねー」

「ふふふ、第1位の座は譲れなくてよ。あなたは名前すら忘れかけていたのであつて、完全に忘れられた訳ではないわ。」

「そついうあなたは……………」

沈黙

「……………誰だっけ？」

「ガーン!!!!!!!!ガーン!!!!!!!!ガーン!!!!!!!!元々リーンの後釜になってリユータと恋仲になって主要キャラになる予定だった私を……………忘れるなんて……………」

「冗談ですわ。ヨハン・クリスティアン・バツハさん。」

「そつよ、私はかの有名な近代音楽の父バツハ……………て男やんけ!私は女よ女。」

「あああああ、ビルヘルミナ・シュークリームさんだ。」

「そつそつ、口に含むととクリームが口の中に広がってえもいわれぬ……………おどりゃー何やらしとんねん!!!!」

「まあ、そつ気を落とさずに聡明な読者ならきつと名前を覚えてくださってますわ。」

「ふん。作者が忘れるようなヤツの名前なんて覚えてる訳ないでし

よ。」

「まあ、その気を落とさず……ビルヘルミナ・レイナードさん。」

「いやです。どうせ、私は作者にすら名前覚えてもらえませんかよ。へん！」

「じゃあ、私の相方はビルヘルミナさんで。」

「あいあい。」

「登場しなくなったと言えば、リッター・フォンフィールド中尉とかもですね。今は少佐ですけど。」

「呼ばれまして？」

登場するリッター。

「いや、あなたは、まだ要所所で出てくるでしょ。あたしら、全然でないのよ？存在すら忘れてね？」

「私は真治が入院するときに名前だけ出てますが。」

「ふーん。自慢したいわけ……。あ、そう。だいたいさ、そもそも、リューヤのリンの次なる恋人は私だった訳、それを「こいつは書いてて詰まらん」とかいう理由で、ドンドン登場シーン減らしていつてさ

詰まらんキャラにしたのはお前だつちゅーに、ばか作者が！！拳句の果てに、リューヤはリューヤではぼ同時期に登場のツンデレ小夜子とくっついちまうしさ、リンが生きてたんだからリンを大切にしろつちゅーに……。いい加減なんだよね！これ書いてる作者もリューヤも。」

「まあ、恋愛の機微はお若い方には理解できませんでしょうか？」

「そういうあなたは！」

沈黙

「誰だつけ？」（一同）

「国際問題になりますわよ。」（権力ビーム・ビビビー）

「冗談ですわ。アルテイル・ヘン・ミュール閣下。」

「だいたいさ！私達の仲間だった。ミハエル・コーターもロード・

第35話「敵」

アルテイル公国についたリユーヤと小夜子は、不穏な気配を感じていた。

「見られてるな。」

「ああ。」

リユーヤは不穏な雰囲気振り払うように答えた。

甘かったかも知れない。アレクシーナ様の思考は悪魔憑きの能力者に読まれている。当然、ミハエル・コーターの事もロード・コーターの事も読まれていただろう。そして、それをそのまま放置するという事もありえない。ミハエルが簡単にやられるとも思えない。だが、次から次へとくる刺客の前に同じ場所に留まるという事が出来るだろうか？そして、ことこの状況になっても、アレクシーナ様の側に現れないという事は既に敵方についているかもしれない。人類の中にも破滅を企てる能力者がいる。今のところアリス・メーラーという女の事しか分かっていないが、ミハエルが敵になっていない保障はどこにもない。よしんば、敵になっていないとしても、味方になってくれるとは限らない。だが、もし味方になってくれれば、これ以上心強い味方はいない。

「行くしかないな……」

リユーヤが呟き、小夜子が頷く。

二人はタクシーを拾い、研究所へと向かった。

山道を歩く。昔に歩いた記憶が微かに呼び覚まされる。環境問題が叫ばれる中でも、この山だけはあまり変わっていない。

「気持ちのいい山だな。」

小夜子が素直に言った。その構えに油断はないが、少しだけ山の

風情を楽しんでいた。

「ああ。ここは、あまり変わらないな。」

「こついうとここに隠棲する人間が、世界の壊滅を許すとは思えない。期待できるんじゃないのか？」

小夜子はリユーヤの心情を慮っていた。

「そうだな。だいたいが……」

リユーヤと小夜子は長い山道を登り続ける。木の葉の匂いや、たなびく風が心地よかった。

「小夜子、お前と初めて会った時、使った技……この辺で俺が初めてやられたんだ。」

「銃弾の気配をそこから出すあれか？」

「ああ。俺はここで、ミハエルに負けた。」

二人は登り続ける。

「私も最初は度肝を抜かれたよ。負けた時は正直悔しかった。」

「俺もだ。」

二人は軽く微笑んだ。これが世界の命運を賭けた道行きでなければ、楽しい遠足であつたらう。

暖かな日差しの中を二人は歩き続ける。この、平穏な世界が崩れていく……そんな事があつてはならないと、リユーヤは小夜子の横顔を見ながら思った。

「なんだ？何か私の顔についてるか？」

「いや……」

リユーヤは照れ隠しに顔を背けた。

「あ、ついたぞ。」

山道の上にログハウスが見えた。二人がそのログハウスを見上げた瞬間、殺気が走った。二人が身構える。

「漸く、来たか。リユーヤ・アルデベータ。水無月 小夜子。」

ログハウスの陰から三人の男が現れた。一人は知った男……

・ミハエル・コーターだった。

「味方になつてもらおうと思つて来たんだけど、そういう感じじゃ

なさそうだな。」

リユーヤが銃を抜いた。

「俺は、お前の味方だ………ただし、敵でもあるがな。」

ミハエルも銃を抜いた。三人の殺気は本物だった。何かを試してるといった感じはまるでない。

ミハエルの姿が急に消えた。

後ろ！………リユーヤと小夜子は前に転がった。

銃弾がリユーヤの頭のあった辺りを飛んでいき、地面にめり込んだ。

「なんだ？今のは？前にいた敵がいきなり後ろに現れた。そして、間違いなく殺す気でいる。」

「前の二人は私に任せろ。お前はその男を！」

小夜子が前に走った。ミハエルの銃口が小夜子を狙う。リユーヤが飛びつき、銃弾はあらぬ方向へ飛んでいく。

「本気か？」

馬乗りになったリユーヤが問った。

「本気かそうでないか。分からないのか？」

「そうじゃない。あんたも世界を滅ぼす為に動くつてのかつて事だ。」

「それも本気が分からないのか？」

ミハエルが拳銃の底をリユーヤの頭に向けて振り下ろした。リユーヤはかわす。だが、代わりにミハエルは脱出した。

「この世界の再生に邪魔なんだよ。神の代理人。」

「俺はそんな偉そうなものじゃない。」

リユーヤが拳銃を撃つ。また、ミハエルの姿が消えた。

後ろ！？リユーヤは前転して逃げる。銃弾はまたも、リユーヤの頭のあった辺りを飛んでいった。

「我々、二人を相手にする気か？ミス水無月。」

「仕方ないだろう。リユーヤは手が塞がっている。」

「ふむ。私に任せて貰えないかな？剣と刀。どちらが上か知りたいのだ。」

片方の男が剣を抜いた。

「なら、俺はリユーヤを片付ける。」

もう片方の男が言った。

「いかせるか！」

小夜子が刀を払うが、剣で止められる。

「君の相手は私だ。」

「クツ。」

小夜子は刀を回し、剣の男に切りつけた。

第36話「戦闘」

「リユーヤー！もう一人いったぞ！！」

小夜子は目の前の敵と剣を交え、鏢迫り合いのまま言った。喋った瞬間に、相手は一層剣圧を強める。小夜子は刀の方向を下へとずらし、力を逃がし脱出する。お互い距離を取る。

「さすがは、歴戦の勇者 水無月 小夜子。心躍る。名乗らせてもらおう。私はジーク・エ・ドルナミス。剣暦は30年だ。」

「私は水無月 小夜子。日本の一介のエージェントだ。」

「そして、リユーヤ・アルデベータのナイト……………」

ジークの台詞に小夜子が頷く。

「いざ、参られん。」

ジークはそう言つて剣を小夜子の鼻面へ向けた。

まずい。2対1はまずい。ミハエルの技の正体が見えていない。

何がしかの幻術か？それとも、何かの手段で信じられない高速移動をしているのか？小夜子が手こずっているところを見れば、こいつらも「眺める者」から力を借りている俺達同様、「干渉者」から何らかの力を借りている。そして、その力は、今まで相手にして来た「干渉者」の使いの比ではない。足音が近づいて来る。来るのか？もう一人。心が焦る。はやるな、合気の修行の時を思い出せ、感覚を拡散させ。事態だけを事象だけを読むんだ。

リユーヤが目を瞑る。

「降参か？リユーヤ？」

ミハエルの声が聞こえる。殺気がもう一つ近づいて来る……………
……………ミハエルに銃を向けたまま。反対の手でもう一つの銃を抜き、素早く撃った。ミハエル以外のもう一つの殺気に向かって……………

……
「グワツ。」

男の悲鳴が耳に流れ込む。致命傷ではない。だが、どこかにあつた。恐らく肩……その気配は分かる。

「無我の境地というヤツか？」

ミハエルの引きつった声が聞こえる。もう一人の男が殺気を向けて立ち上がる。リユーヤは迷わず撃つた。今度はかわされた。見えなくても分かる。

「光という最大最速の情報感知システムを遮断して、それより早い対応をする……そんな事があり得るとは思っていないかつたんだがな……」

リユーヤはミハエルの挑発に乗らず、喋らない。言葉を発すること。それが今ある感覚を鈍らせる。それは分かっていた。

ミハエルが合図する。男がリユーヤに向かってくる。リユーヤが銃を乱射する。敵は全ての弾丸をかわして、突進してくる。弾切れ……致命的だっただろうか。リユーヤは体の任せるまま、ミハエルに向けた銃口をもう一人に向けた。

「チエツクメイト。」

ミハエルの声が聞こえ、次の瞬間にミハエルの気配が直後ろに現れた。銃口はリユーヤの頭に向いている。ミハエルが引き金を引き絞る瞬間、リユーヤの体に電撃のような光が走った。少なくともリユーヤはそう感じた。あり得ない速度で、リユーヤは発射された弾丸をかわす。

「馬鹿な!!!」

ミハエルの声がこだまする。居合いの達人の剣は、人が引き金を引き絞るよりも早く人を斬れる。だが、それは同じ動作を何万回、何十万回と繰り返し、考えるよりも早く動け、なおかつ何の無駄もない動きが身についたの話だ。今のリユーヤの動きは、やはりあり得ない。

男の突進が止まる。リユーヤは倒れながら、銃口を男の額にあて

「ミハエル！！！！目的を忘れるな！帰るぞ！」

「ウォルターが！！！」

ミハエルも声を出す。

「分かっている。互角の戦いをする為に我々は来た訳ではない。それを忘れるな！」

ミハエルはやり切れぬ顔をし、リユーヤの前から消え、ウォルターの側に現れた。

「また、会おう。ミス水無月。ミスターリユーヤ。」

そう言っつてウォルターとミハエルは消えた。

第37話「涙」

死んだ。死んだ。一人、死んだ。誰がだ？ウォルター。俺は知らない。そう君は知らない。計画は狂う？いや、狂わないさ。一人くらの誤差は修正できる。やはり、恐るべきはリユーヤ。リユーヤ。始末しなければ、この先、どうなるか分からない。始末しなければ、始末しなければ、始末しなければ、

「始末しなければ！」

ジョー・アルシユは自分の声で目を覚ました。ジョー・アルシユは半身を起こし、夢の中の声を振り払うように頭を振った。

今の夢は何だ？いや、誰の声だ？最近、頭の中で自分以外の者の声がする。私は狂ったのか？ウォルターなどという人物を私は知らない。何故、知らない人物が死んだ事を私が知っている。誰か一人が欠けた。それは間違いない。それが、私には分かる。何が欠けたのだ？死人など毎日掃いて捨てる程出ている。私に何か関係ある人物なのか？関係ない。

関係ないはずだ。私は私のやるべき事を成すだけだ。私の成すべき事。それは再生。人類の再生だ。

ジョーは再び頭を振って、側にあるコーヒーカップに手をやった。白い陶器のコーヒーカップには飲み残しの冷めたコーヒーが残っており、ジョーはそれを口に含み、一気に飲み干した。

「いるか？」

ジョーは気配を探すように言った。

「お側に。」

黒衣の装束に身を包んだミハエル・コーターが、ジョーのベッドの横に控えていた。いつの間に来ていたのだろうか？相変わらず目の前に姿を見せるまで気配をまるで感じない。

「ウォルターという人物が近日中に死んだかどうか確かめられるか？」

ジョーの言葉は冷たい響きで部屋の中にこだました。この部屋は防音盗聴防止付きの部屋である。窓も二重に嵌められており、声の外に漏れる事は絶対にならない。それでも、この言葉を言うのは躊躇われた。只の夢の話かもしれないのだ。

「ウォルター………ですか？」

ミハエルは動揺を隠し、静かに言った。だが、ジョーはその響きの中に何か違和感を感じた。

「知っているのか？」

「リニューヤ暗殺の部隊の殉職した人間の中に、同じ名前があります。」

「そいつも、能力者だったのか？」

ジョーはコーヒークップを寝台の横の台に置いた。

「能力、能力。両方を持つ逸材でした………」

ジョーの目から涙が零れる。

「いかなさいました？」

「何故かは分からないが、とても、とても悲しい気分だ。恐らく、私にとって、とても大事な人間だったのだろうな………」

ミハエルは顔を下げ、肩を揺らせる。泣いているのだろうか？世界崩壊のシナリオを描き、アレクシーナを騙し、ラスアの暗殺を手配したこいつでも、やはり泣くほど悲しい事があるのだろうか？顔を下げているせいか、顔までは見えない。だからといって、それを見る気にはなれなかった。

「ジョー様、我々の作戦には犠牲者も出ます。それを押して、ジョー様には頑張つて頂かなければなりません。」

ミハエルが俯いたまま、唐突に言った。

「それが、私の覇欲から来ているとしてもか？」

ジョーの目からはもう涙は流れていない。

「そうです。」

ミハエルは顔を上げてそう答えた。

「リユーヤ、これは……」

小夜子は目の前の死体の前でそう呟いた。辺りにはもう人の気配はない。

「やはり、小夜子の予想があたっていたな。」

リユーヤも小夜子の横に立って、死体を見ていた。ウォルターと呼ばれた男の死体の右腕に、666の痣が綺麗に浮かんでいた。

第38話「世界の崩壊」

日本の紫炎教本部は、その日、朝から暗雲が立ち込めた天気だった。まるで、神が怒っているような気配が、まざまざと紫炎教本部を支配する。怒り、悲嘆、憎悪、不安、そういつた負の想念と呼ばれるものが、圧迫感となって紫炎やその従者の鈴や鋼を不安にさせていた。気が晴れないのは立ち込める現実の天候の暗雲のせいばかりではない。この世界の未来にも間違はなく暗雲が立ち込めており、それは実現しようとしている。

壊れてしまう………

紫炎の心の中でその言葉が流れた。自分達が必死で動いてきた結果。今、それが出ようとしている。いや、出来た事、選べた事、それは誰にとってもあまり多くはなかったし、自分はこの世を俯瞰して見、いつも俗世から身を一步引いた所で見続けていたのだけれど、それでも、この世界の崩壊など見たくはなかった。

リューヤにリーンを救おうとする道を選ばせ、世界の崩壊の意味を悟らせ、それでもなお「足掻く者」としての道を選ばせた。運命を変える為に、リューヤをリーンの元に走らせ、七者会議を開いた。ジョー・アルシュとも面会し、何とか翻意させようとし、アレクシーナには世界の舵取りをしてもらおうとした。

だが、どれも大きな成果とはならなかった。せいぜい成果と言えば、小さな運命が変わり、アレクシーナとリューヤの骨肉に近い争いを避けただけの事に過ぎない。アレクシーナがやるはずだった宿命は、ジョー・アルシュに引き継がれ、リューヤは小夜子を選んだ。紫炎教という宗教を立ち上げ、多くの人間に関わり、小さな所からも運命を変えようと試みた。だが、結局、どれも世界の大きな流れを変えるには至らなかった。それは、偏ひくえに、自分の力が足りな

かつただけなのかもしれない。

自分の未熟さを呪う事もあったし、神の課した自分の、また世界の宿命を呪う事もあった。だが、呪ったところで同じなのだ。どう足掻いたところで変わらぬ事は変わらぬし、目覚めぬ者は目覚めぬ。ならば、この世界での自分の役割を知り、懸命に生きる事。それ以外にやれる事はなかったはずだ。そして、自分、矢口、涼子は紫炎として生き、人の宿命に関わり必死に生きた。

時に冷静な預言者の仮面を被り、時に堪らぬ感情で泣いた。そして、人々の先に見える様々な宿命と共に戦おうとし続けた。

出来た事はまだあったかもしれない。だが、その事自体に後悔はない。

それでも、目の前に定まったこの世界の命運を見れば、まだ、出来た事があったのではないかと悔やまれる。この先、即座に起こる事は、恐らく、確定である。誰にも避けられないだろう。

それでも、リユーヤ・アルデベータという男に期待したかった。「干渉者」でも「眺める者」でも「神」の味方でもない、ただ、この地に生きる者の味方……そして、巨大な力を与えられた者に期待を寄せたかった。たった一人で世界を変える事は出来ない。それは、痛い程感じている。それでも、可能性がある方向へと動いたはずだ。リユーヤもアレクシーナも小夜子もリーンも西条も私も。

ただ、間に合わなかった事が酷く悔やまれる。後悔とは間に合わなかった時にする物だ。それが、今である。ただ、それだけの事だった……

「雨が降り始めました。」

鈴が言った。

「嵐の予感がします。」

鋼が続けた。

「この世界の終焉が」

「近づいている」

「予感がします。」

紫炎は黙って二人の言葉を聞いた。この部屋に二人以外はいない。だが、講堂以外の紫炎教本部には盗聴器が残してある。演じなければならなかった。

「大丈夫。これから、禍つ事が起こります。ですが、彼なら……・リユーヤ・アルデベータなら間に合わせれるかもしれません。」

嘘だった。絶対に間に合わない。いや、今の状況では不穏な気配に気付くの間山だろ。紫炎にはそれが分かっていた。

「そうでしょうか？」

「鈴は」

「鋼は」

「恐ろしくて」

「不安です」

紫炎は予言者の仮面を被り静かに言った。

「彼らの動きに期待しましょう。何があっても、決して諦めてはなりません。」

紫炎は雨の降り始めた外を見ながら、崩れそうな外面を必死に保っていた。

西方連合の一国の作戦指令本部に入電が次々と入る。

「7211、6358、9マルマル、作戦開始。」

「7211了解。」

「6358了解。」

「5404、最終チェック完了。」

本当にいいのか？作戦を聞かされてからずっとそれを考え、もう考え尽くした。結局、自分は軍人である。上の命令には逆らえない。それでもその疑問はずっと心の中で囁かれた。

その男は今になっても、そんな事を何度も考えていた。この先どうなるかは分からない。だが、後戻り出来ない所にいこうとしている事は間違いなかっただろう。

「発射準備！繰り返す、これは演習ではない」

男は自分の疑念を振り払って言った。「自分は軍人である」と言い聞かせて………

「30秒前」

「25秒」

「20秒」

「15秒」

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1」

「発射！！！！」

その掛け声と同時に、核ミサイルが空を飛んだ。

第39話「リーンの涙」

「なんだ？」

リユーヤはアルテイル公園の空港で、言いようのない悪寒を感じた。今までに感じたどんな気配よりも禍々しく決定的だった。

「私も感じる……この気配……なんなんだ？」

小夜子は奇妙で真つ暗な、空から来る圧倒的な気配を背中で受け止めながら返した。

「間に合わなかったのか？」

リユーヤが絶望的な言葉を口に出す。

「分からない……」

小夜子も動揺していた。初めてにして、決定的で圧倒的な気配。

それが、小夜子の心も動揺させていた。何もかもが壊れていく、そんな気配だった。

「空が……落ちてくる……そんな気配だ……」

「そうだな。そう表現するのが一番適切なような気がする。」

小夜子は落ちてくる空を見上げながら、静かに言った。

「なんですと！」

アレクシーナが電話口で声を荒げた。側で聞いていた西城とリン、そしてリッターがビクリとする。今までアレクシーナがここまで声を荒げた事は殆どない。

「それは、確かなのですか？……ええ……ええ……」

「……ですが、私は今この状況で打てる手を持ちません……」

「……それは……確かに、そうなのですが……」

ええ……仕方ありませんね……事は特殊能力者達が
関わる事、確かに普通の軍隊では難しいかもしれませんが……
簡単に動かせない？……それは理解できます。下手に動かれ
ば、世界中を巻き込んだ泥沼の抗争になりかねませんから……
ええ……ええ……我が国に出来る事があ
るでしょうか？……ええ……そのように計られています
……いえ、過分な御期待と思われれます……我が国
も全力を尽くします……綿密な作戦はそちらの部隊がつい
てからで……下手な動きは能力者に気取られますから
……では、失礼します。」

アレクシーナは電話の受話器を置き、フウと溜め息について顔を
引き締めて西城達の方を向いた。

「やっぱり、何かあったんで？」

西城が聞いた。

「西方連合の一國が平和連合の一國に核を投下した。」

「……！」

「！」

「やはり……」

驚いている西条とリッターを横目にリーンが静かに呟いた。

「平和連合も発足したばかりだ。そのうちの一つ、軍隊も小さく国
力も低いR国が狙われた。」

「やはり、ジョー・アルシュの仕業なのでしょう？」

リッターは動揺する自分を限界まで抑えて尋ねた。

「そう……なのだろうな。」

アレクシーナが少し悲しげな表情をする。

「彼らも焦っています。万端ではない準備で、決行を早めたよう
です。彼らに何が起こったのかはわかりませんが……」

リーンがどこか寂しげな意口調で語り、アレクシーナが頷く。

「こうなった場合、どうすべきかは伝えておいた通りだ……
オプシオン（ダブルゼータ）を発動する。ただし、アメリカか

「ら 能力者の特務部隊が到着するのを待つてからだ……」
アレクシーナには既に動揺の気配はない。予測はしておいた事だ。その時期があまりに早かった。それだけの事だった。

「アメリカにも 能力者の部隊があるんで？」

西城がアレクシーナに尋ねた。

「軍事超能力の研究はかなり昔に打ち切ったと聞いていたが、そう単純には出来ていない。」

「極秘事項を打ち明けてでも、ジョー・アルシュの暗殺に乗り出す。そういう事ですか？」

「世界の崩壊の時など誰も望みはしない……そういう事だ……」

アレクシーナはそう言つて一息ついた。

「リッター、至急リユーヤと連絡をとつてくれ。西条は陽子からの上がりうるだけの情報を届けてくれ。」

「は！」

「はい！」

リッターと西城が退席し、リーン一人が残る。

「お前の心配していた通りになったな。」

アレクシーナが静かな口調で言った。

「私は心配などしておりません。私は預言者ですから……」

アレクシーナは一瞬目を逸らせて、再びリーンに視線を戻した。

「私の前で隠す必要はない。泣きたい時は泣けばいい。」

「いえ、私は……」

アレクシーナがリーンの目を見て小さく頷く。

「じゃあ、少しだけ……ごめんなさい……」

リーンはその場で、生き返つて初めて泣いた。

第40話「能力者」

「あなたが、リユーヤ・アルデベータ少佐か？」

アメリカからやって来た5人の部隊の長が聞いた。

「ええ。私がリユーヤ・アルデベータです。あなたが、ジョージ・L・マッケンフィールド中佐でありますか？」

「敬語は略してもらって構わない。私の階級は、君の階級を聞いてからつけられた便宜的な物だな。本来は中尉だ。……負けず嫌いなのだよ我が国は……」

リユーヤは苦笑いした。それを見てジョージ・L・マッケンフィールド言葉を続ける。

「作戦の指揮は君がとって欲しい。上からいろいろ言い含められているが、この作戦は世界の運命を決める重要な作戦だ。失敗は許されない。」

「ええ。」

リユーヤが生返事をする、小夜子が横から口を挟んだ。

「いえ、作戦指揮は中佐にとって頂いた方がよろしいかと思われま。リユーヤ・アルデベータ少佐は、感情的というか、情動的といえますか、上に立って作戦を指揮する冷静な指揮官タイプとは異なります。」

小夜子は直情的な瞳でジョージの目を見詰めた。

「そうですね……俺は指揮官ってタイプじゃない……」

リユーヤは正直に言った。

「君が、ミナヅキ・サヨコ少尉か。」

「は！であります。」

「リユーヤ・アルデベータ少佐の護衛として、たいした成果を上げていると聞いている。」

「光栄であります。」

「我々の 能力部隊もそれなりの訓練をしてきた。君達の噂をいろいろ聞いて、そこから発展させての訓練もしてきた。自信はある。だが……実戦に勝る経験はないと私は思うのだ。」

「……」

「君達は「ナンバーオブビースト」との実戦経験がある。そして、その内の一人を倒したと……」

「はい。偶然に近い決着でしたが……」

リユーヤが少し困ったように返事をする。

「それを押して、私に作戦指揮を取れと言うのかね……」

「それは……」

小夜子が押し黙る。

「まあ、いい。その事に関してはアレクシーナ女王と、私の上と話して見よう。その前に……」

ジョージ・L・マッケンフィールドはそこで、一瞬口を止め、続けた。

「作戦までに短い時間しかないが、その経験を我々に伝えて欲しい。少しでも勝率を上げておきたいのだ。」

「分かりました。」

「リユーヤ少佐に、ミナヅキ少尉、長旅で疲れているだろうが、一時間後に訓練に入りたい。」

「了解しました。」

リユーヤと小夜子は同時に返事をした。

西城は個室に籠り、タバコを蒸かしていた。落ち着かない。核が投下された瞬間、確かに何かが壊れるような気配を感じた。薬を飲んでから、何かがおかしい。普通の間人が感じられないような物を前より深く感じられるようになっていた。暴力の世界に身をおいてい

る。だから、相手の力量や、危険度という物を肌で感じ取れるという事は前からあった。そういう感覚が前より鋭くなっている。それだけではない。他の人間の動作が、先に見える……今の画像と違うのは分かっているのだが……そういう事が何度も起こっている。薬の後遺症が残っているせいかもしれないが、どうやらそういう事ではないらしい。あれをきっかけに、どうやら自分の内部にある、能力とか 能力とかいう物が覚醒し始めたらしい。確か、能力も 能力もどの人間にも眠っている「力」だと、リンが言っていた。訳の分からない能力によって、自分が感じていた世界が壊れていく……今まで自分が知っていた、分かっていたつもりでいた世界が、凄く狭い世界だった事がよく分かる。それが、酷く広い世界を認識出来るようになった。リユーヤや小夜子、リンや紫炎はこういう世界で生きていたのだ。それが、少し分かる気がした。だが、自分のいた世界はあくまで、昔感じていたあの世界だった。その変調が自分でも分かる。

自分の世界がほんの少しずれた……それがどうしたってんだ……

西城はそう思ってタバコの火を消した。

自分はリユーヤや紫炎の世界に巻き込まれたのだ。いや、自分から望んで巻き込まれていったのだ。その事自体に後悔はない。薬にしたところでそうだ。自分が飲まなければ、あるいは全滅していたかもしれない。それは、自分にとって許せる事ではなかったはずだ。今感じているような違和感など、あの時に薬を飲まなかった場合の後悔に比べれば、どれ程の物でもない。

問題は、リユーヤ達の作戦の間、アレクシーナ・クライを守る為

に薬を飲むかどうかだった。本当はあの時全ての薬を飲んでいない。アレクシーナは一時的に覚醒する為の3倍の量の薬を渡してくれていた。万が一体質によって、効き目が薄い場合の為だった。

自分は、その時、一般量の薬を飲み覚醒した。残りの薬の一回分を、アレクシーナに返した。アレクシーナ様は二度と使わせないと言っていたし、いぶかしんだが、100%の効き目が欲しかったと言っでごまかした。自分は適応量の一回分を万が一に備えて隠している。それを使うべきかどうか、迷っていた。いや、考えていた。使う事は決心しているのだ。だが、使った後の後遺症はアレクシーナに当然知れる。危険な事態にならないければ、使わないですむ。それならば、それですむのだ。

だが、その薬を使わねばならない時が来る事を、西城は予感していた。ほんの少しだけ覚醒した能力だか 能力だか訳の分からぬ能力が、それを使う事態が来る事を告げていた。

肝はひを括らないとな・・・・・・・・・・

西城はそう自分に言って、再びタバコに火を点けた。

第41話「5人のナンバーズ」

漆黒の闇の中、蝋燭が燈る。この部屋に電気製品はない。6人の、いや、今は5人になってしまったが、ジョーアルシュを除くナンバーオブビーストの会合の場だった。この場所は地下にある。風も吹き抜けない密閉された地下室である。

「連中に何人か新しい味方がついたらしいが？」

レー・ルーク・シエペシは、静かに言った。ミハエルがレー・ルーク・シエペシの方を向く。

「アメリカから5人、ロシアから3人、ヨーロッパ連合から3人、アルテイルから1人、計12人だな。兵として訓練された能力者は存外少ない。」

「12人か……人数的には我々に勝る、そういう事が……」

シーザー・ホワイトが苦々しげに言う。

「問題はないでしょう。天然の能力者とは言え、リユーヤや小夜子に勝るとは思えない。「人形」を20体も用意してやれば、十分あしらえるわ。もちろん、一般の警備兵もいる訳だし。」

紅一点のアリス・メーラーが語る。

「この世界に悪影響を与えない、「人形」の数はいくつだったか？」
ジーク・エ・ドルナミスが蝋燭の火を悩ましげに見詰めながら聞いた。

「33体、それ以上は、この世界のバランスを崩す恐れがある。」

真っ黒な衣装に包まれたミハエルが、静かに喋った。

「33体も用意すれば、確実に追い払えよう。」
ジークはミハエルの方を向く。

「いや、油断は禁物だ。恐らく作戦の指揮は能力者、恐らくはリー・サンドライトが取るはずだ。「人形」では厳しいかもしれん。」
アリス・メーラーもミハエルの方を向いた。

「私が「人形」の指揮をとれば、裏は取れると思うわ。個々の性能に差があるとは言え、それは人数が補ってくれる。私が能力者として、リン・サンドライトに遅れを取っているとは思えないわ。それに、「人形」とは違って、人はミスをする。」

「では、表門はシーザーとアリスにまかせる。裏門に私とジーク、そして、レーが布陣する。」

「我々が裏門に配置する意味は？」

ジークが訝しげな表情をする。

「敵は正面を囿に、裏から最も戦力の高いリユーヤと小夜子を突入させようとするはずだ。」

「裏門が本命という事？」

「いや、アレクシーナの頭の中では、恐らく陽動だろう。限られた人数の中での陽動故に、最も戦力の高いリユーヤと小夜子をもってくる。リンの指示なしに動いて作戦を遂行して、なお助かる可能性があるのはリユーヤと小夜子のペアだけだ。正攻法で道を開くのが好きなアレクシーナは、必ずこの作戦を選んでくる。」

「しかし、他の連中も作戦の立案に加わるのでは？」

「……まず、連中にとっては他国の内部で起こす動きだ、軍を潜入させるには戦争が必要だ。故に、あくまで隠密、能力者だけしか、作戦には参入させれない。他の協力者がいるとしてもサポートどまりだな……そして、各個で動いた場合は、我々5人に一人一人始末される可能性がある。故に、バラバラに潜入させるという手段もあり得ない。バラバラに潜入させた場合、人数の有利、この場合天然能力者の数だが、それが無効になる可能性がある。その愚は犯すまい。人数は限られているし、軍事的訓練を受けた能力者は補充がきき辛いからな。また、そういう戦略を選び易いように、わざわざアリス・メーラーの名前をちらつかせて、防備が完全であると知らせてあるわけだ。……あと、選びうる作戦は、小隊に分けてバラバラに分けて潜入する作戦だが、この場合は我々の監視とトラップを潜り抜ける事はまず不可能だ。」

アレクシーナもそれくらい的事は見通しているだろう。故に、まず、正面と裏門からの突破……この戦略をとってくる。他にも多少の陽動はあるかもしれないがな……」

「空からの潜入はあり得ないかしら？」

アリスが唐突に言った。

「空から潜入？まあ、警戒はしているがまずあり得ない。空から来る戦略は、相手に気付かれない場合に多少有効だ。だが、今回は我々が気配を拾う。察知されれば無抵抗のまま打ち落とされる。アレクシーナが能力者の存在を知って、更に取り取る戦略とは思えない。こちらが、能力者を配置して、ある程度の情報を集めている事はアレクシーナも知っているはずだ。ならば、リスクの高すぎる戦略は恐らくとるまい……」

「地下からの潜入も同様にあり得ないという事か……」

ジークが口を開く。

「奇策は予想外だから効果がある。だが、今回は時間も無く、気配も読まれる。お互いの配置出来る駒の数からしても、正面からの抗争と陽動、裏面からの潜入と陽動、これがベストになると思う。私がアレクシーナでもそうする。」

「側面は嚴重すぎるトラップで囲まれているな。ジヨールの仕事の性質上、表口と裏口は通れるようにしておかなければならない。そこを突いて来る……そういう読みという事か……」

「ジークが納得のいった表情で頷く。」

「ジヨールは事が終わるまで、病欠と言う理由で休ませておいてもいい。そして、表口も裏口も完全なトラップで囲む。そうすれば、決着は遅れるだろう。こと、ここまで来れば、決着を遅らせるだけで、ジヨールにとっては有利な展開になる……だが……」

「分かってるさ。決着をつけねばならんのだろう？」

シーザーがそう言って薄笑いを浮かべた。

「そういう事だ。リユーヤ・アルデベータとジョー・アルシュ・・・
・・・いや、リユーヤ・アルデベータとナンバーオブビースト、その
決着はつけねばならない。最後の戦いだ。皆、それぞれの任務を
きちんと果たしてくれ。」

「分かっている。」

「イエス。」

「健闘を！」

「了解」

5人はそこで揃って頷いた。

第42話「作戦前夜」

リン・サンドライトと作戦指揮官、そして西城 真治、サポート要員を含めて100人近い人間が、S国のS市街に入り込んでいた。この街の山間部にジョーの邸宅はある。ジョーの邸宅は昔貴族が使っていた物で、城のように大きい。正門と裏門があり、庭もかなり広い。作戦はミハエルが予測したように、正門と裏門からの二面突破である。作戦の決行は明後日の0100（ゼロイチマルマル）。午前1時ジャストである。

西城は覆面を被った作戦指揮官の横で、あらぬ事を考えていた。西条の今回の仕事はこの誰だか分からない作戦指揮官の護衛である。いや、西城にはその正体は分かっていた。だが、その事は作戦が始まるまで喋る事ではない。それは重々承知していた。西城の憂鬱はそんな所にはない。

作戦本部のキャンピングカーの中に次々と入電が入る。煩わしい音だ。その、電子音に近い入電が、西城の神経を更に苛立たせ、この期に及んであらぬ事を考えている自分を、一層不愉快な気分にならせていた。

リンも紫炎もジョー・アルシュを暗殺する事にあまり意味はないと言っていた。本当にこの作戦が人類の命運を分ける作戦なのだろうかという気がする。確かに戦争としての破滅は避けられるのかもしれない。だが、人類が抱えた破滅への様々な問題、それを解決する事にはならないのではないだろうか？個々の努力によって破綻を少しずつ避けていく。そういう地味ではあるが、とても有効な方法が必要な時期ではないかと思われるのだ。

確かに、すぐさまの世界の破綻と再構築を、自らの手を汚さぬ戦争によって目指すジョー・アルシュを倒す事に一定の意義はあるだろう。だが、世界中に散らばった能力者が消える訳ではない。そして、人類が目覚めず、地球自体に壊滅的打撃を与え、人の住めぬ

環境にしてしまふ可能性も消えてはいない。にも拘らず、西城自身もこの戦いが世界の命運を決める戦いである事をひしひしと感じるのだ。

アレクシーナやリン、そして紫炎はこの感覚をもっと鋭く捉えているはずだ。一体何が始まるというのだろうか？それをもう少しハッキリと知りたいと思った。だが、同時に知らないままの方がいいような気もしていた。

「サイジョーさん、気を落ち着けてください。」

次々に入る入電の処理をしながら、リン・サンドライトが言った。

「落ち着かないように見えるかい？」

西城はこのリン・サンドライトという女がどうも苦手だった。

「ええ。いろいろ思われる事もあるでしょうが……」

西城はフツと自嘲した笑みをみせた。

「今は目の前の任務をこなす事が重要……って事だな。」

「そうだ。迷っている時間はないぞ。恐らく当座の最後の決戦だ。」

覆面の指揮官がボイスチェンジャーをつけた声で告げる。

「タバコを吸ってきます。」

西城はそう言つて、キャンピングカーのドアを開け、雨の降る繁華街に足を降ろした。

借り受けられたホテルの一室に、リユーヤと小夜子がいた。リユーヤは綺麗に整えられたベッドの上の、白い布団の上に座り、床に視線を落とし、小夜子は窓から雨の降る街並みを見詰めていた。

「怖いのか？」

小夜子が外を見詰めたまま問つた。リユーヤは床から小夜子に視

線を移し、「いや、大丈夫だ。」と答えた。

「そうか．．．．．強いな．．．．．私は強がりと言う余裕もない．．．．．」

小夜子の視線はあくまで街並みに向けられたままだった。

「そうか．．．．．正直言えば、俺も少し怖い．．．．．」

小夜子が振り向き、笑みを見せる。

「恐らくこの戦いの結末で、世界は変わる。能力者でない私にもそれくらいの予感はある。そして、お前は生き残る．．．．．それも分かる。」

自分は生きていられない．．．．．そういう確かな予感があった。だが、それは口には出せる事ではなかった。

「俺が生き残るかどうかなんてどうでもいい．．．．．俺の願いが叶った時どうせ俺は．．．．．」

小夜子が少し悲しげな表情をした。

紫炎を通した「眺める者」との契約の中で、リユーヤは自分の存在と引き換えに力を得た。事が終わればこの世界から自分は消える。そういう契約だった。小夜子が何を賭けたのかは知らない。だが、小夜子もまた何かを失うのであるう．．．．．一方通行の「神」の恩恵．．．．．奇跡．．．．．を受けれる程、自分は強くも優しくもなかった気がする。小夜子が自らの生に対し、実直に生きてきたのに比べ、自分の生き方は弱く、甘えた物だった気もする。

自分の存在を賭け、自分の命を賭ける。それは一見格好のいい物に見える。だが、それが本当に正しいのかどうか今の自分にはよく分からなくなっていた。自分がリーンを思ったように、リーンもまた自分を思っていた。自分が小夜子を思うように、小夜子もまた自分を思ってくれている。その中で、何があるうと自分の存在や命を軽々しく賭けてはならないのかもしれないと思える。例え、世界の破滅が懸かっているように、例え、大切な誰かの命が懸かっているように、自分を差し出してはならなかったのではないかと、今は少し

思う。

自分の存在を賭け、世界の命運を救い、自分が消える。世界の破壊の回避という望みを叶える代わりに自分が消える。自分はいいかもしれない。だが、残された者の思いはやはり簡単には消えない。それも時が解決する。それは間違えようの無い事だ。それでも、自分の身勝手な賭けにより自分が損なわれる事を悲しむ人間がいる。それを思えば、自分の差し出した物は正しくはなかったのかもしれないとも思える。

「リユーヤ。お前は何があっても生き残るんだ。お前は世界にとって「特別」なんだから……」

小夜子が言った。リユーヤは顔を背ける。

「小夜子、お前も生き残るんだ。お前は「特別」な俺にとって「特別」なんだから……」

「特別」な人間などいはいない。いや、いるとするならば、常に誰かにとって誰かはいつも「特別」なのだ。

「もちろん、お前を残してむざむざ死ぬ気はない。だけど、私は死ぬかもしれない。それを覚悟しておいて欲しい。何があっても、前に進むと……そう、決めておいて欲しいんだ……」

リユーヤは一瞬躊躇い、目を瞑り、開けてから

「分かった。」
と告げた。

「小夜子、お前も俺が死んでも絶対に生き延びると約束してくれ。」
それが精一杯の返答だった。小夜子がゆっくりとリユーヤに近づきキスをする。

「私は必ず生き延びる……お前の為にな……」

小夜子はそう言って再びキスをした。

第43話「決行!!!」

01時03分、ジョー・アルシュの邸宅の外壁にトラックがぶつかった。邸宅と言っても昔の貴族の家のように広い。壁は壊れ、トラックはひしゃげていた。邸宅の2階の窓にジョー・アルシュの影が映っている。その影が動き、そして、消えた。

「ジョー・アルシュは中にいる!なんとしても、ここで仕留めるのだ!」

指揮官の声が無線で鳴り響く。

作戦に参加する12名の戦士が正門前に集まり、強襲をかける為に動き出した。

「何事だ!」

ジョー・アルシュが声を上げ、ミハエルを呼ぶ。

「アレクシーナの最期の賭けです。お気をお静め下さい。」

黒衣の男、ミハエル・コーターはひざまずいて言った。

「最期の賭けだと?」

「そうです。戦争以外であなたを止める最期の賭けです。」

ミハエルは落ち着いた口調だった。

「おびき寄せたか……」

ジョー・アルシュはミハエルの声から、状況を把握した。

「左様で。ここで決着をつけてしまえば、あなたを脅かす者は存在しなくなります。ここが、正念場です。」

「私を餌にしておいてよく言うものだ。」

ジョーは不敵に笑う。

「は!しかし、まとめて始末するにはこの方法しかありませんでし

た・・・・・・・・・・」

「そう・・・・・・・・・・なのだろうな・・・・・・・・・・」

ジョーは少し困惑した表情をし、その後、顔を引き締めた。

「ならば、負ける事は許さん。絶対に勝つのだ。」

「は！前方はシーザーとアリス、それと33体の人形で固めてあります。まず、破られる事はありません。連中は、大きな騒ぎになる前に撤収しなければならぬ。それを考えれば、こちらにまず、負けはないという事になります。」

「後方は？」

ジョーが抜け目なく聞いた。

「私と、レー、そしてジークで番にあたりますれば、まず大丈夫かと。」

「あの男・・・・・・・・・・リユーヤ・・・・・・・・・・リユーヤ・アルデベータも参加しているのか？」

「情報はまだ入っておりませんが、ここで戦力の出し惜しみはないと思われませぬ。」

「なんとしてもリユーヤを始末しろ。あの不確定要素をなんとしても始末するのだ！」

「は！御期待にお応えします。」
そう言つてミハエルは消えた。

最期？最期の賭けと言つたか？フッフ。もう遅い。例え、私を殺した所でこの流れは止まりはしない。もつとも、おびき寄せた以上、防備は万全だろう。この機にリユーヤを始末できればそれに越した事はない。違う。違う？何がだ？万全な防備を潜り抜けあの男が来る。リユーヤ？リユーヤ・アルデベータか？いや、この防備は抜けまい・・・・・・・・・・最期まで煩わしい男だった。最期？違うわ。始まり。新たな始まりをこの手に。私は・・・・・・・・・・私は世界を征服する・・・・・・・・・・

「いくぞ！小夜子！」

「ああ。これがジョー・アルシュとの最後の戦いだ。」

リユーヤと小夜子が裏門目掛けて走り出す。トラックの激突に気を取られたガードマン二人を、素早く気絶させ、裏門を潜り抜けようとした。その瞬間、三つの殺気が突然現れる。リユーヤと小夜子は左右に転がって、身を隠した。

覚えがある殺気が二つ。そして見知らぬ殺気が一つ。その殺気から、三人ともが凄腕の能力者である事がひしひしと伝わってくる。2対3・・・最初の2対6の条件に比べれば、遥かにました。各国の協力がこの勝ち目のある状況を作り出していた。だが、簡単には動けない。契約を行った能力者3人を相手にするのは、やはり厳しいと言わざるをえない。

「隠れていれば、貴重な時間を無駄にするぞ？リユーヤ！サヨコ！我々の読みと手順がお前らに一步勝ったのだ。諦めて勝負をつける！」

前方から聞こえていた声と殺気が消え、リユーヤの背後に殺気が現れる。リユーヤは、前回の判断同様、前方に転がって回避しようとした。銃声の響きと共に足に軽い痛みが走る。銃弾がかすった痛みだった。

「さすがに勘がいい。だが、何度も無傷で逃げられはせんよ。」

「ミハエル・・・あなた、本気でジョー・アルシュの味方をするつもりか！」

リユーヤが油断無く身構えたまま言った。

「ジョー・アルシュの味方？ちよつと違うな・・・お前、ジョー・アルシュ、能力者、ナンバーオブビースト、そして、世界の壊滅・・・その絵図を描いたのは私なのだよ・・・」

「馬鹿な！なんでそんな事を！！！」

リユーヤは周りに気を配りながらも叫んだ。だが、確実に注意はミハエルに絞られつつある。

「ケモノには神を穢す名が冠されている………ジョー・アルシュのどこがそんな名だ？」

「まさか………」

「ミハエルとはミカエル………大天使長の名を借りた私こそが………真実の………」

「嘘だ!!!!!!」

リユーヤが拳銃を発射する。ミハエルは造作も無く避ける。一瞬我を失ったリユーヤの手をレーとジークが抑えた。一瞬の隙を見逃すほどここにいる能力者は鈍くはない。

「うおおおおおおおおおおお!!!!!!」

小夜子が飛び出し、三人を一太刀で斬れる軸線上で刀を振る。ミハエル、レーは飛びのき、ジークが小夜子の刀を剣で受け止めた。

それでも、リユーヤは開放され、刀を止めるジークに向けて弾丸を発射する。ジークがかわずと同時に、小夜子が刀を振り払った。

ジークの片袖から血が零れ落ちる。

「息はピッタリという事が………」

ミハエル・コーターはそう言っつて、銃口をリユーヤに向けた。

第44話「予感」

なんだ？こいつらは？これが、リユーヤや小夜子の言う「悪魔の使い」なのか？

ジョージ・L・マッケンフィールド中佐は耳から入るリーン・サンドライトの指示を聞きながら、そんな事を思った。敵兵の数は13人。突入してすぐ現れた敵兵のせいで、正門前で乱戦の様相である。人数的には互角だったし、個々の能力の高さでは若干、我々が上回っている。それでも、致命傷以外の傷では、敵は怯^{ひる}みもしなければ、痛みを感じている素振りもない。まるで、人間型の機械を相手にしているようだった。

恐怖は伝染する……ここでこちらが怯めば敵の思う壺だ。

『恐れず、確実に相手を破壊してください。相手は人間の形をしています。機械……いえ、ナンバーオブビーストの人形なのですから。』

リーン・サンドライトの指示だった。的確である。痛みも恐れも感じない戦った事のない相手を前にしての、人間の心理をよく心得ている……能力者といったか……分かるのだな……

そう考え、一瞬隙が出来た。隙が出来るのを見越したように敵が背後に回っていた。かわせるのか？

自分に向かってくるであろう殺気のような物が急に消えた。部下のロイド・エルツールが間に合っていた。ロイドに撃たれ、敵が一人沈む。

「中佐、御無事で？」

ロイドが油断のないまま、ジョージに言った。

「すまん。油断大敵だな。」

ジョージはそう言って微笑んだ。

「いえ、我々は勝って生き延びて、我々の世界の中で生きるのです。誰も、死なせません。」

「同感だ。悪魔かたごときに人間の強き意思が砕けるはずもあるまい。方かたをつけるぞ！」

「イエスサー！」

ロイドがそう答えた瞬間、異変が起こった。闇の向こうに蠢うごく巨体が幾つも見える。

「来ます。敵は動物型のバイオロイド。トラ型10機、熊型5機、狼型5機です。動揺なきようお願いします。」

「次はトラと熊と狼か、動物愛護団体になんと言われるか……」

「ですね……ですが、これはチャンスです。動物の強さはある意味我々に勝りますが、武器を器用には使用できません。」

「うむ。人が何故、地に満ちたか……分かっていないよ
うだな……敵は……」

「動揺が心配ですが……」
ジョージは頷いた。それと同時に無線からリーン・サンドライトではない声が響いた。

「私は作戦指揮官アレクシーナ・クライである。私もこの作戦に皆と同じように全てを賭けている。皆、これを打ち破れば、ジョー・アルシユの首まですぐだ。言うまでも無い事だが、全力を尽くし、生き延びろ！動物ではなく人間がこの世界に満ちた理由を今こそ見せよ……！」

アレクシーナの自らを振り返らない一括に、見た目に分かるほど土気が上がった。動物を兵として使われる場合、一番恐ろしいのは動揺である。それを防ぐ為に作戦指揮官は自ら正体を明かした。敵が動物型の兵を投入した効果はそれだけで半減である。

臨時の指揮官室となったキャンピングカーの中で、アレクシーナ

が覆面を外し、西城の方を見た。

「名前を明かされてよかったのでは？」

西城が静かに聞いた。

「最後の決戦だ。致し方あるまい。それに、国には影武者がいる。私に万が一があっても大丈夫だ。」

アレクシーナはそう言つて、窓から見える戦場を見詰めた。

「アニマル型の人形を一挙投入か……任せると言つていたが、アリス……やはりお前も負ける為にいるのだな……」

ミハエルがリユーヤから8メートル程離れた地点で呟いた。リユーヤ達の裏門からの侵入を少し許した場所である。裏門の内側には、ミハエル達3人と、リユーヤと小夜子しかない。

「我々が負けると言うのか？」

レーが、懐中にある短剣に手をやつたまま聞く。

「補助ではなく、動物兵を主力にしたのは誤りであろう。負けたくなければ、この場を早急に片付け、援軍に行くしかあるまい。」

ジークが剣先を小夜子の方に向けたまま言つた。

「……リユーヤは俺に任せて貰おう。二対一、ミナヅキを仕留められるな？」

「誰に言っている。」レーが言い、「剣か刀か雌雄を決したかったが、そもいまい。」ジークが続けた。

「まず、分断する。俺に任せろ。」

ミハエルがそう言つた後、その場からミハエルが消えた。背後に気配を感じると同時にリユーヤは横へ転がり、小夜子は後ろに刀を振つた。ミハエルは銃弾を発射できずかわすに留まつた。

「さすがだ、そちらも、何度も同じ手は食わないという事か？」

ミハエルが目を細め小夜子を見詰める。リユーヤが撃つ隙はない。毎度毎度、真後ろに現れるなら対処は楽だ。」

「ダンスを楽しみたいところだが、生憎、私のパートナーはリユーヤでね。」

ミハエルが小夜子から視線を移し、リユーヤに銃口を向けた。その隙を見逃さず、小夜子が刀を振ろうとした瞬間、横から殺気が走り、小夜子がかわす。短剣が小夜子のいた地面に突き刺さる。

「お前の相手は私と……」
「私だ！」

ジークの剣が小夜子に降りかかり、小夜子が刀で受け止める。

二人の相手は無理だ……

小夜子は死を予感した。

紫炎の思いが、リーンの優しさが、アレクシーナの意思が、西城の心が、そして小夜子の愛が……リユーヤに重なった。

「同じ疑問に戻るのだよ。」

今度はミハエルが目を瞑り、開け、続けた。

「世界の人間全てに、可能性があると言うならば、何故、我々、ナンバーオブビーストが現れた？「神」は人類の全てを救う気はない……そういうことだろう。」

「本当にそうだと言うならば、俺がこうしてここにいるという意味はなんだ。「神」とやらが、本当に人類を許さないと言うならば、何故、俺はここににいる！」

「死者の復活までさせて……という事か？」

「そうだ。人に……人に可能性があるからこそ俺がここにいます。違うか！」

「ならば、可能性に賭けてみるがいい！所詮、我々とは相容れぬ。」

どちらが「神」の意思か？試すがいい！」

「ああ、そうするさ！」

リユーヤとミハエルが同時に引き金を引いた。

小夜子は二人の攻撃をかわし続ける。ジークとレーは必殺の気合を込めて次々に斬り込んで来る。防御に徹さねばやられる。それ程の鋭い斬り込みだった。

小夜子は考える。守勢に回っていればいつかやられる。2対1という状況が思いの他、重い。剣を受ける事も、攻撃に転じる事も、どちらか一方には確実な隙となる。相手が達人……いや、契約者でなければ、ここまで手こずる事もない。二人ともが達人を超えた超達人である。普通なら、引いて好機を待つ。だが、今回は逃げ場がない。瞬間移動に近い能力を持ったミハエルが相手では、リユー

ヤと言えど、勝つ事は難しい。前回二対一でリユーヤが一人倒せたのは、相手の油断と、リユーヤの未知なる能力が発露した為だ。今回も同じ奇跡を望むには相手に油断がなさ過ぎる。だが、このまま二対一で戦えば、そう長くは持たない。

一人はレイピア……ならば…….とるべき手段は一つしかないな。

小夜子が覚悟を決めた。リユーヤに生き延びると約束をした。しかし、約束は守れそうにない。これが現状で取れる最善の方法なのだ。リユーヤの命、自分の命。優先すべきがどちらか？それは決まっていた。私はリユーヤを守る為に生きている。それが答えだった。小夜子が急に攻勢に転じる。ジークに向けて一直線に全てを込めて攻勢を仕掛ける。

「死ぬ気か？」

ジークが刀を受け止め、言った。

「ああ。」

小夜子は受け止められた刀を剣の上を滑らせ、ジークを斬った。浅手ではない。だが致命傷でもなかった。剣の上を滑らせた為、剣に込められた力が小夜子の方に流れる。小夜子そのまま剣を体に受け、刀を左から右に払った。今度は致命傷である。剣の技術も刀の技術も基本的には、自分の身を守り、相手を斬る事にある。薩摩の示現流など、二撃目を考えない物もあるが、罅迫り合いからの捨て身はありえない。骨を切らせて骨を切る。無茶苦茶な戦い方と言えた。

「お見事。」

ジークがそう言うと同時に、レーが後ろから小夜子の急所を貫いた。

「殺とった！」

レーの音が響いた。かわす気など最初からなかった。数瞬動けれ

ばいい。レイピアの攻撃の基本は突きである。刺し貫かれたその時
が相手の動きが止まる瞬間である。小夜子はそのまま、自分ごとレ
ーを貫いた。

すまない……………リユータ……………約束……………守れ
なかつた……………よ……………

水無月 小夜子はリユータ・アルデベータを守る為に死んだ。

「いけない！リユーヤ！」

リーン・サンドライトが指揮官室で突然叫んだ。

「どうした？」

アレクシーナがリーンの尋常ならざる様子を見て、聞いた。

「リユーヤが……リユーヤが……憎しみに……」

リーンの気配に乱れがある。

「まずい気配がします。急いだ方がいいんじゃないありませんか？」

西城が言った。

『アニマル型のバイオロイドはあらかた片付いた。突入してジョー・アルシュを捕縛するのだ！』

アレクシーナが最後の指示を出し、防護服を着込む。

「私と西城は、皆と一緒にジョーの邸宅に突入する。残りの者はリーンを頼む。」

「は！」

「は！」

皆が返事をして、アレクシーナと西城が外に出る。西城はその時、持っていた能力発現の薬を飲み込んだ。

「なんだ？なんなのだ？この気配は？」

ジョー・アルシュが声をあげる。

「ミハエル！ミハエルはおらぬか？」

ジョーが声を上げるが、ミハエルは現れない。

終わり？終わりの時がきた。全てが終わる時がきたのだ。世界は終わる。私は……私は誰だ？世界を手に入れる者……

「ジョー・アルシュだ！……違う……違うのだ……お前は……私は……世界の終わりを導く者……オメガ・エンド・ルシファー……それが、お前の真実の名前……世界は……終わる……神の手……リユーヤ・アルデベータの力と、お前の力によって……私が……ルシフェル？そう、人を崇める事を厭った始まりの天使……明けの明星……七番目の天使が終わりを告げる……終わりを導く天使により、七番目の天使が選択する……」

「ふはははは。そうか！私はこの為に受肉したのだ。人の世界は終わり、新たな時代が来る。私の時代だ！！あはは。ふはは。あーはははははは。これで、私は始まりと終わりを納めた。私が「神」となる瞬間がきたのだ！！！！！！！！ははは。あーはははははは。」

銃声が響く。突入した部隊が、部屋のドアをこじ開けた。アレクシーナの姿がドア越しに見える。

「これはこれは、アレクシーナ女王。こんなところまで、よくお越しで。」

「ジョー・アルシュはアレクシーナの姿を認めて余裕をもって言った。全てを思い出したこの私に、人間ごときの何も通用する訳がない。ジョーはそう思い、見せ掛けだけでなく本当に余裕を持っていた。」

「これで、終わりだ。ジョー・アルシュ！」

アレクシーナの声が響く。

「ふふふ。終わり？確かに終わりですな。七番目の天使は「滅び」を選択した。この世界は滅びる。」

「何を言ってる！」

「あなた方は大きな勘違いをしている。滅ぼすのは私……オメガ・エンド・ルシファーではない。」

「ルシファー？キリスト教の悪魔の名前か？」

「そう、ジョー・アルシュとは仮初めの姿に過ぎない。私の本名はオメガ・エンド・ルシファー。真実のケモノの名前だ。だが、滅ぼすのは私ではない。あくまで、神の使い……………七番目の天使……………リユーヤ・アルデベータだ。」

「世迷い事を！」
「そしてあなたも終わりだ。」

銃声が響く。銃弾はアレクシーナの心臓に命中した。狙撃の名手、シーザー・ホワイトが奥の壁際から狙撃をしたのだ。今度はアレクシーナの兵達の銃声が響き、シーザー・ホワイトは命あるものから、ただの物質に変わった。

「アレクシーナ様!!!!!!」

西城が倒れかけたアレクシーナを抱き起こす。

「撃て……………ジョーの息の根を……………」

アレクシーナの呟くような声を西城は聞き、「撃て！」と叫んだ。兵士達は全ての銃を一齐にジョーに向けて発射した。

ジョーは、体の前に手の平を広げ、「無駄だ！」と叫んだ……………

……………だが、ジョー・アルシュの体に弾丸は次々とめり込み、ジョーは倒れた。

「馬鹿な……………私の力が……………そんな……………私は世界の「王」に……………」

ジョー・アルシュはそれだけ呟いて息絶えた。

世界中で地震が起こり始める。それは、S国のS市でも例外ではなかった。

その中、指揮官車となったキャンピングカーの中でリーンが呟く。「リユーヤ、間違えないで」と。

生きて……」

「リユーヤ？何を言ってる？」

「きつと、生き抜いて……約束だ。」

小夜子はリユーヤがこの世界から消える事を直感的に悟った。小夜子の目から涙が溢れる。リユーヤの姿が消えた。

小夜子はその場に立ち尽くし、ただ、泣き続けた。

アレクシーナが目覚めます。

「アレクシーナ様！！！」

西城が叫んだ。

アレクシーナの目に、リユーヤの姿が映る。

「リユーヤ……」

「すいません、アレクシーナ様。俺は行きます……」

「そうか……役目が……終わったのだな。」

リユーヤが無言で頷く。

「後は、頼みました。」

リユーヤはそれだけ言うと、かき消すように消えた。

「い、今のは？」

西城が聞いた。

「リユーヤは、役目を終えてこの世界を去るのだ……それだけだ。」

そう言ったアレクシーナの目にも涙が浮かんでいた。

仮題「シャングリラ3」(了)

ちよつとだけ、4に続きます。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8359c/>

仮題「シャングリラ」第三章

2009年3月28日23時09分発行